Z32-B88

金の星

十二月

■金の星■第七卷第十一號（金星社發行）
■定價金四十錢 送料一錢五厘■

国立国会
R. 3. 26
図書館

Kodak Color Control Patches
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
© Kodak, 2007 TM: Kodak

世界少年少女名著大系 (20)

小公子

金の星社編　裝幀・寺内萬治郎　畫伯

『小公子』は米國のバーネット女史の名作として、その名は世界各國に知られてゐます。家庭小說としてこれ程美しい作はないとさへいはれてゐます。日本にも早くから紹介されて、大層な評判を受け、讀まない者でもその名だけは聞いて知つてゐるといふ程です。

さて、これ程有名な物語りであるのに、大抵の少年少女はこの名作を知りません。それは特に少年少女の爲めに紹介した本が無いからで、實に殘念な次第です。

しかし、本書の出版によつて全國の少年少女諸君は、はじめて此の世界的名作に接する事が出來ました。幼くして父を失つた小公子が、神の如く氣高き母に養はれつゝ、如何なる運命を辿つたでせうか。涙ぐましいまでに、深い人生の愛を抱いてゐた著者バーネット女史の面目は、全篇に現はれて必ずや讀者に深い感激を與へやに措かないでせう。

四六判箱入美本
內容一八〇頁
插畫三色版外數頁
定價金九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金の星社
振替東京五九五九六番

お伽王國

オハナシ

四六倍判假製全五册　定價各一圓
紙數各册八十頁　送料各八錢

巖谷小波閣　橋本邦助、太田三郎
鹿島鳴秋著　細木原靜岐、岡野榮畫
杉浦非水畫

日本一の畫噺

袖珍假製全三十五册　定價各二十五錢
紙數各册三十餘頁　送料各四錢

巖谷小波著
岡野榮、小林鐘吉、杉浦非水畫

オトギウタエ

四六倍判假製全三册　定價各八十錢
紙數各册三十餘頁　送料各六錢

巖谷小波著
太田三郎、岡野榮、細木原靜岐畫

（文部省認定通俗圖書）

お話し――それはお子さんたちの成長に伴ふ止みがたい創造の表現です。笛ふきのたつたお話はお子さんたちにどれ程大きな糧となるか量り知れないもの、あることは否めない事實です。鹿島先生のお話は直ちにお子さんたちの心に強く入つてゆくことを信じます。

お子さんたちの一番のお友達はお伽噺と動物の世界です。その抱く想像力は到底大人の及ばぬ夢の國の美しい宮殿です。小波先生はお子さんたちのお相手として少しも不滿のない物語りを綺麗な繪に添へて書いて下すつたのがこれです。

見るものも聞くものも、お子さんたちにとつて、それはすべて歡びです。歡びを感じたとき誰しもきつと唱はずには居られないでしよう。これは美しい繪と一緒に次々と續いてくる小波先生のお伽噺、さあ皆さんして唱ひませう。唱ひませう。

東京日本橋通
丸善株式會社
大阪　神戸　京都　名古屋　横濱　福岡　仙臺　札幌
東京神田・三田・丸ビル

日本の兒童と藝術教育

沖野岩三郎先生著・裝幀 柳田謙吉畫伯・四六判箱入三二〇頁 定價金壹圓八拾錢・送料六錢

著名の題問

いよいよ現る！

本書一冊によつて讀者の思想に大變化を來さすべき使命を帶びた一大著述であります。沖野先生の三十年來の體驗と思索から生れ出でた本書こそ、わが國の兒童教育及文學にたづさはる何人も、一讀せねばならぬ本であることは言ふまでもありません。內容三百餘頁、一々一大警鐘となつて皆さんの胸を打つでせう。

殊に『現代の日本の兒童に如何なる童話を與ふべきか。』に就ての著者の大抱負を聽かれよ。

東京本郷動坂町

金の星社

振替東京五九五九六番

世界少年少女偉人傳大系 (1) 大木雄三先生著・裝幀 寺內萬治郎畫伯 挿畫 柳田謙吉畫伯

ジヤンヌ・ダーク

馬上にフランス國旗をかざして『進め！ 進め！』と叫ぶ聲が聞えては來ませんか。ジヤンヌ・ダークの名を聞いただけで、必ず皆さんの耳に此の可憐な少女の叫び聲が響く事と思ひます。

今から百年程前、丁度ヨーロッパは、麻の如く亂れてをりました。フランスはプロシヤと戰つてをりました。しかも、戰ひ利あらず、首都のパリーは敵軍に包圍されて、フランスは今にも滅亡しようとしてゐました。その時、忽然として母國を救ふ爲めに、奮ひ起つたのは田舍娘ジヤンヌ・ダークでありました。彼の女がどんな働きをしたか、皆さん御存知でありませう。

本書はジヤンヌ・ダークがまだ田舍の一少女として暮してゐた當時からはじまつて、最後に敵軍にとらへられて火あぶりの刑に處せられ、平然として天使の如く死んで行くまでの、尊い、勇しい彼女の一生を書いたものでありますから、是非御一讀下さい。

四六判箱入美本
內容一八〇頁
挿畫三色版外數頁
定價金九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町

金の星社

振替東京五九五九六番

本書は佛國の文豪マーローの原作であつて、世界の少年少女にこれ程深い感動を與へた名作はないと云はれてゐます。重版又重版！絶えず大歡迎を受けてゐる偉大なる姉妹篇であります。是非御一讀下さい。

家なき子

本篇の主人公である哀れな少年ルミは、名家の生れでありながら不思議な運命にもてあそばれて、捨子としてパリーの大通りで拾はれます。そして流れ〳〵て遂に旅役者に賣られ、旅から旅とさすらひ歩く、その一生を書いた眞に人生の哀れを覺える名篇であります。

三宅房子先生譯

四六判美本・内容二七〇頁
定價 金壹圓八拾錢
送料 金六錢

家なき娘

本篇の女主人公である哀れな少女バリンヌよ！父母によつて手中の玉のやうに愛されてゐたのに、旅の間に悲しくも父と母を失ひ、全くの孤兒となつて、まだ見ぬ祖父を尋ねてさすらひ歩くのです。旅から旅へ！その間に如何なる出來事に遭遇したでせうか。

三井信衛先生譯

四六判美本・内容三六〇頁
定價 金壹圓九拾錢
送料 金六錢

東京市麻布區鳥居坂町
金の星社
振替東京五九五五
電話小石川九五三八
番六七

永橋卓介編・裝幀挿畫 高坂元三

世界童話叢書第六編 ペルシヤ童話集

目次

オロマンの護符
ミスチル王と四人の魔法使
アザド王と二人の仙人の話

ペルシヤの童話は、他の國では見られない、特別の面白味があります。お話しから、お話しが生れて、それから、それと、讀むに從ひ、興味の湧き出る面白さ、それに教訓の含まれてゐるのは、なんと云ふ珍らしいお話しでしやう。名高い獨逸のグラッドストーンが、幼年の時この話しを愛讀したと云ふ逸話もあります。大人方にも、小供衆にも、是非御覽を願ひたい本です。

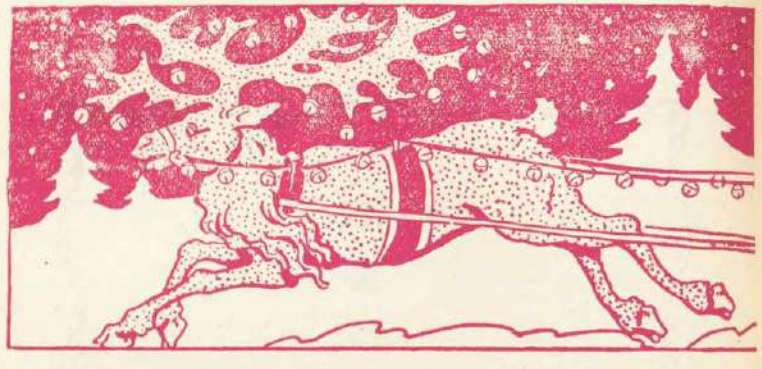
四六判 本文三〇〇頁 美箱入 挿畫十數葉
定價壹圓五拾錢
送料貳拾錢

世界童話叢書第一編 支那童話集（再版）定價金壹圓五拾錢 送料貳拾錢
世界童話叢書第二編 印度童話集（再版）定價金壹圓五拾錢 送料貳拾錢
世界童話叢書第三編 ろしあ童話集（再版）定價金壹圓五拾錢 送料貳拾錢
世界童話叢書第四編 フランス童話集（再版）定價金壹圓五拾錢 送料貳拾錢
世界童話叢書第五編 ドイツ童話集（既刊）定價金壹圓五拾錢 送料貳拾錢

東京市外巣鴨上駒込二八八
金蘭社
振替東京草六六七
電話淺草一七〇四
番一七七番

目次

（表紙・石　版）……寺内萬治郎
狩……
落葉つなぎ（口絵・三色版）……岡本歸一
筒音と共に（口絵・一色版）……寺内萬治郎
俵はごろ〳〵……（一）……野口雨情
同作曲……（二）……本居長世
世界の歴史に何時までも記憶されるべき日本の英雄……（六）……沖野岩三郎
小鳥は空に……（一六）……加藤武雄
雷の復讐……（二四）……鈴木氏亨
鼻の博士……（三四）……片平喜一郎
雀と秋……（四五）……高橋德三郎
鼓師と仔狐……（四六）……和田斗思
化物水夫……（五〇）……花村浩六
日暮れ……（五六）……野口雨情選



四つの幽霊……（六八）……三井信衛
失くした笠……（七二）……酒井八洲男
渡り鳥……（七二）……若山牧水選
死神と六兵衛……（八六）……西川喜平
明神祭……（八八）……野口雨情選
簞笥のお金……（九〇）……伊藤あや子
サンタクロースになつたお爺さん……（一〇二）……横田貴美衛
琴弾き山……（一〇六）……三宅房子
釜どろ……（一二六）……小島政二郎
どの木にとまつた……（一三）……若山牧水
討たぬ敵……（一三四）……三島霜川
住みなれた家を後に（綴方）……（一三五）……齋藤佐次郎選
花の寫生（自由畫）……（一三六）……山本鼎選
（巻頭）信……（一四三）
新年號豫告……（一四六）
出版だより……（一四六）
挿畫……寺内萬治郎・水島爾保布・岡本歸一

落葉つなぎ

（金の星叢書）

岡本歸一畫

筒音と共に

「討たゞ敵」を御覽下さい

寺内萬治郎畫

新年號から出る面白い雜誌

幼年倶樂部

みなさんが讀んで、こんなに面白い
こんなにきれいな、ためになる本は
ありません。たいへん面白い立派な
双六がついてゐます。十二月
六日には、わすれずに本屋へ
お出でなさい。そして早くお買ひなさい。

お父様お母様にお願ひ

▼一流の教育家名士九十餘名を賛助員として、お子様方が讀んで面白く爲めになる雜誌「幼年倶樂部」が新年號から創刊されます。

▼これこそ、最も教育的な課外讀物です。是非御子様方の雜誌は「幼年倶樂部」とおきめ下さい。

發行所　東京本郷　大日本雄辯會

金の星童謡曲譜集

日本童謡作曲界を代表するものとして大好評を受けてゐます。童謡音樂愛好者は是非お供へ下さい。

一輯二輯　各定價金六拾錢
三輯以下　各定價金八拾錢
送料　各金六錢

第一輯　人買船
本居長世作曲・野口雨情作謠
（目曲）人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん

第二輯　一つお星さん
本居長世作曲・野口雨情作謠
（目曲）一つお星さん、七つの子、鵙と雀、鷄さん、象の鼻、四丁目の犬

第三輯　青い空
本居長世作曲・野口雨情作謠
（目曲）青い空、燕、雨夜の傘、でん〳〵蟲、雀の酒盛り、呼子鳥

第四輯　赤い靴
本居長世作曲・野口雨情作謠
（目曲）赤い靴、山彦、三日月さん、姥捨山、朝鮮飴屋、眠り龜の子

東京目黒下目黒　東京市外四六八
白眉大社　振替東京五四五九五
賣捌
東京本郷坂町　東動
金の星社　振替東京五九五九五　電話小石川三五六八
東京目黒下目黒　東京市外四六八
白眉大社　振替東京五四五九五
賣捌
東京本郷坂町　東動
金の星社　振替東京五九五九五　電話小石川三五六八
番六九五九五　番七八三五川

第五輯　夢とり
小松耕輔作曲・野口雨情作謠
（目曲）夢とり、おしやれ椿、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り

第六輯　子守唄
本居長世作曲・野口雨情作謠
（目曲）子守唄、櫻と小鳥、乙姫さん、霜柱、葱坊主、藪の下道

第七輯　お人形さんの夢
本居長世作曲・野口雨情作謠
（目曲）お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、芒の穗、お馬のお耳、草遊び、霜柱

第八輯　ぺんぺん鳥
小松耕輔作曲・蓬崎　龍作謠
（目曲）ぺん〳〵鳥、螢のお使、仔牛、赤い小馬車、紅殼蜻蛉、さみだれ

第九輯　あの町この町
中山晋平作曲・野口雨情作謠
（目曲）あの町この町、木の葉のお舟、高野山、鼠のおばさん、狸ばやし、雀をどり

第十輯　名所めぐり
本居長世作曲・野口雨情作謠
（目曲）長柄の橋、柱くゞり、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳飴、石山寺の秋の月

東京目黒下目黒　東京市外四六八
白眉大社　振替東京五四五九五
賣捌
東京本郷坂町　東動
金の星社　振替東京五九五九五　電話小石川三五六八
東京目黒下目黒　東京市外四六八
白眉大社　振替東京五四五九五
賣捌
東京本郷坂町　東動
金の星社　振替東京五九五九五　電話小石川三五六八
番六九五九五　番七八三五川

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第一編 ロビンソン漂流記

船乘りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中で難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸るまでの長い物語りです。これ程濃山讀まれた本はない。この本を讀まない者は、一生の不幸です。

第二編 ナポレオン物語

ナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語です。

第三編 ドン・キホーテ

イスパニヤの有名なお話。毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ痩馬に乘つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語りです。

第四編 コロンブス物語

アメリカ大陸を發見した大偉人コロンブスの物語りです。コロンブスがあらゆる困難と戰つて、遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命を書いた血と涙の物語りです。この偉人の傳記を書いた本は餘りないので、非常にめづらしい本です。

第五編 大人國小人國めぐり ガリバァー旅行記

ガリバアーが、難船して小人國に漂流して、奇想天外の滑稽をやり、再び航海に出て大人國に漂流し、そこでさん〳〵な目にあひ、漸く營にさらはれて、本國に歸つて來るまで實に面白い物語りです。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第六編 ロビン・フッド物語

英國に傳へられた有名な物語りです。もとは伯爵であつたロビン・フッドが惡い男のために國を奪れて遂に義賊となつて、シャーウッドの森にかくれ、王を救ふ戰を起したり、惡い僧正をやつつけたり、そして最後に毒殺されるまでの變化の多い物語りです。

第七編 アラビヤン・ナイト

アラビヤン・ナイト程面白い物語りは、世界の童話文學を通じてないといはれてゐます。千年餘の間も語り傳へられた物語りである事を考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を與へてゐるかゞわかります。アラビヤン・ナイトの中でも、特に面白いのばかりが集つてゐます。

第八編 ギリシヤ神話 オデッセー物語

ギリシヤの詩聖ホーマーの作であつて、世界中で一番古い、そして又一番面白い物語りです。トロイの戰爭に遙々海を越えて出征した勇士オデッセーが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

第九編 シエークスピヤ物語

有名なシエークスピヤの芝居の中で、面白いものばかりを選んで、物語り風に書いたものです。『テンペスト』『御意のまゝ』『ベニスの商人』『みゝ〳〵女王』『眞夏の夜の夢』『冬の夜ばなし』等、是非一度は讀んで戴くべき物語りです。

第十編 グリム童話

グリムの童話は改めて述べるまでもなくドイツの有名な傳說研究家グリム兄弟の作つたもので各篇ともドイツの各地に傳へられた國民童話である。しかし、グリムの童話は今ではドイツ一國のものでなく、少年少女の珍寶として尊ばれてゐる程有名なものになつてゐる。本書の中に集められた作はグリムの數多くの作の内、最も有名な面白いものばかりである。童話の愛好者及研究家の御一讀を待つ。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第一編 紹入 イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまでに、隨分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く、一つのお話に一枚づゝの立派な畫を入れて、お話と畫と兩方で面白く讀ませる本は他にない。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたい。

第二編 日本神話 古事記物語

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもあるまい。實際驚く程立派な、面白い物語りである。日本の國がはじめて出來た話から始つて神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それこらずつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話である。

第三編 子供キリスト傳 新約物語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス、キリストの一生を聖書に從つて最も正確に書いた本である。この尊い人の一生を子供のために書いたものは他にない。本書はわが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したい。

第四編 西遊記

支那から印度へ、はる〳〵お經を取りに行つた玄莊三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がつひて行き、途中で樣々の魔物に出遇ひ奇々怪々の物語。一度讀み出したら本を置けない世界的の名作。この本を讀まない者は不幸である。

第五編 ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心に、ローマ歴史を書いたものですから、面白い一大英雄傳です。ローマを最初に開いたロミュラスとレマスの不思議な物語りから、シーザーや、ハンニバルなどの大英雄の合戰の話など、順々にあらはれ息もつけぬ面白い物語りです。

金の星社編 世界少年少女名著大系

四六判箱入頗美本・定價各冊金九十錢・送料金六錢

第六編 こども舊約 聖書物語

『バイブル物語』とも呼ばれ、歐米各國の少年少女が、幾度となく繰返し讀む程有名なお話です。日本の『古事記』のやうなお話で、ユダヤの國の昔にあつた、神樣と人間との不思議な物語りです。『新約物語』と一しよに讀んだら、聖書のことがわかつて面白味が深いでせう。

白人種のために犬猫同樣にあつかはれてゐた奴隷の涙の物語りです。偉人リンコルンが現れるまで、米國のあはれな奴隷たちの生活を書いたものですから最初の頁から最後の頁まで涙なしに讀めぬ本です。博大、崇高な氣持ちが、この本によつてどんなに養はれることでせう。

第七編 奴隷トム物語

日本にはじめて紹介されたキリシヤ英雄の物語りで、原著は有名な英國文豪キングスレーです。傳說に從つて書かれたものだけに、その面白さは格別です。どの勇士のお話も、實に面白くて、胸をおどらせるものばかりです。かういふ面白い話を知らずに濟ませるのは殘念です。

第八編 ギリシヤ英雄物語

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならないほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

第九編 アンデルセン童話

幼くして父を失ひ、神の如く氣高き母を持つた小公子の運命を書いた物語りです。世界的に有名な家庭小說にして我が國にも早くから知られてなりましたが少年少女のために紹介されたのは本書が最初です。原作はバーネット女史の作で、全篇滿い愛と涙と教訓に滿たされてなります。

第十編 小公子

今スグ入會せよ

會の十大特長

一、創立が古い
二、基礎が固い
三、設備が完全
四、信用が絶大
五、學制が正しく
六、講師が一流
七、講義が平明
八、指導が懇切
九、會費がヤスく
十、卒業が早い

創立は一番古く内容は一番新しい
日本一の中學講義錄

講義錄見本つき規則書申込み次第無代進呈

（輕井澤に於ける尾崎會長）

大日本國民中學會

創立二十三年、第四十四回新學期開講
入會の絶好期來る!!

東京神田駿河臺
大日本國民中學會
電話大手七〇一〇・五五七七番
振替東京四〇〇二番

講義全部改訂
目下入學者には
大特典提供

渡邊茂雄著

童話の國史

第一輯

面白い童話の國史
知らねばならぬ國史のお話
讀まねばならぬ童話の國史

皆樣！　あなた方は、教室で國史の時間に私たちを生んで呉れた日本の國の立派なことや、すぐれた人達の仕事の蹟を先生から伺つてゐるでせう。
學校で割當てられる國史の時間には限りがありますどんなに先生が話したくとも、そしてどんなに皆樣が聽きたくとも、教室で語られる事はホンのちよつぴりなのです。
日本の國の美しいお話は、御本の外に澤山あるのです。幾つもの面白いお話を先生やお父さまお母さまに代つて五六年の生徒にお話しするのがこの本です。

四六版箱入美本
内容一九〇頁
定價九拾錢
送料六錢

東京市神田區通神保町六番地
白鳳社
振替東京六八九八四番

クリスマスの絶好な贈物にと

本協會が教育的な立場から
精選した處女出版でございます

津川主一著

新刊

こども聖歌集 銀の星

稀な美裝三色四繪畫十五葉入歌も曲も無邪氣で而も神々しい感を起させる

四六倍判
四十五頁
定價 壹圓八拾錢
郵稅 八錢

再版

童話集 幼き日

野邊地天馬著

童話の寶玉集である幼いお子さん方を目的にして著者獨特の筆で書いたもの

山村暮鳥著

四六版
定價 壹圓八拾錢
郵稅 八

再版

聖フランシス

聖者の生涯が詩的な筆でほんたうに子供の親しい友として描き出されてある

村岡花子著

四六版
定價 壹圓五拾錢
郵稅 六

再版

島の娘

物語と童話とクリスマスのお噺と綴錯する所二十五編悉く著書の精選に係る

鈴鹿正一著

四六版
定價 壹圓八拾錢
郵稅 八

再版

舊約物語 エステル姫

舊約に精通する著者が得意の壇上で清い强い美しいエステル姫の面目躍如

上澤謙二著

三六版
定價 壹圓
郵稅 四錢

百六十頁

三版

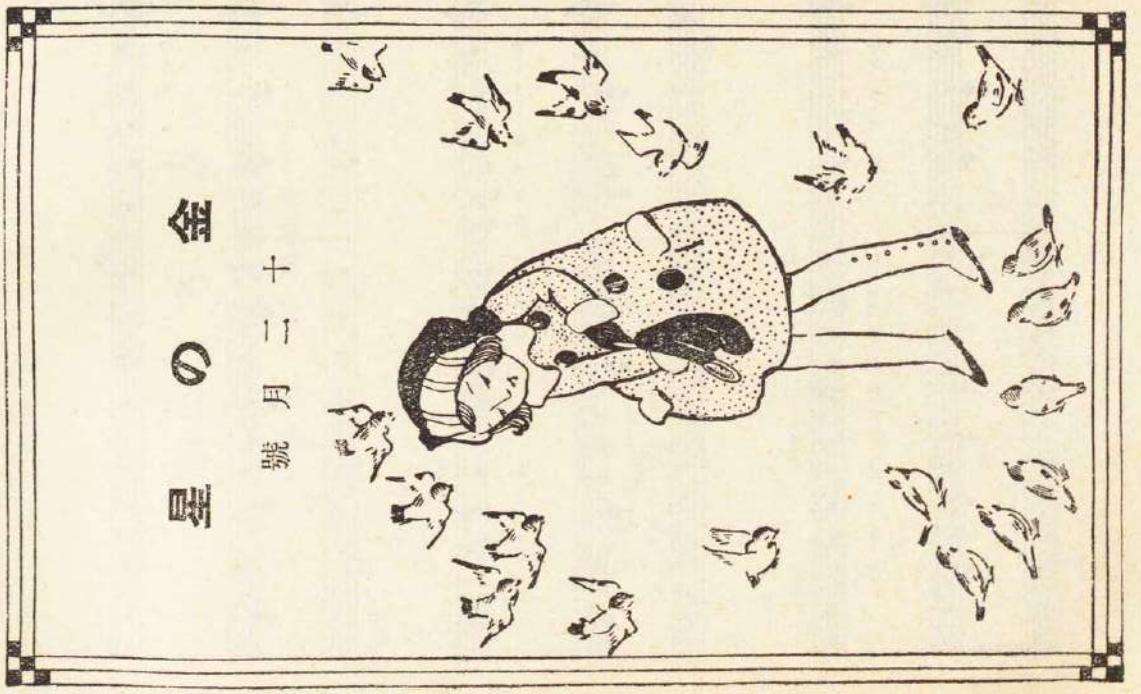
兒童說教 第一集 子供を眞中にして

新しい計畫と工夫の下に書かれたもので教師や親は勿論子供も最良の伴侶

四六版
定價 壹圓五拾錢
郵稅 六錢

二百三十頁

東京市神田區錦町一ノ八
日本日曜學校協會
振替東京一八〇〇四番
電話大手五五三八番

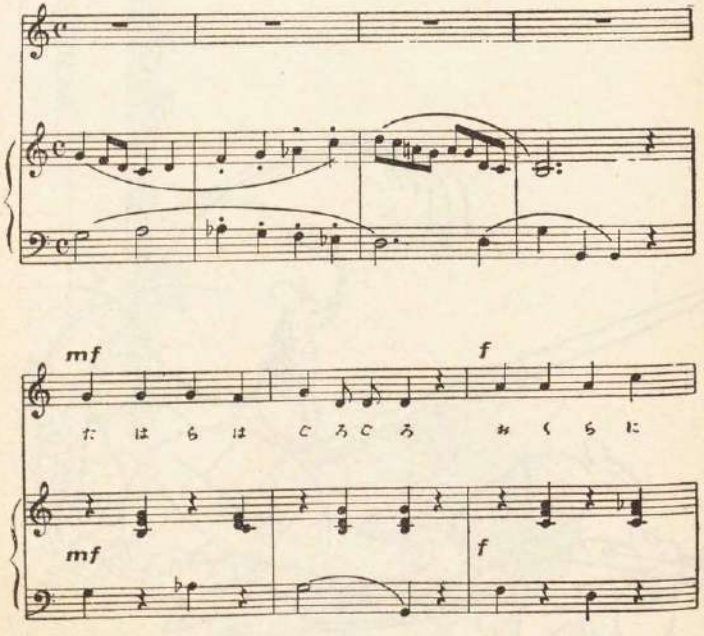


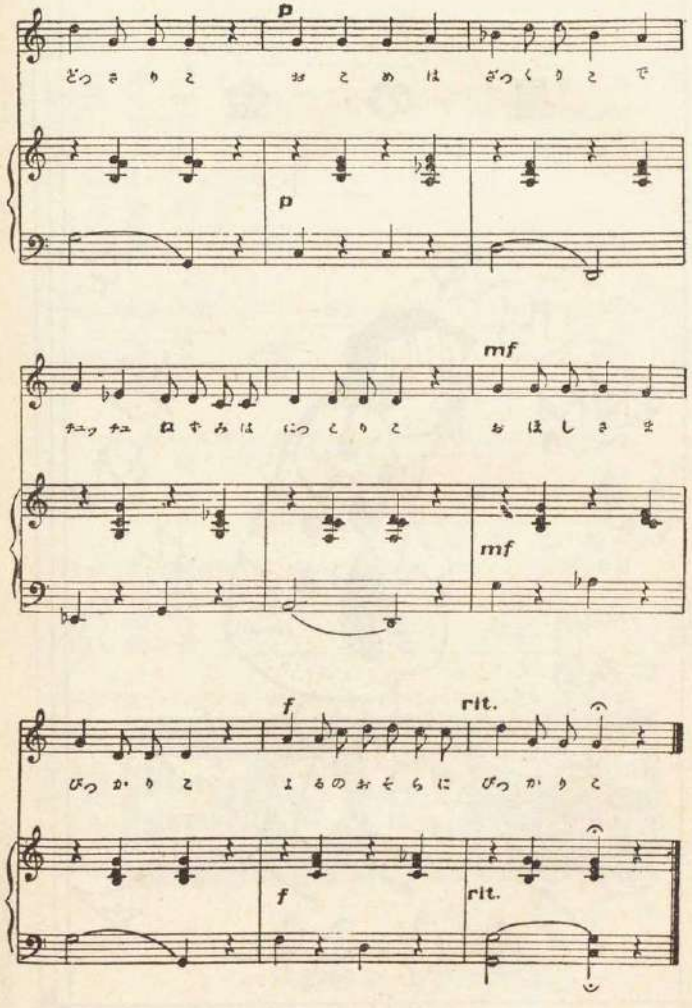
十一月號

鳥の聲

俵はごろごろ

作曲　本居長世
作譜　野口雨情

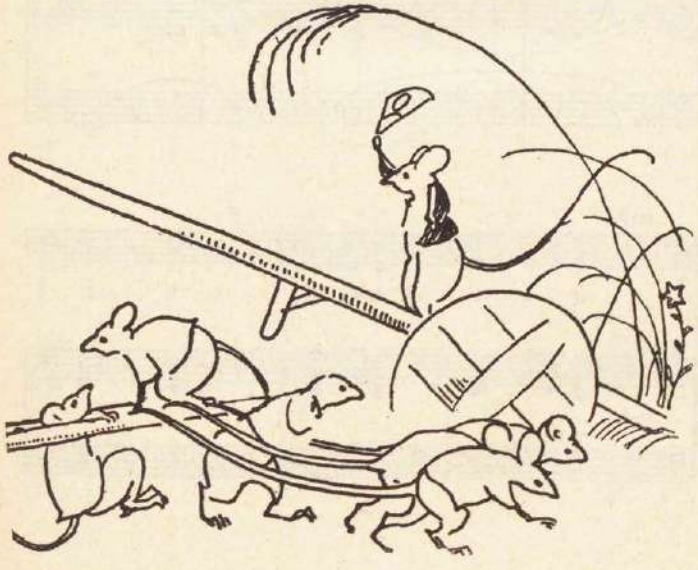




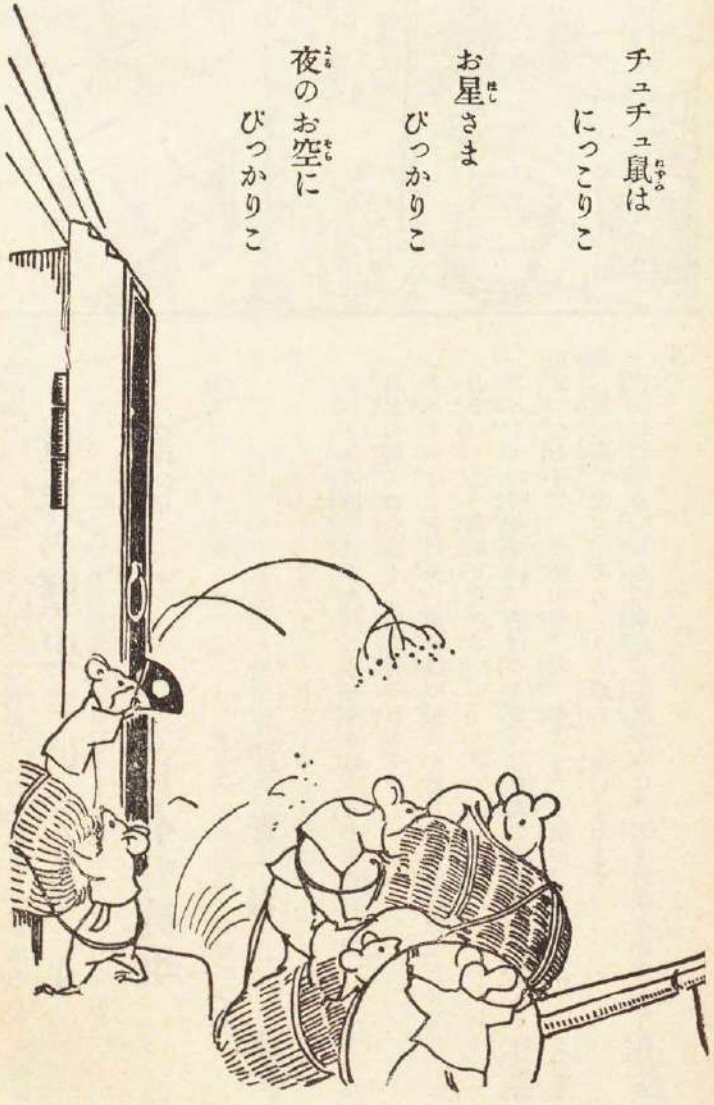
俵はごろく

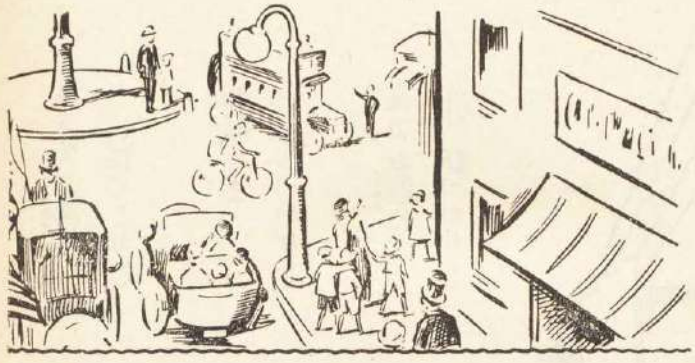
野口雨情

俵は
ごろく
お蔵に
ごっさりこ
お米は
ざっくりこ



チュチュ鼠は
にっこりこ
お星さま
びっかりこ
夜のお空に
びっかりこ





世界の歴史にいつまでも記憶されるべき日本の英雄

沖野岩三郎

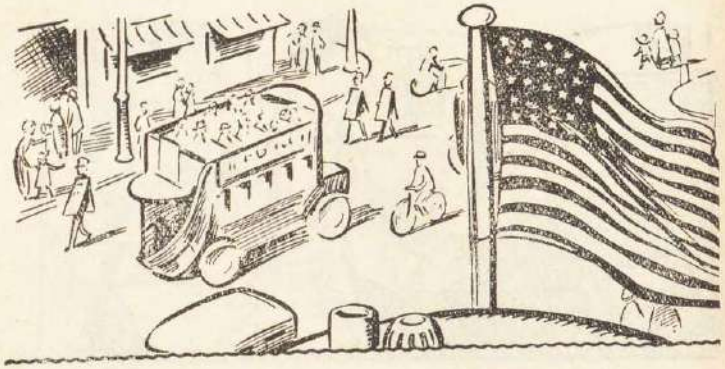
アメリカの暦では千九百二十三年九月一日です。日本の暦では大正十二年九月一日です。

アメリカは、まだ暑いお日様の照つてゐる真ッ晝間です。

日本は、もう真暗い夜です。

アメリカの町々では、燒けつくやうな日光の下を電車が走り、自動車が走つてゐます。多勢の男、女、年より、子供が、歩道一杯になつて、西に東に南に北に、ぞろ〳〵と樂しく歩いてゐます。

夜になつてゐる日本の東京、横濱の空は、天も焦げんばかりに真紅です。



アメリカの町々は無事平穩です。

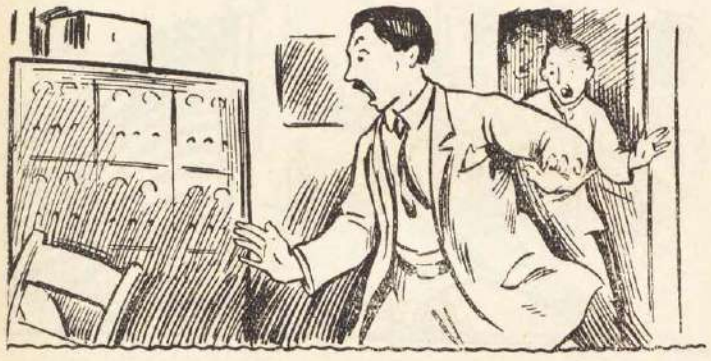
日本の東京、横濱を中心として、關東一帶は、まるで地獄のやうな大騒ぎです。

アメリカのサンフランシスコにあるラヂオ●コーポレーション（無線電信社）では、世界各地からの送電を、多勢の社員が、必死になつて受信してゐます。しかし、それはどこの國の内閣が變つたとか、天子様が御病氣だとか、大統領が御演説をなされたとか、石炭山の坑夫がストライキをしたとかいふやうな通信ばかりです。

日本の福島縣原町にある磐城無線電信局では、局員一同が、『今の地震はずいぶん大きかつたネ。』と言つておひる飯を食べてゐます。御飯のあとで、局員がいつもの通り無線電信の機械を扱つてゐますと、横濱港に碇泊してゐる汽船コレア丸から、驚くべき通信があつたのです。

アメリカ、サンフランシスコの無線電信社の社長はエー●イスベルと云ひます。日本の磐城無線電信局長はケー●ヨネムラと云ひます。

『社長さん、大變です。日本の横濱が大震大火です。日本のイワキ無線



電信局の發信です。』とラヂオ●コーポレーションの社員は叫びました。『局長さん、大變です。東京も大震大火です。横濱港の三島丸無線電信の發信です。』と磐城無線電信局の局員は叫びました。

アメリカのイスベル社長は、社員を觸まして、早速日本の東京、横濱が大震大火であることを、アメリカ内地は言ふに及ばず世界各國の無線電信局へ發信させました。

日本のケー●ヨネムラ局長は、第三回目のバリ丸から受けた『横濱、東京全滅』といふ恐ろしい通信をサンフランシスコのラヂオ●コーポレーションに通信しました。

アメリカ内地で發行してゐる、あらゆる新聞紙は『日本の大震大火』といふ大きな標題を、其日の夕刊で發表しました。

日本では、まだ餘震が時々あつて、電信も電話も通じません。僅かに横濱の港内に碇泊してゐるコレア丸、三島丸、バリ丸にある無線電信の發信を頼りにしてゐます。

ラヂオ●コーポレーションの社長は、磐城無線電信局からの通信が、ぱつたりとぎれたので、磐城無線電信局も震災で潰れたのではないかと、心配しました。で、直ぐ見舞の發信をしました。

磐城局のケー●ヨネムラ局長は九月一日の晩は一睡もせずに、各地からの問合せに對して一々ていねいに返送しました。其の中に銚子の無線電信局からも、通信が參りました。

夜が明けて、日本は九月二日の朝となりました。アメリカは九月一日の夜中になりました。けれどもラヂオ●コーポレーションのエー●イスベル社長は一睡もせずに、イギリス、フランス、ドイツ、イタリイ、スペイン、メキシコ、ロシアなどの各國へ、日本の大震大火の有樣を通信させてゐます。日本の磐城無線電信局長ケー●ヨネムラから、震災のために機械に故障が出來たので發信が少し遲れたといふ挨拶がありました。

磐城無線電信局では、段々と恐ろしい大震大火の有樣が詳しく解つて來ましたので、今度はサンフランシスコの外、ホノルル、北京、マニラまで通信しました。

ラヂオ●コーポレーションでは、マニラに碇泊中の日本の東洋汽船春洋丸から、大へん詳しい通信を受けました。それは春洋丸が、磐城無線電信の通信を感受したのを、更に電送して來たのでした。エー●イスベル社長は始めて本所被服廠跡の悲慘な事實を知りました。で、其の有さまを世界の各地へ通信させ終ると同時に、社員全體と職工の總てを一堂に集めて、

『吾がアメリカと六十年來親しく交際してゐる日本に、こんな悲慘な事件のあつた事を、全世界の無線電信局のうちで、一番最初に通信を受けて、世界中に發信したのは、吾がラヂオ●コーポレーション●オブ●アメリカであります。だから此の際吾々は、日本の罹災民に對して何とか慰めの方法を講じなければなりません。』と相談しました。そこで社長始め職工に到るまで、悉く九月一ヶ月を日本のために月給を貰はずに働くことにして、其の一ヶ月の月給全體を、日本の大震大火に對する慰問費として寄附することにしました。

磐城無線電信局では大騒ぎです。ひどい餘震に襲はれて、機械が破損しました。もう一日から三日の正午過まで、六回も通信が出來なくなりました。けれどもヨネムラ局長は不眠不休でそれを修繕しました。恐ろ

しい通信が引つきりなく來ます。中には、朝鮮人が六千人六郷川まで押寄せて來たとか、伊豆の大島が、すつかり海の中へ沈んでしまつたとか、富士山の形が六角に變つたとかいふやうな奇怪な通信もありました。しかし沈着なケー●ヨネムラは、そんな疑はしい、あとで物笑ひにされるやうな通信は、みんな其のまゝにして置いて、正確だと思ふものだけを、サンフランシスコのラヂオ●コーポレーションを始め各地へ通信しました。その通信用語は、日本語を一たん英語に飜譯して、それを又モーズ暗號に飜譯するので、大變な苦心でした。ケー●ヨネムラは、

『どうぞ、此の通信が外國の無線電信局へ明確に達して呉れゝばいゝ。そして私の飜譯した英語が、向ふの人達に、はつきり解つてくれゝばいいが。』と思つてゐました。

アメリカのラヂオコーポレーションのエー●イスベル社長は、日本のケー●ヨネムラ局長の通信を受けるたびに、深くうなづいて、

『ミスタア●ヨネムラは偉い人だ。禮義正しい人だ。こんな恐ろしい事件を通信する時に、しかも自分も地震におびやかされ乍ら、通信のお終ひには、必ず、

「Please no more this time.」「こんどは、これだけで御免をかうむります。」と言ひ添へてある。實に感心な人だ。こんな沈着いた人は、恐らく世界中に何人もあるまい。何とかしてこんな偉い人にはお禮をしなければならない。」

と心の中で言つてゐました。

九月三日四日は去つて五日六日になつても日本はまだ大騒ぎです。五萬人六萬人といふ多數の人が一つ所に死んでゐます。山は裂け、海は溢れ、家は倒れ、人は死ぬ。生きてゐる人は食物が無く、寢る所がありません。けれども無線電信だけは、

横濱港のコレア丸、三島丸、パリ丸から、紀州の潮岬と銚子の無線電信局へ。

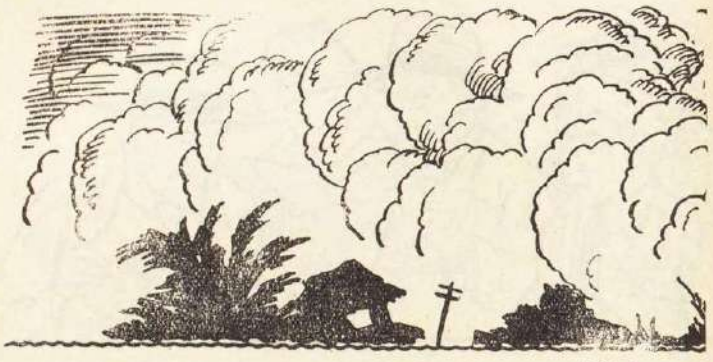
潮岬局からは、普通の有線電信で大阪へ。

銚子局からは、小笠原父島局と、磐城局へ。

船橋局と磐城局とは、サンフランシスコ、ホノルル、仙臺、北京、マニラへ。

大阪局と金澤局とは、石狩と京城へ。

基隆と東京の中野局とは、大連へ。



それ〳〵通信網が張られましたので、先づ世界中に、精確な報道がせられるやうになりました。それが爲めに日本内地は言ふに及ばず、世界各國ではこの憐れな罹災民救助の企てが始められました。

アメリカのラヂオコーポレーションの社長エー・イスベル氏は、インタアナショナル・ニュース社の支配人マアチンといふ人から、ていねいな文章の感謝狀を受取りました。それは、

このたび、あなたがたのなされた、通信の手柄といふものは、私の知つてゐる限りでは、最ら大きなものでした。私はあなたを始め、あなたの部下の職員職工總てと、日本の無線電信局に勤めてゐられる方々とに對して深く感謝いたします。ことに、あの恐ろしい別世界との、唯一つの連絡となつた、磐城無線電信局長が、全力を盡して、其の通信杜絶地域から、絶えず全世界に音信を發せられた其のけなげなお働きに對しては、何度感謝しても感謝しても、感謝の盡きる時はありません。

といふのでした。同日更に一通の感謝狀を受取りました。それはサンフランシスコのラヂオ局長バックスタアといふ人からでした。その感謝

狀には、

御社が日本に於ける震災の第一報をお出しになつてから、私たちは、日本のケー●ヨネムラ氏と、御社の社員諸君の熱心な努力を絶えず感謝してゐました。

とありました。

ニューヨークの大新聞は、爭つて日本磐城無線電信局長、K.Yonemura.の事を書きました。それがために、アメリカの何所へ行つても、ケー●ヨネムラの名を知らないものはなくなりました。どこの新聞を見ても、『世界の歴史にいつまでもいつまでも、記憶せらるべき日本の英雄。』と題して、ケー●ヨネムラの事が書かれてありました。

アメリカにゐる日本人、日本にゐる日本人の多くは、アメリカの新聞を見て、始めて日本の福島縣に、そんな世界的英雄がゐるのかといふことを知りました。

ラヂオ●コーポレーションの社長エー●イスペル氏は、日本のケー●ヨネムラ氏にあてゝ、手紙を書きました。それは、

ケー●ヨネムラさん。私は旅行先から只今歸つて來ました。そして米國で發行してゐる主なる大新聞を一通り見まして、あなたと、あなたの局に働いてゐられる皆樣の、通信上の大きな功に對して、非常な感謝を致します。と同時に吾がラヂオ●コーポレーションの社員一同が、よく働いた事に對しても滿足に思ひました。あなた方と、私達、この二つの機關がこんなに力を合せて、仕事をしますならば、何物もこれを打負かすことは出來ません。實に善い仕事をさせて下さいましたあなたに對して、此上もなき深き感謝をいたします。

といふのです。イスペル氏は此の手紙に　日本金貨一千圓を添えて、日本のケー●ヨネムラ氏に贈りました。

千九百二十三年九月一日の恐ろしい出來事から、日本に『世界の歴史に、いつまでもいつまでも記憶せらるべき英雄。』のある事を、世界各國に知られました。その英雄ケー●ヨネムラ『K. Yonemura.』とは、福島縣双葉郡の富岡町と原ノ町とに設けられてある、磐城無線電信局長米村嘉一郎さんの事です。

（をはり）

小鳥は空に

加藤武雄

十二

義雄と信子夫人の一行が、東京の老伯爵から、事件が解決したから急いで歸るやうに、との手紙を受けとつて、汽車で京都を出發した其夜の事であつた。

東京郊外中澁谷の伯爵邸では、主人の老伯爵が、今夜は珍らしくニコ〳〵して、執事の仙石氏を對手にこんな話をしてゐる。

『それでいよ〳〵義雄を嗣子に決定すると云ふことになると、この機會に一度此の家の財産を調べて見たいものだと思ふのだがね。』

『そのことにつきましては豫てお話もありましたので、大體調査はいたしました。先づ、此の邸宅が地所と共に五十萬圓、御別邸が三十萬圓、御家寶が、これも五十萬圓、公債株券などの動産が百萬圓、其他合計三百萬圓ほどの御財産でございます。なほ、確かな數字は何れ明日でも書類に致し御手許まで差

上げるで御座いませう。』

『さうか。僅か三百萬圓と申すか。俺は五百萬圓もあらうかと思つて居たのだ。俺は自分の一代に必ず五百萬圓は作つて見せるよ。どんな非道なことをしても、法律を犯さない範圍で必ず五百萬圓は作つて見せるよ。』

老伯爵は、いつもの癖で白い眉を寄せて、葉巻の煙をボカボカ吐きながら、何か深く老へ込むやうであつた。老伯が、一度おもひこんだら何んな非道なことをしないとも限らない。崖下の貧民窟が目ざわりだといつて、錢にあかして、もとの地主や家主から買收して、路頭に迷ふ貧しい人達に、その家から立退けと命令した老伯である。

善良な仙石執事は、そんな恐ろしい企てには、いつでも反對した。然し老伯は仙石執事の言葉を用ひなかつた。

『御前樣。それはさうと致しまして、明朝は義雄樣が御歸京でございます。御迎への自動車は準備いたしておきましたが、いきなり御本邸の方へ御とも致しませうか。それとも、御母樣の御別邸へ御送りいたしませうか。』

『さよう、先づ別邸の方へやることにするかな。だが、あの兒の母は此の邸へ來るやう準備はできてゐるだらうな。』

『はい、整つて居るやうでございます。では今夜はもう御寢みなさいますやう。』

仙石執事が老伯の室を出た頃、義雄の乘つた列車は多分名古屋あたりを走つて居たであらう。無邪氣な義雄の夢と、美しい信子夫人の夢と、そして樣々な旅人の夢をのせた夜行列車が、箱根山に登つた頃のことでもあつたらうか——。

岩村伯爵の澁谷御殿は炎々と燃えさかる猛火の中に包まれて居た。消防自動車は幾臺も幾臺も恐ろし

い喧聲を響かせて丘の上に集つた。然し、水に不便な土地のことだつたし、火の手が意外にも早かつたので、さしも廣壯をもつて誇り、華美をつくした伯爵邸も、見る〳〵煙と煙に包まれてしまつた。

『伯爵は何處に居られるか？』

消防隊を指揮して居た署長が、召使ひに訊ねた。召使ひたちは深夜のことだつたし、ひどく狼狽して、それまで伯爵のことに氣付かなかつた。

『御前樣が見えない。』

『寢室に居られるに相違ない。』

口々に騷ぎはしたが、もう伯爵の寢室になつた二階はどの窓からも焰をはいてゐたので、救ひ出しに行く道はなかつた。

老伯爵は何うなつたであらう。

老伯爵は、仙石執事に別れて間もなく寢室に入つた。

『あすは、義雄が歸つて來る。義雄にこれからのも母親と一緒に此の邸宅に暮すことになつたと話してやつたら、どんなに喜ぶであらう。そして此の冷酷な俺を、また神樣のやうに慈悲深い爺だと云つて尊敬するであらう。』

こんなことを考へてゐる間に、可い氣持になつて深い眠に入つた。それから幾時間たつてか、怪しい物音に眼が醒めた。そのとき、赤煉瓦と花崗岩で築いた此の邸宅の第一階には、すつかり火が廻つて居た。下の窓から吹き出す焰は寢室の窓をめら〳〵と舐めてゐた。氣の強い老伯爵は、扉を開いた。二階の廊下は濃い煙にこめられて呼吸が苦しかつた。下へは到底逃れるみちはない。まご〳〵して居れば二階も危險だ。老伯は萬一を賴みに三階へ逃れた。それから上へは逃れるわけにはゆかない。

老伯爵は三階の窓を破つてそして救助を呼んだ。

消防夫はそれと發見したが、何うしても救助の方法がなかつた。をまけに、此の頃やつと外國から購

ひこんだばかりの救助梯子が火事場へ着いてゐない。署長は警視廳へ電話をかけて、梯子を至急とりよせるよう命令した。しかし、梯子が着くまで三階が無事でゐるだらうか。

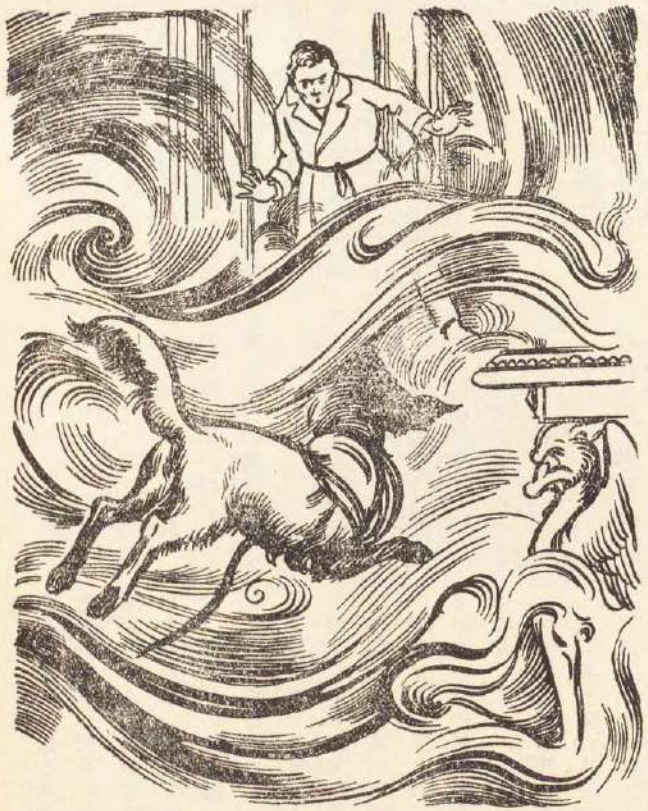
『駄目だ。方法がない。』

『タマルをよこして下さい。タマルに綱を持たせて下さい。』

老伯爵が三階から叫んだ。それをきいた召使の一人が、吠え猛りながら邸内を駈けまわつて居た猛犬タマルを捕へた。そして消防手が持つて居た丈夫な綱を二筋水に濡らしてタマルの背に結びつけた。

『タマル！タマル！』

老伯爵は三階の窓から叫んだ。その聲をきくと、猛犬はまつしぐらに猛火の中へ飛び



込んだ。

× × × ×

爛熳と咲き亂れた櫻の花にかこまれた別邸の、靜かな一室に、手と足に負傷した老伯爵は靜かによこたはつて、寢臺の傍に籐椅子を据えた孫の義雄を對手に火事の夜の話をしてゐる。

『するとね、タマルが三階まで上つて來たんだ。もうそのときは階下も二階も一面に焔の海だつたので、タマルは幾度も幾度も倒れては起き倒れては起きしたものと見える。毛色もわからぬほどやけどをしてゐたのが、おぢいさんの足許まで這ひ寄つて、可哀さうに到々斃れてしまつたよ。オヤ義雄。お前泣いて居るのだね。』

『だつて僕ほんたうに可哀さうなんです。昔の侍の話みたやうですね。』

『それでも綱は水に濡らしてあつたと見えて無事であつた。その端を大きな卓の脚に結へて片方の端を窓から外へたらした。準備が出來たので、タマルも何うかして救けてやりたいと思つて呼ぶと、よろめきながら一度は立ち上つたが、すぐばたりと斃れた。暫く尾の先を動かして居たが、遂々息が絶えてしまつたのだ。』

老伯爵は、今まで人間をさへも愛した事はなかつたので、まして犬に慈悲をかけたことなんてある筈はなかつた。タマルは貧民窟の子供や泥棒を追つたり咬んだりさすために飼つて居たのであつた。然し、そのタマルの最後を思ふと、なぜだか涙がでるのであつた。

『それにしても惜い事をした。あの邸や寶物はみなお前にゆづるつもりで居たが、何一つ取り出さずに灰にしてしまつた。』

『お祖父樣、お祖父樣。「人もし全世界を得るとも、その生命を失はば何の益あらんや。」と云ふことを御

存じないのですね。これは僕お母樣から伺つたことなんですけれど、基督がさう云つたんですつて。だから、僕が伯爵になつても、あのお邸を貰つても、もし死んだらつまらない。とお母さんが敎へて下さつたのです。』

『なるほどなあ。お前のお母樣は却々立派な敎育家だ。人もし全世界を得るとも、その生命を失はば何の益あらんや、か。

なるほど、さうだつた。おぢいさんは、今日は少しをかしいと思つて居るのだ。今も何だか、寶や邸は惜しくはない、たゞあの犬を殺したのが惜しい、と考へて居るところなんだ。』

そのとき信子夫人が靜かに訪ねて來た。

『お父樣。御氣分は如何で御座いませうか。まあ、義雄はお祖父樣の御邪魔をしてはいけませんわ。』

『いや、いや、今も義雄からお說敎を聞いて居たところさ。此の兒がわしのところへ來てからと云

ふものは、いまゝで誰からも聞いたことのない言葉をきかせてくれるのだ。そして不思議にも俺の心が一日一日變化してゆくやうに思へる。

今も、俺が名譽や財産をあまり大切にしすぎて居たことを馬鹿らしく思つて居たところなのだ。わしは、そのために大切な三人の子供まで失つてしまつたからなあ。』

老伯爵は、輕く眼をとぢて何ごとかを考へて居た。とぢた瞼の下から露のやうな涙がにじむのであつた。

花が散つて若葉青葉の初夏に入つたある日のこと、中澁谷の岩村伯爵の別邸で、質素ではあつたが樂しい園遊會が開かれた。

この園遊會には一滴の酒も用ひず、お園子や珈琲や果物ばかりの御馳走であつた。そして奇術や音樂やいろ〳〵な餘興もあつた。

面白いことに、紳士淑女の中に、貧民窟の人達が四五十名も招かれてゐた。その人達は餘興に相撲をとつた。

そのうち合圖の鐘がなつたので、來賓達は露天の下にならべた椅子に腰をおろした。中には芝草の上に足を投げだした人もあつた。

老伯爵は一段高い演壇にのぼつて、先づ機嫌よく挨拶をし、そして、

『これが當家の嗣子義雄、そして母の信子であります。』

と紹介をした。

そのあとで、義雄の挨拶があるといふので、皆はわれるやうな拍手をして迎へた。義雄は元氣よく立つた。

『紳士淑女諸君。』

さて次の文句に困つたので、暫く考へて居たが、やがて言葉をついだ。

『私のお祖父樣は世界で一番偉い、そして親切な方であります。どうかよろしく。』

それだけ云つて演壇を降りた。

さすがの老伯爵も、世界一の親切者と云はれたので恥かしくて汗が流れた。然し、その言葉が老伯爵を心から愉快にさせた。伯爵は今日まで知らなかつた光の世界を眼の前に見た。

さわやかな初夏の光を浴びた鈴懸の梢に、人にをぢない小鳥の群が集つてチ、、、、と囀つてゐる。そしていかにも樂しげに輕々と空に舞ひ揚つては、また梢に下りて囀るのであつた。

『まるで話にきいた極樂だ。』

老伯爵は、うつとりと小鳥の唄にきゝとれてゐた。

（をはり）

雷の復讐

鈴木氏亨

一

昔、支那の天津に徐緯眞と云つて、大さう仙術の好きな人がありました。この人はお酒が好きで、毎日〳〵酒ばかり飲んでゐたもんですから、澤山ある財産をみんな失くして了ひました。

そこで、ある時諸國を漫遊して、仙人の書物でも搜して見やうと思つて、これと云ふ當もなく遠方の國へ出かけました。

ある日、馬に乘つて山東を通ると、古ぼけたお廟があつて、その中から、

『徐緯眞さん！徐緯眞さん！』と、呼ぶ者がありました。

徐緯眞は不意に呼ばれたので吃驚しました。しかし、こんなところに自分を知つてゐるものがない筈だと思ひながら、お廟の方を見ますと、そこには人つこ一人ゐません。これは屹度何かの迷ひだらうと、かまはず行かうとしますと、こんどは、

『徐緯眞さん助けて下さい！』と云ふ聲がします。

で、不思議に思ひながら、馬から下りてお廟の中へ入つて見ましたが、人らしい影がありません。ただお堂の前に大きな鐘がふせてあるばかりです。そしてどうやら人聲がその中からするようでありました。そこで、徐緯眞は、

『私を呼んでゐるのは誰です。そしてなんだつて私に救つてくれなどゝ云ふのです。』と訊ねますと、鐘の中から、

『私は昔、黃石老に劍法を敎へた猿王の後裔でした。だが私は劍術が餘り上手でないので、一度しくじつて人に怪我をさせてから、神樣のお罰を蒙つて、この鐘の中に押し込められて了ひ、もう百年になるのです。恰度いま百年が過ぎたので、世の中へ出ていゝのですが、出られなくつて困つてゐます。ところが幸ひこゝへ貴方が通りかゝつたので、貴方を豪傑と思つて、是非おたのみしますから、この鐘から出してください。』と云ふのでした。

徐緯眞は、初めて自分を呼んだものゝ正體がわかりましたが、自分はそんな大力ではありませんから、

『そんなことを云つたつて、とても此の鐘は上げられません。』と云ひますと、

『いゝえ、貴方が手づから上げなくもいゝのです。鐘の上に咀文が十二文字書いてありますから、それを除いて下されば、私は自分の力で出ることが出來

るのです。』と云ふのでした。

そこで、徐緯眞は鐘の表面を見ますと、泥で一面に汚れて、文字らしいものにはすつかり苔がむしてゐます。それから石を拾つて來て、しばらくの間その文字を磨つてゐると、字が綺麗にとれて了ひました。すると鐘の中から、

『それでいゝですから、急いで半里程遠くへ去つて下さい。さうしないと貴方は怪我をしますから。』

と云ひます。

重ね〳〵妙なことを云ふ奴だと思ひましたが、萬一怪我でもしてはつまりませんから、馬を驅けて十五六町も來たと思ふ頃、後の方で山の崩れるやうな音がしました。驚いてふり返つて見ると、お廟の附近は、黑雲が渦卷いて、大暴風が起り、遙かの虛空には大きい一疋の白い猿が跳り上つてゐます。

しばらくすると、白い猿は徐緯眞の前に下りて來ました。そして、うれしさうにおじぎをして、しきりに感謝の意を表してゐましたが、忽ち一すぢの白い煙となつて、何處かへ消え失せて了ひました。

徐緯眞は、不思議なことがあるものだと思ひながら、猶ほ旅をつゞけて仙人の書物を搜してゐました。

二

徐緯眞は半年ばかり南の方を遊んで、仙書を搜してゐましたが、見つからないので、洛湯の都へ來て、しばらくの間滯在してゐました。

ある晩のことでした。いつになく風の無い靜かな夜なので、徐緯眞は燈の下で書物を讀んでゐました。すると室の戸をとん〳〵と叩くものがあります。誰れだらうと思つて出て見ると、風采の立派な、みやびやかな姿態をした、見ず知らずの一人の青年が立つてゐました。

『誰方ですか？』徐緯眞は自分の室へ招じ入れてから、かう云つて訊きました。

青年は、徐緯眞を見ると、なつかしさうにしてゐましたが、丁寧にお辭儀をして、

『私は山東で釣鐘の中へ入れられてゐた白い猿です。いつぞや貴方に助けられ、御蔭で釣鐘の中から出ることが出來まして、今では神樣から昔の罪も許され、また仙人の仲間に入れられました。それでいつか御恩を返へさうと思つてゐましたが、やつとこん晩ひまが出來たのでお訪ねしたのです。承れば貴方は、鍊丹の術や、仙人の書物を御求めになつてゐるとのことですから、仙界でも秘密にしてある道書三卷を、御禮に御覽に入れやうと思つて持つて參りました。どうかこん夜中に御寫し下さい。決して他の人にこの秘密を洩らしてくれては困ります。』と云つたかと思ふと、その青年は本を机の上に置いて、何處かへ姿をかくして了ひました。

徐緯眞は、いまゝで難儀をして求めてゐたものが得られたのですから、大さう歡んで直ぐ第一卷から披いて見ました。すると論語や孝經にあるやうなことが書いてあつて、一向につまりません。で第二卷をあけて見ると、これもむづかしい文字で滿されてゐます。これも面白くないので、第三卷を開けて見ますと、これには口から火を吐いたり、眼から稻妻を出したり、刀を呑む術や、風を起したり、雨を降らしたりする術がくわしく書いてあります。徐緯眞は、

『これだ！〳〵』と叫ぶと、急いで寫しにかゝりました。一生懸命に寫して行くと、とても不思議な術ばかり書いてあるので、夜の明けるのも知らず夢中でした。

やがて、曉方近くなると、前の晩の青年がやつて來ました。見ると徐緯眞は第三卷を熱心に寫してゐます。青年はがつかりして了ひました。

『實は私は、そんな處を貴方に御授けしやうと思つて、この本を持つて來たのではありませんでした。

第一卷には帝王になる謀が述べてあるし、第二卷には將軍となるべき道が說いてあります。第三卷は仙人の書物の中でもいやしいものと輕蔑されてゐるもので、方術のことばかりが書いてあるのです。それもよく用ゐればどうかかうか役に立たぬこともありませんが、若し用ゐ損なへば生命をなくして了ひます。あゝ、ほんとに惜しいことをしました。しかし私と貴方の御緣も今日限りですから、これでお暇いたします。』

かう云ひ終つたかと思ふと、青年も道書もそこには消えてなくなつてゐました。

三

それから徐緯眞は、道書の第三卷に書いてある通りのことを行つて見ると、何一つとして出來ぬことがありません。

『俺もこれで、もう立派な仙人になれたぞ！』

徐緯眞は大さう歡びました。

そこで、お酒を飲んで金がなくなると、直ぐ洛陽の街の澤山人が通るところへ行つて、仙術を行つては金を集め、それでまたお酒を飲んでゐました。徐緯眞はどんな事でも自分の思ふ通りになるものですから、だん〳〵圖に乘つて、お酒に醉つぱらふと、いろ〳〵なわるさをするやうになりました。

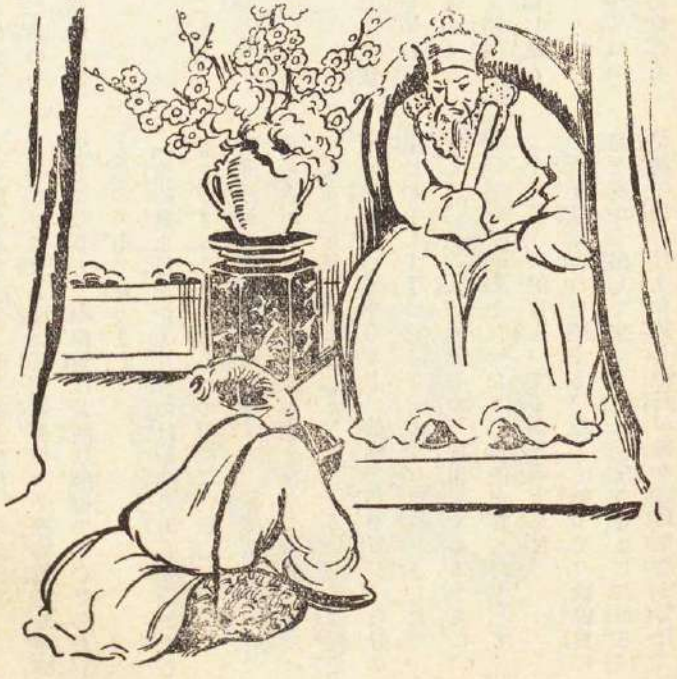
ある仲秋のことでした。その夜は滿月で、洛陽の都の人達は、月見の宴を開かうとして、宵のうちから仕度をしてゐました。豆をうでたり、お團子を拵へたり、お芋をふかしたり、それから緣には机を出して三寶にお神酒を備へたりして、月の出を待つてゐました。やがて、まんまるな月が上つて來て、中空に皎々と輝いてゐますと、街の人達はお酒を酌みながら、詩を吟じたり、絃を奏でたり、胡弓を鳴らしたりして月を賞してゐました。

その夜は、天子樣もお宮の中の池に綺麗な船を泛べ、大勢の侍臣や、お氣に入りの侍女をつらねて、宮中の樂人達に音樂を奏でさせ、お酒をくみながら、月を御覽になつてゐました。

月は池の上の水に寫つて、眺めは一層よくなりました。それに空には少しも雲らしいものがありません。天子樣は、

『よい月ぢやのう！』と傍の侍臣を顧みて、大へんに滿足に覺召されてゐます。と突然、月はどうしたのか、くる〳〵と水車のやうに廻轉しはじめました。まるでそれは花輪のやうに綺麗なものでした。

これを見た天子樣をはじめ、街の人達はみんな驚きました。中には『この世がどうかなるのではないか。』と心配して、泣き叫ぶものもあり、いまゝでの樂しいうたげの席は、急に悲しみの巷となりました。



轟て、月は廻轉が急に止ると、流星のやうに光の尾を引いて下界へ落ちました。と、これまで晝のやうに明るかつた下界は、地獄の底のやうな暗闇となりました。

『もう、この世もしまひだ。』

街では大變な騒ぎとなりました。中にはこんなことを云つて、狼狽して身のまわりのものを持つて、逃げ出すものもありました。

『これはどうしたのだ?』

天子樣も心配して、天文博士を呼びだしたり、從臣のものにいろ〳〵と聞かれたが、誰一人そのわけをしつてゐるものはありません。おそばのものもただわい〳〵と騒いでゐるばかりです。すると洛陽の巡警をしてゐる馬と云ふ役人が、天子樣の前に進んで、

『近頃徐緯眞と云ふ方術士がゐて、醉ぱらつてはいたづらをいたしますから、多分これは彼の惡戯だらうと思ひます。』と、申上げました。

そこで、天子樣は直ぐ使をやつて徐緯眞をお呼び出しになると、徐緯眞はお酒に醉つて、ぐでん〳〵となつて出て參りました。

『徐緯眞!月をかくしたのはお前であらう。かくし立てをするとその方のためではないぞ。』

天子樣が恐い顏して申しますと、徐緯眞はその晩、街の人が月を見ながら、お酒を呑んで御馳走をたべてゐるのを見て、羨ましくなり、どうかしてご馳走やお酒を奪つてやらうと、仙術で月を呼び、自分の室にかくして了つたことをみんな自白しました。

そして、街の人が眞暗な中で狼狽してゐるうちに、おいしいご馳走をたべたり、お酒を呑んだりして、ぐでん〳〵に醉ぱらつて了つたのでした。

天子樣はそれを聞くと、ひどく怒つて、徐緯眞に月を室から出して來て、空に放なさせましたから、洛陽の空にはまた美しい月が皎々と輝やきました。

そんなことで、徐緯眞を都に置いたなら、今にどんなことをするかわからないと云ふので、都から追ひ出されて了ひました。

四

徐緯眞は洛陽の都を追はれたので、故郷へ歸らうと思ひました。そして天津へ歸る道々仙術を行つては、それを田舍の人に見せてお金を貰ひ、それで好きなお酒を呑んでゐました。

それが村から村、町から町と評判になつて、徐緯眞が行くと澤山の人が取り圍んで、何か面白い仙術をやらないと放なしてくれません。徐緯眞はいゝこ

とにして、雨を降らしたり、風を起したり、死人を生かしたり、口から火を吐いたりして旅をつゞけてゐました。

ある時こんなことがありました。

徐緯眞が長い間、お酒も飲めず、おいしい御馳走もたべられず困つてゐた時でした。ある村へ行くと、『面白い仙術を見せるから、お金を持つてお出で。』とふれを出しました。これを聞いた村の人々は、どんなことをするのかと澤山のお金を持つて來ました。やがて徐緯眞はその金を懷中に入れると、空中に向つて印を結びました。

ところが、忽ちのうちに五色の虹が空に現はれて、大陽の光に美くしく反射しました。

村人は徐緯眞が何をするだらうと、見てゐますと、階段でも昇るやうに、虹をだん〳〵と昇つて行きました。村人達はみんな喝采しました。しかし見るみるうちに徐緯眞の體軀は小さくなり、上へ〳〵と昇つて行くに從つて、豆のやうになり、強い風が吹いて來たかと思ふと、どつかへ吹き飛ばされて了つたのでした。

徐緯眞は、ひもじいもんですから、澤山のお金を見ると急に好きなお酒が飲みたくなり、仙術を使つて逃げだしたのでした。村人達は、徐緯眞にだまされたことをはじめて知り、地團太踏んでくやしがりましたがだめでした。

徐緯眞は故郷の天津へ歸つても、度々仙術を行つてお金を貰つては、それを好きな酒に換へてゐました。

ところが、ある日酒を呑み過して、大へん醉ぱらひました。恰度暑い眞つ盛りだつたので、門前の木蔭に腰をかけて休んでゐますと、涼風が吹いて來て、空が墨汁を流したやうになつたかと思ふと、急に雷が鳴りだしました。街の人達は今にも雨が降りさうになつたので、みんな狼狽しだしました。これを見た徐緯眞は、

『うるさい奴だ！』と云ふと、空中に向つて印を結んでゐましたが、風の神と、雷さんを直ぐ囚へて袂の中へ入れて了ひました。

かうして徐緯眞は、風の神と雷さんを、懷中へ入れたまゝ、いゝ氣持になつて、ぐう〳〵鼾をかいて寢て了ひました。

懷の中の風の神と、雷さんはいつまでたつても、出してくれぬものですから、しまひには二人でぷり〳〵怒りだしました。そして風の神から叱るだして、徐緯眞の袖を破つて出ると、雷さんも負けん氣で、稲光を出しながら恐ろしい威勢で跳りだしました。そして、風の神と、雷さんは空中で恐ろしく、鳴りだしました。

ところで徐緯眞は、雷さんが出る時、ひどく怒つて、髪の毛や、皮膚を燒いたものと見えて、眞黑けに焦げて遂う死んで了ひました。

（をはり）

士博の鼻

片平喜一郎

からからと、落葉を鳴らす、風の吹いてゐる、寒い晩のことでありました。

太郎も、次郎も、みい子も、映二も、みんな顔を眞つ赤にほてらしながら、圍爐裡を圍んで、焚火にあたつて居りました。

『ねえ、太郎ちやん！いつたい人間は、寒いと鼻の頭が眞つ赤になるのは、どんな譯なんだらうね？』

と、寒むがりやの次郎は、いかにも、それが不思議でならないやうな顔をしながら、だしぬけに、太郎にたづねました。

太郎は、次郎の問ひが、あんまりだしぬけだつたので、ちよつと驚いたやうな顔をしましたが、すぐ、勿體ぶつた口振りで、

『そんなことを識らないなんて、次郎ちやんは、間もなく二年生になるんぢやないか！どうして赤くなるかつて、そりやあ、冷い空氣にあたるから赤くなるんだ。』と、いかにも兄さんらしく、答へました。

次郎は、なる程と頷づきました。が、しかし、まだはつきりと解つた樣ではありませんでした。次郎は、首を傾げて、

『でも、太郎ちやん。おかしいぢやないか。鼻の頭だけ赤くなつて、他んとこは赤くならないんだもの。』と、獨言のやうに言ひました。

『解んないなあ、次郎ちやんは。』と、太郎は、眉をよせて、もどかしさうに、言ひました。

『そりや、鼻の頭は、他んとこより皮膚が薄いから、そこだけ赤くなるんぢやないか。』

すると、今まで、太郎の言ふことを、默つて聞いてゐた、お喋りやのみい子が、側から口を出しました。

『違うわよ、兄さん。鼻の頭が赤くなるのは風に瓦められるからだわ。』と、みい子は、すました顔をして、太郎に言ひました。

太郎は、それを聞くと、いきなり大きな聲で、笑ひ出して了ひました。

『あつはつは、そんな、馬鹿なことがあるもんか。』

『あるわよ！　だつて、いつか風の吹く日に、わたし、お使ひから歸つて來たら、お母さんが――まあ、みい子は、お鼻を眞つ赤にして、風に瓦められたんぢやないの――つて、仰言つたんだもの。嘘ぢやないことよ。』と、みい子は、辯解するやうに言ひました。

『お馬鹿だなあ、みい子は。そんなことを本氣にする奴があるもんか。』と、言つて、太郎は、また、大きな聲で笑ひました。

『何でもいゝわよ。兄さんの意地惡るッ。お母さんは、嘘なんか言ひやしないんだから。ねえ、映二。』と、みい子は、映二に應援を求めるやうに言ひました。

『あゝ、兄さんの言ふことなんか嘘だよ。お母さんの方が本當だ。』と、解らず屋の映二は、みい子に贊成しました。

『馬鹿なこと言ふな。解らずやの癖に、映二まで本氣にしてらあ。』と、今まで、笑つてゐた太郎は、急に眞面目な顔をして、口惜しさうに、

『僕あ、學校の先生から理科の時間に敎はつて、ちやあんと識つてゐるんだ。お母さんの言ふことなんか出鱈目だ。ねえ、次郎ちやん、僕の方が本當だ、ねえ！』と、言つて、太郎は、次郎に應援をもとめました。

『うん、みい子や映二に、何が解るもんか。太郎ちやんの方が本當だ。』と、次郎は、太郎に味方しました。

すると、みい子と映二は、口惜

しさうな顔をして、
『何だえ、次郎ちやんは、兄さんが恐いもんだから、兄さんの方に味方して。弱蟲だえ、弱蟲だえ。』
と、口を揃えて、次郎を囃したてました。
ところが、この時、ちようど襖の蔭のところで、『うう……う！』と、太い妙な聲がしましたので、太郎も次郎もみい子も映二も、口論をやめて了つて、みんな吃驚りした顔を見合せました。そして、顔へながら、襖の方を振りむいて見ました。するとまた、
『うう……そお、うう……そ。』
と、その聲と一緒に、すうつと襖が開きましたので、太郎も次郎もみい子も映二も、みんな、顔を青くして、震へあがりました。映二なんかは、太郎の腕にしつかりと掴まつて、いまにも泣き出しそうです。
『うう…そつ。どつちも嘘だよ。』
と、今度は、その聲と同時に、襖の蔭から、にゆつと、一人の男が出て來ました。
『うわつ！』
襖の蔭から出て來た男は、爺いやでありました。爺いやは、夜廻りから歸つて來たところなのです。灯の消えた提灯を、ぶら〳〵さげて、拍子木を首にかけたまゝ、おどけた顔をして、にこ〳〵笑ひながら、
『うう……そ。太郎ちやんの言ふことも、みい子ちやんの言ふことも、どつちも、嘘。』と言つて、太郎や次郎やみい子や映二が、みんな呆然としてゐる顔を見廻し乍ら、圍爐裡の傍へやつて來て、どつかり座りました。
そして、また、おどけた顔を、にこ〳〵しながら、低い聲で、
『恐かつたかえ？』と、言ひました。
と、その時、爺やの顔を不審さうにして見てゐた映二が、俄かに、元氣な聲を出して、何か偉い發見でもしたやうに、
『やあ！爺やの鼻が眞つ赤ぞッ。』
と、得意さうに言ひました。
『まあ、ほんと！爺やは、お鼻を風に舐められたんだわね。』と、みい子は、驚いて、爺やの顔を眺めました。
『嘘だえ。冷たい空氣にあたつたからだえ。ねえ、爺や、さうだらう。』と、太郎は、爺やの顔を覗いて言ひました。すると、また、爺やは、おどけた顔を、にこ〳〵しながら、首を振つて、
『いや〳〵、どつちも當らない。太郎ちやんの言ふことも、みい子ちやんの云ふことも、どつちも當らない。』と、爺やは、眞つ赤い鼻の頭をつるりと撫で廻して、
『そりやあ、風に舐められたんでもないし、冷めたい空氣にあたつたからでもない。それには一つ不思議な理由がある。』と、言つて、爺やは、鹿爪らしい顔をしました。
そして、また、
『で、その理由といふのは、つまり、こんな理由なんだが…』と、言つて、鼻の頭が赤くなつた理由を話し出しました。
と、云ふのは——

ちようど、その晩は、風の吹く晩だつたので、爺やは、いつもよりも早くから、拍子木をカチ〳〵たゝき乍ら、屋敷中を、夜廻りに歩いてゐたのでありましたが、ふとした氣まぐれから、爺やは、

『今夜のやうに風のある晩は、萬一の事でもあると大變だから、一つ裏山の方も廻つて見ておかなきや。』と、思つて、わざ〳〵裏山まで、夜廻りに出て行つたと云ふことが、そも〳〵爺やにとつては不幸せな事なのでありました。

だからと云ふて、爺やは、神樣ではありませんから、よもや不幸せな事が、自分の身に振りかゝつて來ようなどゝは、夢にも知らなかつたのです、爺やは、一生懸命

に、拍子木を鳴らし乍ら、裏山さして、すたこら〳〵、夜廻りにと行つたのでありました。

ところが、丁度、爺やが、裏山の三本目の樫の木までやつて來た時でありました。何處からともなく、妙な 嗄聲で、

『ほつほつ、お爺さん。御苦勞だね。ほつほつ、この寒いのに、ほつ！』

と、それが、泣き聲か、笑ひ聲か解らないやうな聲で、爺やに話かけるものがありました。

が、しかし、根が頑固の爺やのことでありますから、それしきの事で驚くやうな事はありませんでした。きつと、狐か狸の惡戯だと思つて、知らぬ顔をして、通り過

ぎ樣としました。ところが、その妙な 嗄聲は、尙も續けて、二度も三度も、同じ事を言つて、爺やに話かけるのでありました。だものですから、最初は、爺やも、知らぬ顔をして通り過ぎやうとはしたのですが、あんまり、嗄聲が、しつこく話かけるので、終ひには、爺やも、腹を立てゝ了つて、

『馬鹿ッ。餘計なお世話だ。默つて居ろ。』

と、天も張り裂ける程の大きな聲を出して、怒鳴りつけたのでありました。ところが、嗄聲は、それでも平氣で、

『ほつほつ。お爺さん。怒つたのかえ、ほつ。』と、今度は、笑つた樣な聲で言ひました。

ですから、爺やは、もう、すつかり怒つて、石ころを拾つて、嗄聲を目がけて、投げつけやうとして、嗄聲のする方を見ると、こはそも如何に、その 嗄聲は、裏山に永年住んで居る、梟のお婆さんぢやありませんか。

そこで、爺やは、今度こそは、吃驚してしまひました。今まで、狐か狸の仕業とばかり思つた居たのが、仲好しの夜番の梟のお婆さんだつたので、爺やは、少し狼狽へて、

『これは、お婆さん。腹を立てゝ濟まなかつたわい。勘弁しとくれな。惡い氣ぢやないんだよ。あまり妙な聲を出したから、俺は、お前さんだとは氣が付かなかつた。』

と云つて、急に爺やは、嗄聲の鼻のお婆さんに、お詫びをしました。すると、鼻のお婆さんは、

『ほつほつ、とんでもない、お爺さん。ほつほつ、わしや、風邪を引いたで、聲がすつかり嗄れてな、ほつ。』と、嗄聲で云ひました。

それを、聞くと、爺やは、

『それやまた何のこつたえ。あッはつはあ。』と、大きな聲で笑ひ出して了ひました。その笑ひ聲が、また、割れ鐘でも鳴らしたやうな大きな聲だつたので、鼻のお婆さんは、吃驚りして、狼狽えながら、

『ちよつ、ちよつ。お爺さんや、靜かにしな、靜かに。今、先生が御勉强中なんぢやからな。』と、云つて、大きな眼をぎよろりと光らせました。

『何の事だえ、お婆さん、その先生つてのは。』と、爺やは、鼻のお婆さんに、叱られた譯が何の事だか解りませんでした。

『ほつほ、ほつ。お爺さんは、あの有名な鼻の博士先生を知らないのかえ。ほつ、ほつ、ほら穴を覗いて御覽よ、ほーら。』と、鼻のお婆さんは、大きな眼をくる〳〵廻して言ひました。

『何ッ、洞穴を覗けつて？　この樫の木の洞穴の事かえ。』と、爺やは、鼻のお婆さんに言はれるまゝに、三本目の樫の木に近寄つて、その根元の洞穴を覗き込みました。

ところが、何とおかしな事があるぢやありませんか。その洞穴の中には、小つぽけな侏儒が、螢のお尻のやうな、小さな洋燈の下で、一生懸命、本を讀んで居るのです。それぱかりではありません。その侏儒と云つたら、顔が鼻やら、鼻が顔やら、よく氣を付けて見なければ解らないやうに巨きな鼻を、眞っ赤く垂れさげて居るのですから、爺やは、驚いて思はず、

『ひやつ！　お婆さんや。あれが、その有名な鼻の博士先生かえ。』と、息をはづませて言ひました。

すると、鼻のお婆さんは、鼻の先をひく〳〵動して、

『ほつほつ。本當に有名な鼻の博士先生樣ぢやよ。お爺さん。』と、いかにも得意らしい顔をして、ま

た、言葉を續けて、

『ほつ、それといふのもさ、お爺いさん！あの巨きな赤い鼻があればこそ、あの侏儒は有名な鼻の先生にもなれた譯ぢやよ。ぢやと云つて、あの侏儒だつて、もと〳〵、あんな巨鼻でもなかつたし、勿論、有名な鼻の博士先生でもなかつたのぢやけど、それも、まあ、お爺さん。運命と云ふものでな。ほつ。』

と、鼻のお婆さんは、べら〳〵喋り出しました。

『それに、お爺さん。あの侏儒は、もとはパン屋の小僧でな。それこそ、手も足もつけられないやうな惡戲小僧だつたのさ。まあ、あんな巨鼻になつたといふのも、その惡戲の罰なんぢやよ。お爺さん。そりや、ある日のこと、丁度あの侏儒が獨りでパンを燒いてゐた時さ。いつもの惡戲氣を出して、よせばいゝのに、一つ面白い格樣のパンを燒いて仲間の小僧共を驚ろかしてやれといつて、パン紛を煉り固めて、巨きな鼻の形を造つて、それをパン燒き竈に入れて、鼻の形のパンを燒きはじめたと云ふわけさ。ところが、お爺さん。それが禍のもとゝなつたのぢやが—何故つて、お爺さん、それだけの事なら、何でもないんだが、折も打、丁度、そのパンを燒き始めると、どうしたことか、あの侏儒は、コクリ〳〵居眠りを始めたんだよ。それがさ、運の惡い時は仕方のないものでな、あの侏儒が居眠りを始めると、仲間の小僧が、きつと、それまで、侏儒の樣子を物蔭から見て居たのだらうよ。こそこそと出て來て、そつと、パン燒き竈の中から、最前の鼻の形のパンを取り出したのさ。ところが、お爺さん。その時は、もう、鼻のパンは、そりや甘さうに燒けてゐたんぢやよ。』と、鼻のお婆さんは、こゝまで話すと、舌づゝみを打ちながら、喉を鳴らして、唾をごくんと飲みこんで、そして、また、話を續けました。

『ところで、その甘さうに燒けた、鼻のパンをさ、お爺さん。その小僧共が、そつと、侏儒の鼻の上に持つて行つて、ぎゆうつと押しつけたもんだよ。それがさ、燒きた

時こそは、氣も狂はんばかりでな。お醫者の所へ驅け出したのだが、不運には不運が重なるものでな。何處のお醫者へ行つても、みんな醫者殿は、氣の毒さうな顔をして、首を傾けて考へこむだけで、どの醫者殿も、あの侏儒の鼻から、鼻のパンを取りのけて呉れる醫者殿がないのぢやよ。お爺さん、可哀さうにな。』と、鼻のお婆さんは、そこで、ほーつと一つ大きな吐息を吐いて、大きな涙をほろりと落しました。そして、また、涙ぎまじりの嗄聲をしぼつて、喋りはじめました。

『そこで、お爺さん。あの侏儒は、自分の不運を悲しんで死んで了はうと決心したのだつけが、よくよてのパンだからたまらないさ、あの侏儒は、キャツ、と叫んで、飛び起きて、それを、とりのけやうとして一生懸命もがくのさ。それが、また、不思議ぢやないかね。いくらもがいてみたところで、その鼻のパンが取れないと云ふ騒ぎぢや。あの侏儒も、その

焼いパンだからたまらない

く考へてみると、なんだか、お醫者の學問を研究したら、自分で、その鼻を癒すことが出來るやうに思へたので、あの侏儒は、早速、パン屋に暇を告げて、それからと云ふもの、人目に付かないやうな隱れ家を探して勉強しやうと思つて、探しあてた隱れ家が、この三本目の樫の木の洞穴なんぢやよ。それで、もう、この洞穴へ來てからと云ふものは、一心になつて、鼻の研究をしてゐるのぢやが、氣の毒な事に、お爺さん、それからもう、三年と三月もたつて、書物もいろ〳〵なものを三百三十三冊も讀んだのだが、未だに、元のやうな鼻に癒す方法も出來ずに、御覽の通り、お爺さん。あの鼻でなあ。』と、鼻のお婆さんは、また、泣き出して、鼻水をすゝりあげながら、

『でも、お爺さん。あの侏儒は、今では、もう、自分では、すつかり鼻の博士樣になつたつもりか、つい、一昨日から、あの通り、洞穴の入口に『鼻の博士』と、云ふ札をかけてゐるのだよ。』と、言つて、鼻のお婆さんは、泣いたのか、笑つたのか解らない樣な嗄聲で

『ほつほつ、ほつ！』と、言ひました。

爺やは、また、爺やで、鼻のお婆さんから、この侏儒の物語りを聞くと、思はず、ほろりと、貰ひ泣きをしました。

ところが、そのはづみに、爺やは、

『はつくしよい……。』と、軍艦の汽笛よりも大きな聲で、嚏を一つしました。そして、ぶる〳〵つと身體を振はせて、

『おゝ、寒い！』と、云つて、手のひらで、水鼻をすゝりあげた、その拍子に、ひよいと洞穴を覗いて見ると、どういふ譯か、今まで、本を讀んで居たと思つた侏儒が、本を床下に落つことしたまゝ、爺やの方を向いて、巨きな赤い鼻の上から、小さな眼を、きらきら光らして、爺やを睨めつけて居るではありませんか。

その時の爺やの驚きやうと云つたら、腰も抜かさんばかりで、がた〳〵慄るへながら、やつとこさ

と、裏山から、逃げ出して了つたのでありました。

『こんな、次第で……』

と、爺やは、こゝまではなしてから、

『先づ、お茶を一杯。』と、云つて、お茶を、がぶ〳〵と飲んで、そして鼻の頭をつるりと撫でゝ、太郎や、次郎や、みい子や、映二の顔を見渡して、

『これが、即ち、爺やの鼻が、赤くなつた理由だよ。つまり、それは、爺やが嘘をした爲に、その嘘がまたとてつもなく大きな嘘だつたので、折角、勉強してゐた侏儒を吃驚りさしたので、すつかり、侏儒を怒らして了つて、侏儒に罰をあてられたのだよ。』

と、爺やは、また、つるりと、赤くなつた鼻の頭を撫でゝ、

『道理で、先刻、侏儒に睨まれた時、この鼻の頭が、ちくりと痛かつたわい。』と、獨言のやうに云ひました。

すると、今まで、熱心に、爺やの話を聞いて居た映二が、心配さうに、爺やの顔を覗き込んで、

『爺や、そんなに痛かつたかえ。』

と、言ひました。

『あゝ。痛かつたよ。だからな、みんな、坊やも、嬢やも、決して、裏山の三本目の樫の木の下で遊んでゝはいかんぞよ。』と、爺やは、いかにも、痛さうに、顔をしかめながら、つるりと、また、鼻の頭を撫で廻すのでありました。

ところが、その翌日の事であります。

昨夜、爺やの話を聞いてから、太郎と次郎は、その侏儒が、見たくて〳〵、たまらなくなつて、朝起きると、二人で、爺やの言つた事も忘れて、裏山の三本目の樫の木の下へとやつて行きました。すると、皆さん。何と不思議なことには、樫の木の洞穴には、侏儒も何も居りませんでした。たゞ、洞穴の入口には、眞っ赤い、眞っ赤い、大きな菌が一つぽつかりと生えて居るばかりでありました。

（をはり）

雀と秋（推薦）

高橋德三郎

日暮だ　日暮だ
はよかへれ
田甫は夜風で寒くなる

案山子にや
おいとまいらないよ

お星が出るのに
何にしてる
田甫は小暗くなるばかり

鼓師と仔狐（推薦）

和田斗思

まだ丁髷を結つてゐた時分のお話です。

也助といふ老人の鼓師がありました。今迄に隨分澤山の鼓をこしらへましたが、也助爺さんが自分で氣に入つたと思ふ程のものはありませんでした。所がつひ一ヶ月ばかり前、近くの山の中で、身體中の毛がピカピカと光る金色の狐を捕まへました。爺さんは大變珍らしく思つて、今度こそ此の狐の皮で、一世一代の立派な鼓をこしらへて見ようと考へました。そこで、その皮を剝いで熱心に仕事を始めました。

何しろ人々から鼓師の名人と言はれてゐる也助爺さんが、一生懸命魂を打込んでこしらへたのですから、逸も立派な鼓が出來上りました。也助爺さんの喜びは大變なものです。今まで數へ切れない細作つて來た中で、始めて自分の氣に入つた鼓が出來たのですから、『也助の鼓』と名づけて、寶物のやうに大切にしまつておきました。

ある夜の事です。湯から上つた也助爺さんは、縁側へ出て『也助の鼓』を鳴らしてゐました。丁度鼓の向ふから、まるい大きな月樣が上りました。秋の最中で、庭には一面に白萩の花が咲きこぼれて、鈴蟲や松蟲の清しい聲が、その間から漏れて來ます。

也助爺さんは、鼓を一つ打つては耳を傾け、又一つ打つては耳を傾けて、その美しい音色に聞き惚れてゐました。それは丁度『コーン、コーン。』と、狐の鳴聲のやうにも聞えます。靜かな四邊の空氣を振はせて響いて行つては、向ふの山に突當つてこだまするのが、丁度向ふから狐が答へるやうに聞えるのです。

暫く我を忘れて打ち寢けてゐた也助爺さんは、ふと萩の花の白い間に、キラ〳〵光るものを見つけて『おや。』と思ひました。そしてよく〳〵見ると、金色の毛をした一匹の仔狐が、シク〳〵泣いてゐるのでした。也助爺さんの心に直ぐ思ひ當つたのは、此間山の中で捕まへた金色の狐の事でした。

『さうだ。あれの子に違ひない。この鼓の音を聞きつけて、親狐懸しさに出て來たんだらう。』

さう思ふと、仔狐が可哀さうになつて來ました。で、暫く見つめてゐますと、見れば見る程その毛色が月光を浴びて綺麗に光ります。その時、爺さんの心の中に、ふと慾が出て來ました。

『この仔狐の皮でもう一つ「也助の鼓」のやうな立派な鼓をこしらへて見たい。』

そこで爺さんが、こつそり縁を下りて行きますと、仔狐もそれと氣がついて、驚いて跳れ起きました。

『逃すものか。』

也助爺さんは萩の花を蹴散らしながら、飛びかゝりましたが、仔狐はヒョイと體をかはして、垣根を跳れ越えました。爺さんも垣の破れから裏道へ出ました。丁度晝のやうに明るい月夜なので、細い路を一散に逃げてゆく仔狐の姿がよく見えます。也助爺さんもどん〳〵〳〵〳〵、桔梗、刈萱、女郎花、秋の七草の咲亂れてゐる野路を傍眼もふらずに四五丁も追つて來たと思ふ頃、不思議にも仔狐の姿はふつと消えてしまひました。

也助爺さんは夢から醒めたやうな氣持で、キョロ〳〵四邊を見廻しました。そこは村の人が立岩と呼んでゐる大きな岩のある前で、岩の後ろは深い山續きになつてゐるのです。爺さんは岩の破目を覗いたり、周圍を廻つて見たりして探しましたが、仔狐の影も形も見えませんでした。四邊一面、白い薄の穂が淋しさうに風に靡いてゐるばかりです。也助爺さんはがつかりして、

『やれ〳〵惜しいことをした。』と言ひながら、ハア〳〵息をはづませて家へ歸つて行きました。

その翌日の夕方です。一人の見なれない旅人がこの村へ這入つて來ました。目のギョロッとした、額に刀疵のある人相の惡い男です。それが丁度立岩の前まで來ると、『やアれ草枕だ。』と言つて、岩の根方へ腰を下して、風呂敷包から握飯を出して食べ始めました。

一つ食べ終つた旅人は、二つめのを取らうとして、

『おや、一つ餘計に減つたぞ。』と呟きましたが、諦めたやうに、又一つ取上げて食べ始めました。そして又氣がついて見ると、三つある筈のが二つしかありません。

『おかしいな。』旅人は不思議に思ひながら、又一つ口へ頬張りました。するとその時、何者か岩の蔭からそつと手を伸して、握飯を攫んだのです。

『畜生ッ。』

旅人は素早くその腕を引捉へました。それは昨夜也助爺さんに追はれて來たあの金色の仔狐でした。

『畜生め。俺の物を盗うなんて太い奴だ。』

旅人は大きな拳骨でポカ〳〵擲りつけました。

たが、何を思つてか、ふと打つのをやめて、仔狐を太い縄でグル〳〵巻きに立岩へ縛りつけてしまひました。そして、『おい兄弟、いい、あばよ！』と氣味よささうに笑つて、向ふへ行つてしまひました。

仔狐は身をもがいて逃げやうとしましたが、どうしても縄は解けません。仔狐は悲しくなつて、コン〳〵と泣き出しました。

そこへ通り掛つたのは也助爺さんでした。

『おや、これは昨夜の仔狐ぢや。ハテア誰そに惡戯をして縛られたんぢやな。何んといふまア有難いことぢやらう。これで望み通り鼓が出來るわい。』

爺さんは意外の事に大喜びで、仔狐の縄を解いて連れ歸らうとすると、仔狐は目に一ぱい涙を溜めて、『助けて下さい。』と言はぬばかりに手を合せました。

根が情深い爺さんですから、それを見ると可哀想になつて來ました。殊に自分が殺した親狐の子であると思へば一層哀れさが增して、迚も鼓なこしらへる氣にはなれませんでした。それで、

『これからもある事ぢやけん、よう氣をつけて人の目に止るやうな所に出ちやいけんぞな。』と懇ろに言ひ聞せて、放してやりました。仔狐はさも嬉しさうにペコ〳〵お叩頭をしながら、山奥へ逃げて行きました。

也助爺さんが家へ歸つた頃はもう眞暗でした。火打石で灯を點して、座敷へ上つた爺さんは、思はず、

『や、大變だ！』と叫びました。

それもその筈、留守中に泥棒が這入つて、あの大事な〳〵『也助の鼓』を始め、この國の殿様から皮の張替を仰せつかつた大切な鼓や、お金や着物まで盜んで行つた跡なのです。

爺さんの顏は見る〳〵眞蒼になりました。殿様からお預りした鼓を盜まれては命がないからです。その時、也助爺さんは、あの仔狐の事を思ひ出しました。

『此度彼奴が、親の皮で作つた「也助の鼓」欲しさに、こんな惡戯をしたのに違ひない。先刻の恩を忘れて、憎い畜生めぢや。』

爺さんはてつきり仔狐の仕業と思ひこんで、齒噛をして口惜しがりました。そしてしまひには情けなくなつて、崩折れるやうに座敷へ坐つたまゝ、ポロ〳〵涙を流しました。

一度その頃、仔狐は立岩の上へ乘つて、四邊を見廻してゐました。そして向ふから、先刻自分を縛りつけた怪しげな旅人が、大きな風呂敷包を背負ふて來るのを見つけると、クルリと岩の上で蜻蛉返りをしましたが、不思議にも仔狐の姿は消えて、立岩は大葛籠と變つてしまひました。

旅人は通りがかりに葛籠を見つけて不思議に思つて、蓋をあけて見ると、中には千兩箱が澤山入つてゐます。

『やッ、これア甘い仕事にありついたぞ。』

男は物凄い笑顏をしてその葛籠を背に負はうとしましたが、餘り重いので縄がブツツリ切れてしまひました。

今度は縄を二重にして背負はうとしたが又切れてしまひました。

『へゝ、千兩箱は矢つ張り重いわい。』男は嬉しさうに呟きながら、自分の身體と葛籠とをぐる〳〵〳〵〳〵縛りつけて、さて立上らうとしたが、何としても立てません。それでも慾深な男は、ドツコイショ〳〵と掛聲をかけながら、一生懸命立ち上らうとして

ゐました。この男こそ、也助爺さんの家を荒した泥棒だつたのです。

そこへ也助爺さんが心張棒を振上げて例の仔狐を追ひかけて來ました。それは仔狐がわざと爺さんを呼び出して來たのでした。爺さんは此處迄來ると、見たこともない男が立岩へ縛られた儘、頻りに『重いぞ〳〵ドツコイショ。』と言つては、足をばた〳〵させてゐるので、呆氣に取られてしまひました。

すると仔狐が、男の傍にあつた風呂敷包を口で開けて『コン〳〵。』となきながら爺さんに見せました。

爺さんがそれを見ると、驚いた事に、その中には、あの秘藏の『也助の鼓』を始め、殿様からお預りした鼓や、盜まれた物が一切はいつてゐました。

『おゝ！これぢや〳〵。』也助爺さんは夢かとばかり喜んで、その包を取上げました。仔狐も嬉しさうに、爺さんの顏を見上げてゐます。

『一體これやどうした譯ぢや。』暫く考へ込んでゐた爺さんは、やつと氣がついて、まだ『重いぞ〳〵ドツコイショ。』を繰返してゐる男に向つて、心張棒で二つ三つどやしつけましたので、男は始めて夢から覺めた樣に吃驚して『どうぞお助け下さい。』と泣

聲を擧げました。そして爺さんの家へ盜みに這入つたことや、千兩箱の葛籠を拾つて行かうとしたら、それが今になつて見ると、立岩だつた事なでを殘らず白狀してしまひました。也助爺さんは始めて鼓狐が恩返しのために、泥棒を縛り上げてくれたことを知つて、どんなに喜んだでせう。

也助爺さんの眼から嬉し涙がポタ〳〵流れ落ちました。仔狐もさも滿足さうに頷いて見せましたが、やがて例の「也助の鼓」の傍へ寄つて、慇しさうに頬ずりをしたり、皮をペロ〳〵舐めたりして、死んだ親狐を戀しがる樣子です。それを見た爺さんの眼からは、又新しい涙が落ちました。

夜が明けてから、泥棒はお役人に引つ立てられて行きました。

その後、也助爺さんはあの仔狐を、自分の家に例つて可愛がることにしました。それから哀れな親狐の靈を慰めるために、立岩の上へ小さな祠を立てて、『也助の鼓』その中へ納めて、『鼓稻荷大明神』として祀つてやりました。

（なはり）

（住所　岡山縣久米郡加美村加美小學校）

化物水夫

花村浩六

一

汽船は、南アメリカの或る港へ向つて一直線に走つてゐました。

その時でした。上甲板作業をしてゐた水夫の一人が、激しい船のゆすぶりにあつて、よろよろッと足場を取られたと思つたら『アッ』と聲を出す暇もなく、其儘前のめりになつて海へ落ちて仕舞ひました。

でも、生れ月のいゝ奴だつたとみえて、まだ海の水まで屆かない前に、思ひ掛けなくも船の横腹に下つてゐた縄の端に、落ちながらヒョイと手がさわつたのです。水夫は『これぞ命の綱ッ』とばかり、無我無中でそれにかぢりついてぶらさがりました。そして一番手近な横ッ腹の丸窓から、拾つた命をすつぽりと船の中へ仕舞ひ込んでしまひました。

そこで始めて胸なで下し、百年目の息をホッとつ

いてみると、此の丸窓は食料室の丸窓だつたのです。

『まづまづ助つた。も少しで地獄の三丁目だつけ。』

水夫は獨り言を云ひながらあたりを見ると、酒もあればビールもあり、サイダーもあればレモンもあり、鑵詰もあれば特製ハムもあり、バナナもあればリンゴもあり、とても水夫なんかしてゐては、一生有り付けさうもない御馳走の山でありました。

水夫は考へました

『すぐにこの部屋から出て行くのは惜しいや。よく寶の山に入りながらつてことを云ふが、考へ所は此處だ。どれしばらくこゝにゐてやらう。』

水夫は食料室の眞中にゆう〳〵と腰を据ゑて、これまでついぞお目にかゝつたこともない色んなおいしいものを食つたり、舌の溶けるやうなものを飲んだりして、とてもいゝ氣持になつてゐました。

一方甲板では、さつきまで働いてゐた水夫の姿が急に見えなくなつたので、大騒ぎになりました。船から落ちるところを見てゐた者もありましたので、船長はこの水夫が溺死した事を、其の日の航海日誌に書き込みました。

二

水夫は食料室で、毎日飽きる程御馳走を食べて、ひとりにこついてをりましたが、もうさん〳〵御馳走を食べたあげくの三日目に、腹鼓をうちながら、

『もうそろ〳〵いゝ頃だな。』

と、考へました。

そして、三日前に夢中で飛び込んで來た例の丸窓から、例の縄をつたつてわざと海の中へ落つこちました。落ちるが早いか、ありつたけの聲を絞つて水の上から船を見上げて叫び立てました。

お天氣がよくて、その日は殊に海の上が靜かだつたので、甲板の人々もすぐ氣が付きました。大急ぎで船を止めてボートを下しました。

仲間の者が救ひ上げてやると――こゝで讀者の皆さん。今、水夫めが何と云ふかお聞きなさい――救ひ上げてやると、水夫め、いきなり仲間の者達に食つてかゝつたのです。

『今頃になつちやもう遲い。俺が三日前海に落つこつた時、あれ程叫んだのに、何んだつて誰も此の俺を救つて呉れなかつたんだ。ひどく友達甲斐のない者ばかり揃つてる。不人情な犬みたいな連中ばかりだ。犬でさへも……。』とか何んとか、青筋をむくむくと立て、白い口泡をばッばッと飛ばして、さんざんにがなり立てるのでした。

『だがまア待て。考へてみると三日前に落ちた者が、今頃何んだつて船の近所をうろ〳〵泳いでゐるんだい？』

お面を喰つたやうにボンヤリさせられた仲間の一人が漸くそこへ氣が付いて、かう聞いてみました。

すると水夫は、

『そんなこと分り切つた話じやないか。もちろん、海に落ちて氣がついた時には、見たら船はもう小さくなつて遠くの方を走つてゐるんだ。仕方がない。俺は一生懸命泳ぎ出したさ。盲滅法泳いで三日かゝつてやつと船に泳ぎつくことが出來たんだ。人を馬鹿にしてゐる。』

と如何にも癪なやうに、ぷんぷんしてゐました。

船長はこれを聞いて、そつくり返つて驚きました。此の大海の上を三日も泳ぎ通しで、全速力で走つてゐる大汽船に追ひついたと聞いては、誰だつて吃驚するにきまつてゐます。

三

また讀者の皆さん。これだけでも思ひ切つてひどいものですのに、話はもつと續くんです。――

船長は兎に角驚きました。けれども驚いたばかりではありません。こんなゑらい水夫が自分の下で働

いて居るのかと思ふと、嬉しくつて鼻が高くなるやうな氣がしました。

船は間もなくブラジルの港へ着きました。着くなり船長は、自慢の鼻高々と新聞にこんな廣告を出しました。

私の船には、全速力の船と、海の上を三日間競走して、たうとう勝つた水夫がゐます。どうです。一つこの水泳の名人と長距離競泳をする者はゐませんか。相手になれると思ふ者は、遠慮なく試合を申し込んで下さい。

この大した新聞を見て、芭蕉の蔭からノッソリ立ち上つた男がありました。

『そんならひとつ俺が。』

と云つた此の男は、目ばかり白い黒坊でした。この黒坊は水泳にかけては、ブラジルはおろか南米一の大名人でした。世間も『鯨』といふ名で通つてゐました。

水夫は内々閉口しました。

『これは飛んでもないことになつちまつた。詰らない大法螺を吹いたばつかりに、こんなことになつてしまつたんだ。これでいよ〳〵化の皮があらはれて

仕舞ふ。困つたなア。』

と、しんから閉口して仕舞ひましたが、今となつてはどうにもかうにもなりませんでした。

そこで水夫は、相手は一體どんな男だか、一度會つてみてやらうと考へました。そして明日がいよいよ試合だと云ふ前の日に、そーつと其黒坊に會ひに行きました。見ると、成程山のやうな大男で、見ただけでも、とてもかないつこありませんでした。

けれども水夫は、如何にも落着き拂つて、そんなけぶりをくさめにも出しませんでしたが、たうとう苦しまぎれに、こんな事を考へ出して黒坊に向つて云ひました。

『何んだ。お前が相手かい。一體お前、幾日位ゐ泳ぎ續ける氣だい。それによつて、俺は兵糧を頭にのつけて行かうと思ふんだが。何しろ幾日も泳ぎ通してゐると、ひどく腹がへるからね。』

さすがの黒坊も、持つてゐた大きな膽をつぶして仕まひました。

『こんな化物みたいな男の相手になつた日にやア、死んでしまふかも知れない。』と黒坊は、眞蒼になつて（いや黒ンボでしたからネヅミ色になつて）其夜のうちに椰子の木山のお月さんを目當てに、スタコラ〳〵逃げ出して仕舞ひました。

（をはり）

童謡

野口雨情

（大人篇）

日暮れ

和歌山　檀上春之助

萬願山の
日の暮じや
むじなが
化けて
出るちけふ

ぶんぶく茶釜

神奈川　手塚　敬三

茶釜だ
茶釜だ
ぶんぶく茶釜だ
をどれや
をどれや
ぶんぶく茶釜だ

鈴蟲

松江市　三島　定市

鈴蟲や
西瓜の種だとさ
それでも
りん〳〵
鳴くだとさ

こほろぎ

横須賀市　茶木　七郎

晝なくこほろぎ
聞いてたら
急に田舍が
なつかしく
つく〳〵私は
山を見た

お星樣

盛岡市　佐々木皎一

空には
金のお星樣
河には
銀のお星樣
銀のお星樣
河流れ

小鳥

東京　湊　一訓

ぴよぴよ啼く鳥
何の鳥
枝から枝へ
渡ります
秋の日　木の實が
熟れ　ち〳〵
お空は高々
晴れる頃

ときちやん鳥目

東京　小林　重義

ときちやん
鳥目
夜はほろ〳〵

夜啼鳥
梟
お目々貸して
もらひたい

水車

山口　行富しげる

こみぞの
小さい水車
お家も車も
小さいが
大きなくるまの
まねをして
小さい水玉
はねながら
秋の日中に
ポトポトポト

港の雨夜

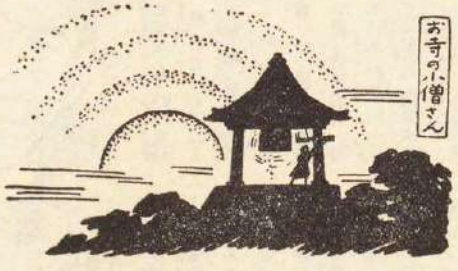
臺北　宮尾　進

港に傳馬の
灯がポチリ
ついたり消えたり
灯がポチリ
しよぼしよぼ雨降る
雨の夜は
つまらなからうな
船頭さん

お寺の小僧さん

新潟　三浦　大船

登つた登つた石段を
お寺の小僧さん鐘つきに
鐘つきに



響くよ響くよ野に山に
赤い夕日の大空に
大空に
沈むよ沈むよお日さんが
お寺の小僧さんも
歸つて行く
歸つて行く

今年の春も

臺北　芳香　睦美

ちらりこちらりこ
散るさくら
お庭で繩飛び
いたしませう
ちらりこちらりこ
散るさくら
花の吹雪は　暖い
ちらりこちらりこ
散るさくら
お庭で仲よく
遊びませう

四つの幽靈

三井信衛

園見の邸に現れる幽靈の正體は？
映畫俳優トオマス高田とは何者？

《前號までの梗概》

園見家の父母は餘程以前に死んだが、兄純郎も亦急死した。その純郎の臨終の際、圖らずも貢一は十三年前、盛岡で拾はれた孤兒であると話され、まだ見ぬ父の添手紙を渡された。そして純郎の遺言により、貢一は園見家の後繼者とはなつたのである。すると間もなく邸内には、夜毎に園見の主人や純郎の亡靈が現れ、更に貢一の實父の姿さへ現れて『わしはもう此世にはない。お前が此邸にゐては必ず不幸になるから、直ぐ邸を去れ』と命ずる。不思議に感じた貢一が、愚師の波多野牧師の暗示によつて、東洋倶樂部（活動小屋）に行くと、そこに上映中の『幽靈人』といふ映畫に出る幽靈は、園見家に現れる生の父の幽靈と全く似てゐた。而もその映畫の第八卷に幽靈人の指紋の大寫しが出たが、それは現在行方不明になつてゐる、主演俳優トオマス高田の指紋であつた。

幽靈の正體は何者か？　いよ〳〵それを確めようと貢一は決心し、寢室の内部に全りペンキを塗つて寢てゐると、そこに現れた生の父の亡靈は、白壁に幾つかの指紋を殘して去つた。その指紋を三枚の寫眞に撮り、再び東洋倶樂部の『幽靈人』の指紋に比べると、それは全く同一であつた。即ち俳優高田は生の父の亡靈といふ事になる。その怪事實を波多野牧師に報告しようと手紙を書く最中、そこに入つて來たのは、純郎が死んで直ぐ叔父の香川の世話で雇はれた下男の宗兵衛、話に夢中になつてインク瓶を覆したが、後に書簡紙へ殘つてゐたのは、その宗兵衛の手の指紋である。何氣なく貢一が、それを三枚の指紋寫眞に比べると、圖らずも宗兵衛の指紋は、幽靈の指紋と同一であつた。

乃ち宗兵衛は又、俳優のトオマス高田だといふ結論に達したが、あの園見の主人と純郎の幽靈の正體は何者であらうか？　否更に、映畫俳優トオマス高田とは何者であらうか？　本篇はこの怪事件に向つて、意外に亞ぐ以外の解決な話ること、はなつた。

五、深夜の冒險

1、餘りに違つた二人

貢一は長い間、パッと驚きの表情で佇んだまゝ、指紋の寫眞を手に持つてをりました。

幾ら突き合して見たとて、やつぱり宗兵衛の指紋と寫眞の指紋とは、同じことです。二つの指紋が同一である上は、否が應でも、生みの父の幽靈はトオマス高田で、そのトオマス高田は、下男の宗兵衛といふことになる。

が、果してさうと斷言出來るでせうか？

あの下男の宗兵衛が、伯父の香川の世話で園見の邸に雇はれたのは、純郎が病床に臥してから十日ばかり後。それはトオマス高田が行方不明になつてから十二三日目で、日だけについて言ふなら、怪しんで怪しむだけの筋はありました。

とは言へ、トオマス高田の顏は、これまでにも度々映畫や繪葉書で見て、知り過ぎるくらゐ知つてをりました。そのトオマス高田の顏は、ペエトオフエンのやうに秀でた眉の持主であり、そして鼻の高い眼光の鋭い、見るからに男らしい容貌でした。あの下男の宗兵衛はどうです？　頬から額から顎まで、ボツ〳〵と黑面疱の隙間もなく、その上に赤ら顏で、眉はショボ〳〵と脫けてゐます。それが同一の人間だなどゝ言つたら、宗兵衛の言葉ではないが、世間の人は笑ひますべい！

さうなると一體、宗兵衛は何者？　トオマス高田は何者？

だがそれはそれとしても、宗兵

衛が生みの父の幽靈であることは、もはや疑ふ餘地はなくなりました。

『あゝ……人間といふものは、全く信じられないもんだなア。……畜生！　一體何の目的で、幽靈になんぞなるのでらう？』

哀しげに無念げに、貫一は深く溜息をつきましたが、それにしても不思議なのは、あの波多野牧師。音に聞えた博學な宗教家であるとはいへ、どうして逸早く『ゴオストトマン』などゝ言つて、貫一の心を呼び覺してくれたのでせう？

貫一は再び紙を取り出し、今までの一伍一什を、波多野牧師に告げたのでした。

2、子供部屋の鍵穴から

早くもまた三四日が經ちました。待ちに待つた牧師からは、何の便りもなかつたが、その三四日の間には、又あの園見の父と純郎の幻像が、時々ぼーッと薄紫色の姿を現して、無言のまゝに消え去つて行くのでした。

あの宗兵衛の扮する幽靈は、とにかくに正體が分つてゐるだけに、さして恐れもしないけれど、現れる度ごとに、思はず顔を反むけたのは、園見の父と純郎――この二つの姿でありました。それは本當に、不氣味な〳〵青白い、煙か靄のやうな光の中に、生きのままの姿を、スーッと現して來るのです。

これは本當に、亡靈なのではあるまいか？そしてその話をきいた宗兵衛が、何かよくない企みをして、自分で又幽靈に扮して、貫一を脅かしてゐるのではなからうか？

ボウン？　と又時計が、遠くの方で十一を打ちました。今は夜も森閑と更け渡つて、さつきからベットにゐた貫一は、今夜はきつと父と兄の幽靈が出る――そんな豫感が、なぜとなしにして來るのです。

貫一はそつとベットから降りました。が、そのベットには、いかにも貫一が眠つてゐるやうに、中に着物を押し込んで、そして電燈を消しておきました。

一分二分三分、ゆつくり〳〵と

窓をあけた貫一、ひらりと屋根に降りたかと思ふと、又一分二分三分、そろ〳〵とその窓を閉めました。さうして眞暗な小屋根の上を、一歩づゝ傳つて行つたのでした。ベランダを過ぎて屋根づたひに、隣りの部屋まで來ると、又ゆつくり音もなく窓をあけて、つとその中に身を忍ばせました。

ちやうどそこは子供部屋で、内部はまつ暗です。貫一は廊下に面してゐるドアのところまで、そーつと手さぐりで歩いて、鍵穴から一心に外を覗いたのでした。

鍵穴から外を覗くと、廊下の電燈も今は消えて、目の前にはほんのぼんやりと、向方側の日本室の障子が、白〳〵見えてゐるだけでした。

……と、それから二三十分經つて、その仄白い障子に、青白い光が、ぽーつと映りました。同時に、その障子が、これ又一分二分三分、ほんのゆつくりと音もなく開いて行つたが、開くにつれてその間から、だん〳〵と現れて來たのは、一筋の青白い光線でありました。しかもその一筋の光線に、煙草のやうな煙が混つてゆく……。

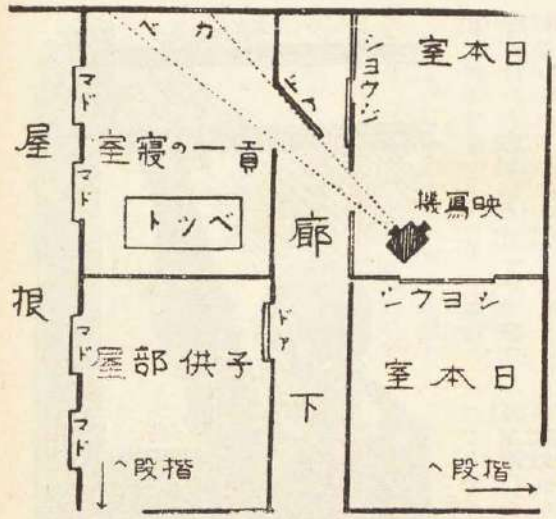
『ふゝん、幽靈はこれだな……。』

心に嘯くなり貫一は、又もや足音を忍ばせ〳〵、そーつとその階段を降りました。

3、一筋の青白い光線

子供部屋の階段を降た貫一は、今度は別の階段を昇つて、一つの

部屋に入りました。それは恰度、さつき青い光の出てゐた隣りの日本間で、向方と此方との境は、四枚の障子になつてをります。



貢一が足音を忍ばせ〳〵、そこへ入つて來ると、果して隣りの部屋からは、さつきと同じ光が、ぱつと映つてをりました。貢一は境の障子にそつと穴をあけて、そこから隣りの部屋を覗いたのでした。

と、これはどうでせう！　貢一は無言のまま、思はずグッと唾をのみ込んで、障子に當る自分の呼吸を殺すため、その口に手を當てでしまひました。

隣りの部屋には、一臺の活動寫眞の映寫機が置いてあつて、映寫機から迸る光線は、斜めに廊下を横切つてゐるではありませんか！　障子の穴からは、廊下を距てゝ横斜ひによく見えました。さつきまで貢一の眠つてゐた部屋のドアは、いつの間にか細目にあけられ、映寫機の青い光は、そのドアから向方に入つてをります。さうして貢一の寢室の白い壁には、一つの姿を寫してゐるのです。それこそは、純郎の姿でした！

おゝこれが何日かの間、貢一を惱ませた幽靈の正體！　生きのままの姿に、あり〳〵と現れたのも道理。いゝや、あの得體の知れない青白い光も、霧のやうな影もまた道理。幽靈の現れる毎に、ドアのあいてゐたのも、これでわかりました。

だが、この幽靈のフィルムは、一體どうして作つたのだらうか？　又何人が作つたのだらうか？　恐怖に　こつけて、貢一をこの邸から追ひ出さうとの目的ではあらうが、その企ての主は誰であらうか？

が、障子の穴から見える人影は、折あしく貢一の方に背を向けてゐるので、その正體はわかりません。

と、その一刹那、思はず貢一は『あゝッ』と言ひかけました。向方の男は映寫機の光を消しましたが、そのまゝ立ち上ると、その顏は貢一の方へ眞正面になりました。折柄月の光が洩れて、その青白く照してゐるのは、おゝトオマス高田であつた！

あッ、と又も叫びかけた瞬間、高田の姿は音もなくスーッと出て行きましたが、貢一は直ぐさま近廻りをして、向方の廊下に出て見たが、高田の姿はもう何處にもない。

『そうだ！　今こそ、高田と宗兵衛とが、同一人物かどうか試す好機會。よし！』

咀嗟にさう思つた貢一、一目散に下男部屋の前まで來て、

『宗兵衛！　宗兵衛！　おい宗兵衛！』

返事がありません。

『おい宗兵衛！　宗兵衛はゐないのか？』

たまりかねて、がらッと障子をあけると、鼾聲をかいて寢てゐるのは、たしかに下男の宗兵衛！

『……ムニャ〳〵、火事は何處だね？』

『うーん……。』思はず貢一は、唸るやうにかう言ひました。

4、自ら幽靈に扮して

三日の後でした。もう夜も十二時前です。

今、貢一は、蠟燭の火を灯して、化粧室の大きな鏡の前に立つてをります。さうして身につけてゐるのは、兄の純郎がいつも着てゐた草色の洋服。足には同じ色のニッカーボッカー。それから帽子も純郎の帽子を冠り、ネクタイも同じ純郎のをつけました。

純郎と貫一とは、本當の兄弟ではないけれど、ほんの小さい頃から、同じ家に育つたゝめか、不思議なもので、いつとはなしに二人は生き寫しでした。今かうして、純郎の遺品の洋服や帽子をつけて見ると、それは又、目の當り純郎が生き返つたかと思へる程で、われとわが姿に、貫一さへもハッとしました。

更に貫一は、學校の鞄の中から、水繪具を取り出して、群青色の繪具を薄く水に溶し、それを顔一面に塗つたのでした。鏡に映つた貫一は、再び兄が病床から訪れて來たかと思はれる程、不氣味な姿と變り果てゝをりました。何といふ恐ろしい形相でせう！

『おッ、これは……！』

自分ながら、思はず顔をかくしたが、そのまゝ靜かにそこを出た貫一、一歩二歩三歩、下男部屋の側まで來たのです。それは恰度、庭の一部に面した眞暗な廊下。もしあの宗兵衛が、生みの父に扮して出るとすれば、どうしてもこゝを通らなくてはなりません。

暗い／＼影に、そーつと身を忍ばせて、待つこと約小半時間。

……と、すうッ！　障子が開くと、ヌッと現れたのは、生みの父の幽靈姿でした。

音もなく幽靈が近づいた時、それこそは全くの不意。すッと貫一は、暗がりに立つたのです幽靈に扮してゐる惡人だけに相手は又幽靈を見て氣が遠くなりました。

『わあーッ！』

と一聲叫んだ相手の幽靈、しばらくは氣の抜けたやうに立つてゐましたが、俄かに又

『あゝッ！　あゝッ！』

二度ばかり聲を立てると、よろよろ／＼とよろめきざま、どつと倒れてしまつたのでした。

『はゝッ、弱虫め！　そんなことで幽靈が勤まるかい！』

貫一は俄かにハ、、、、と笑つて、氣絶してゐる幽靈の顔に、パッと懐中電燈を照しましたが、今初めてつくづくと眺めた幽靈の顔——それは宗兵衛でもなければ、又トオマス高田でもなかつた。

顔一面、どす黑く汚れた鼠色。しかも頬から顎から、モジャ／＼と髯だらけです。

その時、今の騷がしい聲をきいて、何者かがトン／＼トン／＼と廊下を騙けて來る足音がしました。貫一がつゝと向方を眺めると、思ひもよらない伯父の香川！

『あッ……！』

『あッ……！』

二人は棒立ちになつてしまひました。

5、庭に現れた怪像

『誰だ、誰だ、貴樣は誰だ？』

『僕です。貫一です。』

『貫一……おゝ、お前は貫一だな。ふう、一體どうしたといふのだ？』

『實は……』と言ひかけたが、不思議なのは伯父の香川。どうして伯父はこの夜更に、誰にも告げずに邸へ入つたのでせう？

『伯父さん、あなたは何時ゐらしつたんです？』

『もう少し前、急用があつて來た

んだが、いくらベルを鳴らしても返事がないから、今塀を越えて入つたんだ。』

『さうでしたか。……伯父さんにはまだ話しませんでしたが、毎夜毎夜變な事件があるんです……。』

貢一が一伍一什を話すと、香川は『ふむ』と溜息をついたが、やがてかう言ひました。

『貢一、ひよつとしたらお前の身に、とんでもないことが振りかゝるかも知れん。』

『えゝ？』

『當分邸から出た方が良ないか。』

『えゝ？　邸から……。』

思はずも貢一が、面を伏せたとき、庭木の間に音もなく現れた、一つの姿があつたのです。その姿から、この世のものとも思へぬ、嚴かな／＼聲がしました。

『……亡き園見の主である。……亡き園見の主である……。』

『おッ！』

と言ひ合したやうに、香川も貢一もその場に伏してしまつたのでした。

『……香川よ、僞りに生くる勿れ……僞りに生くる勿れ。……貢一よ、園見の家を、ゆめ去る勿れ。ゆめ去る勿れ……。』

又もこの世のものとも思へぬ聲！　ハッと貢一が、恐る／＼顏をあげると、目の前に立つてゐるのは、牧師波多野でありました。

6、事件の眞相は判明

『あッ、波多野先生！』

貢一の聲に、香川もハッと眺めましたが、何かしら牧師の威嚴に壓せられたやうに、只口をビクビクと動かすばかりでした。

『ゴオストマン！

牧師は又も、嚴かにゆつくりと言つたのです。

『えゝ!?』伯父の顏は俄かに蒼ざめて來ました。

『香川さん。純郎さんの亡くなつた折、この邸へ祈りに來た私は、門を入るなり巧みに扮裝をした、惡魔を見ました。惡魔を見て私が十字を切つたのを、貢一君は覺えてゐるであらう。』

さう言つた波多野牧師、何思つたか靜々と傍方の井戸に近より、

釣瓶に水を汲んで、白い布に水をひたしました。さうしてまるで洗禮でもするやうに、倒れてゐる幽靈の顏をひた／＼と、拭つたのでした。と、『うゝ…』と微かに聲を立てゝ、意識を戻した幽靈。そこにぢいッと身を起した幽靈の顏は、繪具は流れ髯は落ちたトオマス高田でありました！

『あゝ、先生……。』

貢一は叫びました。が、香川は何も言ひません。高田も一聲も出しません。只そこには波多野牧師の鋭い眼光と、優しげな、しかし一脈の嚴しさを持つた、その聲があるばかりであります。

『香川さん、私が純郎さんの屍體の前で、あなたに跪いたのは、どうか罪を悔ゐて下さいといふ印だつたのです。あの時あなたの顏には、あり／＼と惡魔の色が漂つてをりました……。』

『波多野先生……。』

長い沈默の後、伯父の香川は言ひました。

『あなたのお言葉は、一つ一つ私の良心を目ざまして行きました。私は自分の身が厭になりました。貢一が可愛さうになりました。私は告白さしてもらひませう。……私は純郎が病氣になりましたとき、醫者から到底駄目だと聞かされまして、不圖惡い心を抱いたのです。貢一はこゝの後繼りです。それを追ひ出せば、園見家の權利は、私のものになると思つたのです。そこで私は、亡靈と言つたもので貢一の心を脅やかして、追ひ出してしまはうと、トオマス高田さんを賴みました。』

香川の告白は、長くつゞきました。

讀者諸君はこの物語の初めに、トオマス高田が變裝には天才である、さうあつたのを御記憶でせうか？

變裝に巧みな高田は、その貴い藝の力を、惡事に應用してしまひました。香川が高田を見込んで賴むと、彼は人間業とも思へぬほどに、巧みに顏に面疱を描き言葉をかへ、さうして下男の宗兵衛となつて雇はれたのです。宗兵衛は又言ふまでもなくあの白衣の怪人。

しかもその一方、映畫の撮影やフイルムの現像に經驗のあるトオマスは、その得がたい技術をも、惡事に應用してしまひました。

園見家にあつた父と純郎の肖像畫、それを映畫のフイルムに撮影して、幽靈を現したのは、言ふまでもなく彼の仕事でした……。

7、最後に又事件の一轉化

伯父の香川もトオマス高田も、波多野牧師の計ひによつて、その惡い企みは、公にならずに終りました。さうして今、トオマス高田は、再びオリエンタル・キネマに歸つたのでした。

名優トオマス高田の復活！　それは多くのファンにとつて、どれほどの喜びでありましたらう！

何ケ月間の行方不明の理由も、深く問ふ者は誰もなかつた。その間の彼の行動を知つてゐる者は、この廣い日本に、波多野牧師と伯父の香川と貢一と、この三人より外には誰もありません。

こちらは貢一、今日も一室に腰かけたまゝに、過ぎ去つた恐ろしい日のことを、思ひ出してをりました。今はもう、すつかりと事件も落着して、彼の心は靜かでした。が、その靜けさの中に不圖思ひ出すものは、兄から言ひ遺された生みの父のことでした。

生みの父だ。生みの父だ。と言つて現れたあの高田の幽靈――それは不思議にも、貢一に生みの父を思はせる絆ともなつた樣です。

生みの父が死んだことにして、幽靈に扮したのは、もとより伯父や高田の出鱈目でしたらう。が、實際生みの父は、もう死んでしまつたのではないだらうか……？

『やつぱり僕は、獨りぼつちなのだ……。』

さびしい夕映を眺める貢一の目には、靜かに光るものがありました。その涙の目のまゝで、靜かに彼は一室に入つて、桃花心木の机の抽出をあけたのでした。

今までは何故となしに忘れてゐたが、そこに入つてゐる生みの父の手紙。今貢一は又もう一度、その手紙をぢつと眺めました。

筆のあとも、見事に書かれた父

の手紙。……と、それを讀んで行く貢一の目が、刻一刻と輝いて行きました。いゝや、輝いて行つたと言ふよりも、我とわが目を疑ふやうに、ぢいつと見入りました。

外でもない。今までは氣がつかないでゐたが、その手紙の『父より』と書いた三字の下に、朱色で拇印が捺されてある！　言ふまでもなく親指の指紋――しかもその指紋は、この何ケ月かの間、貢一の目に深く刻みつけられてゐる指紋です。深く親しみ、深く目に見なれた指紋です。

貢一はハッと椅子を立つと、あの三枚の指紋寫眞を、大急ぎで取り出しました。さうしてその寫眞の親指と、この手紙の拇印とを見比べたのでした。

『えゝッ!?』貢一は思はずその手から、バラ〳〵と指紋寫眞を落してしまひました。さうしてわびそれを拾ひ上げた彼、喜びとも驚きとも哀しみとも恐怖とも、何ともつかぬ色を顏に浮べ、唸るやうに聲を出したのでした。

『おゝ……トオマス高田！』

その寫眞の親指の指紋、父の手紙の拇印、それは又一分一厘、全く同一でありました！

8、名乘り合ひ

こゝは東京市外下目黒にある、オリエンタル●キネマ會社の撮影場でした。今、一しきり撮影が終つて、とある一室に腰かけてゐるのは、バグダットの盗賊に扮したトオマス高田。さうしてその前に腰かけてゐる少年こそは、園見貢一でありました。

その日貢一は、このオリエンタル●キネマの撮影場を訪れトオマス高田に親しく會つたのです。

二人の前のテエブルには、あの手紙が置かれてあります。それをぢつと眺めたトオマス高田の顔は、ハッと驚きの表情に變つて來ました。お芝居ではない、本當の表情に。

『おゝ、やつぱりさうだ。許しておくれ。……忘れもしない十三年前、生活に困つて無情にも、盛岡の町にお前を捨てたのは、この私だつた。さうして今又、慾に目がくらんでお前を苦しめた。……あの香川氏から、生みの父の幽靈になれと言はれて、私はその通りに扮したが、それが本當に私の子だとは、何といふ恐ろしい運命だらう！』トオマス高田は、わな／＼と身を慄はせながら、しかし又懷しいものに觸れるやうに、貢一の手をとつたのでした。

『運命といふものは、本當に不思議です。僕は事件を探らうとして、生みのお父さんの行方を探したことになりました。……しかし過ぎ去つたことは、過ぎ去つたことです。これから本當の幸福が來るのでせう……。』

折から撮影場の廣場には、メガホンの音がきこえて、撮影を報じたのでした。トオマス高田は再會を約して立ち上りました。高田は廣場へ、貢一は門へ、ふと振り返つた高田の目は、涙にあふれてゐたのでした。事件の眞相を探らうとした貢一の努力、それは知らず識らずのうちに、生みの父への探索となりました。

園見の父、兄の純郎、生みの父、ゴオストマン、この四つの幽靈に絡はる怪奇的な事件は、かうして更に、奇しい結末を告げたのでした。

（をはり）

幼年詩

若山牧水選

渡り鳥（賞）

芝白金金町　吉村　貞子

たくさんな渡り鳥
まがつてまがつて
西の空に飛んで行く

評、『まがつて〜』に驚いた心持が出てゐる。（牧水）

鳥（賞）

千葉縣平岡校高二　平戸　實

夕日に輝く鳥よ

失くした笠（推薦）

酒井八洲男

風がヒューヒュー吹きました。
波がせはしく立ちました。
笠をかむつた旅人は、堤を急いでをりました。
ぷつつり笠の紐が切れました。
『あッ、大變だッ。』
強い風が空に輪を描いたと思ふまに、笠はザッブリ川におつこちました。
笠をとられた旅人は、買ふお金

ラケットかついで
僕等はかへるよ

評、幼い氣どりかたが愛らしい。（牧水）

西瓜採り（賞）

千葉縣平
岡校高二　根本　悅

西瓜をしよつて
母とかへりみち
海の見える
山はづれの大松の下で
母と小さい西瓜膝割りにして
たべたよ
遠くの海はまぶしい程光る
清水がにの赤いのが
西瓜の皮のまわりに
歩いてる二匹

評、長いのに佳いのに少いものだが、これなどなか〳〵しつかりしてゐる。（牧水）

さへもない貧乏でした。

『あゝ惜しいことをしてしまつた。もう買へない……』

旅人はがつかり力を落しました。

笠はあほむけになつたまゝ、帆かけ舟のやうに走つて行きました。盃ほどに見えました。

ヒューと風はまた吹きました。

松虫の子が、萱の葉からすべり落ちました。流れの早い川でした。

『あれ、あれ、助けて、お母さん。』

松虫のお母さんは、萱葉の上で泣き出しました。

チンチロ、チンチロ、どうしたの。
チンチロ、チンチロどこへ行つた。
神様助けて、チンチロリン。

水に落ちた松虫の子はいつのまにか、廣い〳〵お座敷のやうな所に坐つてゐるのに氣づきました。

山びこ

和歌山　中筋　定雄

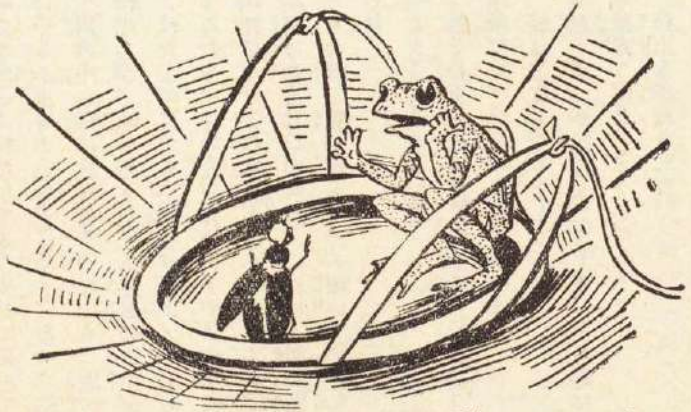
お山の間に來たぞ
山びこさんが
あつちのお山にかくれてら
こつちのお山にもかくれてる
山びこさんにものいふな
まねしをするから
ものいふな
山びこさんにものいふな

評、躍つてる心持が歌の上にも躍つてる。（牧水）

汽車

山口縣鹽田校尋五　木村　勇

汽車が



『おやおや、不思議だ。こゝはどこだらう？』

松虫はそつと這つて見ました。まんまるい、すり鉢のやうなお座敷です。遠くを見まわすと、岸の草も、堤のお家も、矢のやうに走つてゐます。

『おいおい、松虫君。』

何處からか呼び聲がきこえました。

『どなたです？』

『僕さ。君も命びろいをしたのかい？』

それは青い蛙でありました。

『えゝ、今、母ちやんと萱の葉で遊んでゐたら、風が吹いて來て、おつこちたの。』

驛についた
もうおりるんだ
そばにゐた子供が
なつかしい

評、これもその場の心持のよく出てゐる歌です。（牧水）

ぶどう

千葉縣平岡校高二　高吉　長三

家は秋蠶で忙しい
ぶどう棚の下に
赤がねている
顏に
もれ日がちら〳〵してゐる
ぶどうは大きく色づいて
やつばりもれ日に光つてる

評、よくこまかに寫生が出來ました。（牧水）

『さうかい、僕だつてもう少しで死んでしまふところだつたよ。僕、妹にやる小虫をとつてゐるところへ、蛇が來たもんだから、びつくりして川の中へ跳び込んぢやつたのさ。處が今日に限つてこんなにひどい流れだらう。泳がうとしても手足の自由がきかないので、そのまゝ押し流されたものだから、水をガブガブ飲んぢやつた。もう駄目だとあきらめてゐたら、この笠のためにすくはれたのさ。』

『蛙さん。これは笠と云ふものですか。』

『君は知らないのだね。これは人間の頭にかむるものなんだよ。』

その時、笠がゆら〳〵と傾いて、今にもひつくりかへりさうになりました。

『あッ！　あぶない。』

蛙と松虫は思はず笠の上に、しがみつきました。

『誰だい。いたづらをするのは……』

蛙はどなりつけました。

『私です。かんにんして下さい……大變だつたのです。』

『誰方なの？　どうしたの？』

松虫も尋ねました。

かに

山梨縣上九一色校尋三　土橋　小春

雨がふつたら
かにが川とまちがへて
道へはい出した
かにさん〳〵きをつけて
馬にふまれるな

評、ハイ〳〵決してふまれません。（牧水）

風

千葉縣平岡校高二　高石　みつ

風が吹く吹く、風が吹く
白い梨にも風が吹く
いつもの年の風が吹く

評、『いつもの年』には恐れ入りました。（牧水）

『雀ですッ。赤ん坊の餌を持つての歸へりに、鷲に追つかけられましたの。あゝ恐かつた！』

母雀は、恐ろしさのあまり、ブルブル胸毛をふるはせてゐました。

眞綿のやうな毛が、ところ〳〵抜けてゐます。

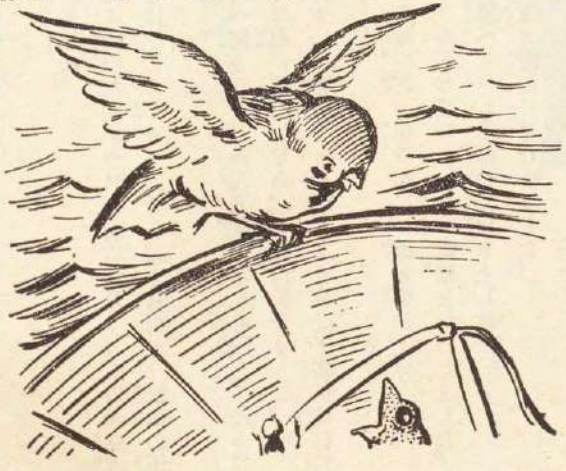
蛙が云ひました。

『そりや、危なかつたね。』

『えゝほんとうに。』

『すゞめさん。もう大丈夫よ。ゆつくりとこゝで羽をつくろひなさいよ。』松虫は親切に慰めました。

松虫と、蛙と、雀とをのせた、まんまるい笠は、波の上を急ぎました。



みの虫

福岡縣下妻校尋四　中村クニヱ

學校の軒から
みのむしが
さがつてゐる
だれでも
しらずにゐる

淋しい道

東京市谷校尋六　森本　又男

兄さんと二人で淋しい道に
草をわけ〳〵入つて行つた
兄さんどこにゆくのと聞いた時
向ふに行くのとおつしやつた
小草わけ〳〵入つて行つた
蛙の聲が聞えてた

まもなく風の方向が變りましたので、笠は岸へ吹きつけられて、繁つた草むらの上に吹きあげられました。

『やあ、陸へついた。』

皆は手をあげてよろこびました。

『私が歸つたら、お母さんは僕のたすかつたお祝に、たくさんのお友達を呼んで來て、秋の樂隊をはやして下さるでせう。』と云つて、松虫の子は喜びました。

『僕も早く田圃の兄さん所へ歸りたい。みんな僕の事を心配してゐるに違ひない。僕も君達のやうな羽がほしいなあ。』と蛙は云ひました。

『私は歸つて、家にゐる坊やに、雀をどりを敎へませう。』と雀はぬれた羽をふるはせながら言ひました。

『みなさん。みんなで、この命の親の笠さんにお禮を申しませう。』

と、雀が云ひ出しますと、みんなていねいにお辭儀をいたしました。

そしてみんな、いそいでお家へたのしく歸つて行きました。

つかれた笠は、草むらの上で靜かにねむりました。

× × × ×

雨

久留米市荘島裏町尋三　椿原　英二

雨ガ降ッテキル
小サイ音デ
昨日カラ

小鳥

長野縣穉高町　内川　成喜

小さい鳥は
せはしいな
右見て左見て
ちよいと逃げた

こほろぎ

神島縣上小川村　箱根　俊男

みんなだまつてきけ
ホウラ
こほろぎが
かきねでないてるぞ

笠をなくした、びんぼうな旅人は、堤の上をトボトボと歩いてゐました。

ふと、下を見ると、草の上に笠が打ち上げられてゐました。失つた笠でした。

『おゝ、助かつた。神さま、ありがたう。』

旅人は大そうよろこびました。

笠を拾つてかむりました。

いそ〳〵と旅路をつゞけて行きました。

（をはり）

死神と六兵衛

西川喜平

一

佛の六兵衛と呼ばれて、慈善を樂しみにしてゐる男がゐました。

商賣は八百屋でしたから、毎日青物を仕入れては、荷籠を擔いで、町々を賣り歩きました。

そして、青物の賣れ殘りがあると、貧乏な町を廻つて、暮しに困る人達に施してやる事を勤めのやうにしてゐました。

それにま　病人のある家へは、賣り溜めのお金を惠んでやりますので、それらの人達ちは、六兵衛を、神か、佛の生れがはりかのやうに、有難がつてゐました。

それで、この噂が、それから、それと傳つて、六兵衛の廻る頃になりますと、こちらの裏家からも、あちらの長屋からも、施しや、惠みを受けたいと、大勢の人が出て來て賴みますので、しまひには、中々賣れ殘りの物では足りなくなりまして、新らしく青物を仕入れては、施しに廻るやうになり、賣り溜めのお金も、殘り少くなるやうな事が度々になりました。

はじめは慈善の爲に、大勢から喜ばれて、よい心持ちになつてゐましたが、今では商賣の元手を、施しにつぎ込むやうになりまして、だん〳〵お金がなくなり、心細くなつて來ました。

それでも、六兵衛は、

『これまで世間から佛と呼ばれて、慈善家の評判を受けてゐた者が、今更金がなくなつたからとて、施しを止めては、外聞が惡るい。』

と、妙な意地や、見得を張りまして、相かわらず、毎日々々施しに廻つてゐました。

その中に、とう〳〵商賣の元手の金を遣ひなくして、だん〳〵貧乏になるてきましたので、しまひには、方々からお金を借りて、それでその日、その日の暮しを立てるやうになりました。

六兵衛のおかみさんは心配をして、

『これまでお前さんにうるさいほど云つてゐるのに、いつでも、これも慈善だ、あれも慈善だ。人を助ける者は、神や佛が救つて下さるなんて、氣樂なことを云つてゐたものだから、とう〳〵こんなになつてしまつた。この頃のやうに世間に不義理の借財が出來て、首も廻らなくなつたつて、誰も救つてくれる者はありやしない。佛なんて云はれてこんなに困るよりは、鬼になつてもお金を儲けて下さい。それに子供の行く末のことも、よく考へてくれなくては困りますよ。』と云つて泣きました。

六兵衛は、尤のことゝは思ひながら、かうなつては、今更いゝ分別もつかず、どうする事も出來なくなりました。

ある日の夕暮に六兵衛は、空になつた荷籠を擔いで、考へながら、トボ〳〵歩いて來ました。

『あゝ已は何んといふ意氣地なしだらう。今まで施しを出した者が、人からお惠を受けるやうになつて、世間の人に後指をさゝれて笑はれるのは、いかにも殘念のことだ。と云つてこのまゝでは、しまいに夜逃げでもしなければならな

いゝこれまで大勢の人を助けてゐるから、己がゐなくなつても、後に殘る者が、食べるのに困るやうなこともあるまい。生きて恥をさらすよりは、死んでしまつた方がいゝ。』とフラ〳〵と、死ぬ氣になりました。

六兵衛は、四邊を見ますと、丁度大川の岸で、宵闇の空は眞暗で、人の往來も絶えて、岸を洗ふ波の音ばかり聞えました。

六兵衛は荷籠を投げ棄てゝ、小石を拾つて袂へ入れ、手を合せて、『お如來さまへお願ひいたします。私はこゝで死にますが、どうぞあとに殘る妻や子が安樂に暮せますやうお助けを願ひます。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。』と唱へながら、川へ飛び込まうとすると、『死ぬなッ。』と、物凄い、何んとも云へない氣味の惡るい聲が、耳元でしたので、『アッ。』と云つて、思はず地の上へ座つてしまひました。

六兵衛は、慄へながら、ソット四邊を見廻しますと、後の方に、眞暗闇の中から、浮き出したやうに、頭から黑い衣をかむつた、恐ろしい姿が見えました。六兵衛は生きた心地はなく、『ハッ。』とそのまゝ、つゝ伏してしまひました。

『六兵衛、わしは死神じゃ。お前の命數はまだ盡きぬのに、ゐゆへに命をすてやうとは愚のことだ。お前はこれまで、慈悲善根を施した報ひに、金の得られる法を授けてやるぞ。』と云はれたので、六兵衛は、恐ろしいやら、嬉しいやらで、どク〳〵しながら、死神から金儲の法を授けていたゞきました。

やがて、サット吹く風に、頭から水を浴せられたやうに、ゾットして氣がつきますと、もう死神の姿は消へ失せて、今までのことは、まるで夢のやうにおぼえました。

それでも、死神の姿は目に殘り、その言葉は耳の底に入つてゐるので、急いで荷籠をかついで、家へ歸つて來ました。

六兵衛は、歸りが遲いので、心配をしてゐたおかみさんに、途中でフラ〳〵と死ぬ氣になつたこと

から、死神に助けられたことを話しました。

『それで死神さまの仰つしやるには、病人の命數の有る無しを敎へてやる。それは死神さまのお名を三返唱へれば、いつでもお姿を現はして下さる。命のある病人には足の方に、命のない者には頭の方に、お見えになるから、それで病人の生き死にの占をしろ、との有難い仰だ。早速明日から商賣替へをしよう。』と、夫婦はその支度に取り掛りました。

二

翌日の朝になりますと、六兵衛の家の表へ、墨、黑々と、『病人壽命占ひ所』と書いた、看板が出ました。

サア近所の者は、この看板を見まして、『六兵衛さんが占ひをはじめるとは不思議だ。それに病人の壽命占ひとは、今まで聞いた事もない珍らしいことだ。どんな占ひか、物は試しだ一とつ占はして見ようではないか。丁度向ふ横丁の魚屋の八さんが、大病でゐるから。』と、大勢で六兵衛を伴れて、魚屋の八五郎の家へ行きました。

六兵衛は、『死神さまの仰せとは云ひながら、お約束の通り、お姿を現はして下さるかどうか。』と、不安心なので、胸をドキ〳〵させながら、『死神さま、〳〵、〳〵。』と、敎

はつた通り、三返唱へますと、不思議にも、昨夜見たまゝの、死神の姿が、アリ〳〵と病人の足元に現はれたので、六兵衛は思はず飛び上つて、

『ぴたつ。』と、大きな聲をしました。

そこにゐる人達ちは、六兵衛は氣でも違つたのかと、ビックリして顔を見ますと、六兵衛は眞面目に勿體らしく、

『この病人は大丈夫、命に別條はありません。もう直に快くなりませう。』と云つて歸りました。

近所の人達ちも、六兵衛は何を云ふかと思つてゐますと、病人はその日から、メキ〳〵と快くなつたので、六兵衛の壽命占ひの評判は、バツと世間へひろがりました。

病人壽命占ひは、町中の大評判となつて、それから、それと噂をされまして、あちらからも、こちらからも、占ひを賴みに來るやうになり、朝から晩まで息む暇もないほどの忙しさで、思ひがけなく澤山なお金を儲けました。

ある日のこと、ある大家から、駕籠で迎ひに來たので、そこ〳〵に出掛けて行くと、その家の主人が重い病氣で、醫者も見放したと云ふので、親類の人も大勢集つてゐました。

六兵衛は、病人の床の傍へ近づきまして、いつもの通り、死神の名を、三返唱へますと、死神の姿が枕元へ現はれました。

そこで六兵衛は、次ぎの間に來て、

『まことにお氣の毒な事で御座いますが、御病人の御壽命はありません。』と言ひますと、皆んな溜息をついて、ガツカリした顔になりました。

やがて、その中の親類の重立つた者は、六兵衛に向ひまして、

『この病人は、この家にとつて大切な人で、今死なれますと、いろ〳〵不都合な事がありますので、せめて一年でも、この世にゐさせたいと皆んな心配して居ります。どうぞ先生のお力で、命の取り止まりますやうお願ひいたします。』と、涙を零して賴まれました。

情深い六兵衛は、氣の毒になりまして、どうにかなることなら、一時でも命を取り止めてやりたいと、考へてゐました。

家の人は、六兵衛の考へてゐるのを見て、大勢で相談をしてゐましたが、やがて六兵衛の前に來まして、

『只今お願ひいたした通り、先生のお力で、幸に病人の命が取り止めましたなら、お禮には、金なり、地所なり、家なり、何んでもお望みのものをさし上げます。』と云ひました。

六兵衛は、夢にも思はぬ、大儲けのウマイ話しに驚いて、思はずブル〳〵ッと慄へました。

ソコで、フラ〳〵と慾心が起りました。

『自分が一生、占ひでお金を溜めたところで、高の知れたもの、今の話しのやうになつたら、大した金持ちになり、一生はおろか、子や、孫の代まで、安樂に暮すことが出來る。何んとかして、病人の命を取り止める工風をしたいものだ。』と考へながら家へ歸りました。

そして六兵衛夫婦は、この事について、いろ〳〵相談をはじめました。

『病人の壽命のない者は、どうする事も出來ないのだが、何んとかして、一時でも命を取り止めて、金持ちになりたいものだ。それには死神さまを出し抜くより外に法はない。』と、とう〳〵惡い心を起しました。

『それに、死神さまも、世界中にお一人ではないだらう。キットそれ〳〵お受け持ちがあるのに違ひない。だからお代替りや、お役替りがないとも云へない。もう外の死神さまの代になつては、とても今までのやうに、お助けをいたゞけるかどうかわからない。お金を取るなら今の中だ。それにお金さへ出來れば、この占ひを止めるのだから、死神さまの御厄介にもならなくてもいゝのだ。』と、夫婦は慾の爲に、自分勝手な理屈をつけて、惡いたくみを考へました。

六兵衛は、また病人の家へ行きますと、主人の病氣は、ま〳〵わるくなりまして、今にもむづか

しいと云ふので、家中の者は、泣き悲んでゐる所なので、六兵衛の來たのを見て、喜んで迎へ入れました。

六兵衛は、一生懸命で、死神さまに知れては大へんと、聲を潜めまして、

『御病人の御壽命を取り止めるのは、當る、當らぬのお受け合ひは出來ませんが、これは私の一世一代の秘法ですから、そのお積りでお聽き下さい。そこで、その法と云ふのは、御病人の枕の向きを替へるのです。今までは西の方を枕にしておいでになるやうだが、それを東の方へ替へますので、私が咳拂ひを一とつしましたら、それを合圖に、寢床をグルリと廻して下さい。これは手ばやくやりませんと、法が破れてしまひます。法が破れると、御壽命は直になくなります。』と、云ひますと、そんな事で壽命が取り止まれば、此上もないことゝ、家中大喜びで、大勢掛りで、病人の寢床の、蒲團の廻りを持つて、六兵衛が合圖の咳拂ひを、片唾を呑んで待つてゐました。

六兵衛は、こゝが大事のところ、やりそくなつては大へんと顫へながら、

『死神さま、死神さま、死神さま。』

と三返唱へますと、いつもの通り、お姿が現はれました。

六兵衛は、死神の姿を見るのも恐ろしく、目を瞑つて、

『エヘン』と、一とつ咳拂ひをしました。

待つてゐた人達ちは、

『ソレッ。』と、蒲團をグルリと廻し、とう〳〵病人の枕の向きを替へてしまひました。

六兵衛は怖わ〳〵目を開けて見ますと、死神の姿も見えず、枕の向きも替へてあるので、ホット一ト息つきましたが、身體はビッショリと汗になりました。

ところが不思議にも、病人の顏色がだんだんよくなり、今まで口の利けなかつたのが、話しをするやうになつたので、サア家中の喜びはありません。六兵衛を命の親と、口々に禮を云ひました。

そして幾日かたつて、病人がスツカリ快くなつたので、約束の通り、お禮に澤山のお金を貰ひました。

三

六兵衛は、急に金持ちになりましたので占ひを止め廣い邸を買つて、そこへ引き移り、下男や下女を大勢つかつて、今までに變る、立派な暮しをするやうになりました。

それで何事もなく、子供の成人を樂しみに暮してゐます中に、六兵衛はフト風を引いたのが元で、ブラ〳〵病になりました。

その病氣は醫者にもわからぬと云ふので、有難いお加持や、御祈禱を願つたり、神や佛にお詣りをして、信心をしてお願ひをしたり、いろ〳〵手を盡くしたのですが、少しもよくなりませんで、身體はだん〳〵やせ衰へて、昔の面影はなくなつてしまひました。

六兵衛夫婦は、もしや死神さまのお祟りではないかと心を痛め、死神さまを騙した罪ほろぼしにと、町中の困る人達ちに、お米や、お金を澤山に施しましたので、慈善家の評判は、ます〳〵高くなりました。

その中に六兵衛の病氣は、だんだん重くなつたので、家中の人は眠らずに看病をしました。

六兵衛は夜、晝となく、うとうととしてゐましたが、ある晩、『六兵衛、六兵衛。』と呼ぶ聲が、耳に入りましたので、目を覺まして見ると、枕元に死神の姿がありありと見へるので、六兵衛はハット頭を下げると、死神は何んにも言はず、六兵衛の手を取つて、外へつれ出しました。

六兵衛は怖わ〳〵死神の後について行きますと、やがて何所とも知れませんが、その高さが、天までもとゞくかと思はれるやうな、お堂の中へ入りました。

そのお堂の中の廣さは、見とほしの出來ないほどで、天井は空のやうに高く見えました。

そしてお堂の中には、見渡す限り、何萬とも數知れぬ蠟燭が灯してありまして、その明るさは眞晝のやうでありました。

それでお堂の中はソヨとの風もなく、物音ひとつ聞えず、しんしんとして、その陰氣なことは、冥土とはこんな所かと思はれました。

やがて死神は、數多の蠟燭の中で、勢よく燃えてゐるのと、もう短くなり蠟が流れて、今にも消えさうになつてゐるのを指して、『六兵衛、これを見ろ。この勢のいゝのは、元はお前の命であつたが、あの病人と取り替へたので、あの者の命數はまだ中々盡きないことになつた。またこの短い方は、あの時取り替た今のお前の命だ。』

これを聽いた六兵衛は、『アッ』と驚いて、氣を失ふばかりになりました。

やがて氣を取り直して、『死神さま、死神さま。私が一時の心の迷ひから、とんだ事をいたしました。慾の爲に目がくらみ、自分の命の取り替へたことも知らず、いつまでも生きてゐられるやうに思ひ、一生はおろか、子や孫の代までも、安樂に暮せるなどゝ、喜んでゐましたのは、何んといふ淺ましいことでございませう。もう〳〵お金も何もいりません。元の貧乏がよろしうございます。只今にも、あるだけのお金を殘らず施してしまひますから、どうぞお慈悲をもちまして、私の命のおつぎ足しをお願ひいたします。

せめて子供の成人いたしますまで、一生に一度のお願ひでございます。』と、一生懸命に、泣きながらお願ひをしましたが、死神は何んとも答へませんので、六兵衛は堪らず縋りつかうとしますと、今まで明るかつた火はフット一時に消えて、眞暗闇になり、死神も、お堂も、何もかも見えなくなつてしまひました。

スルト何所ともなく、自分を呼ぶ聲が聞えてきました。耳をすましてよく聽くと、それは、おかみさんや、子供の聲でありました。

六兵衛は、『あゝ可哀想に已をさがしてゐるのか、六兵衛はこゝにゐる。』と言はうとしますと、いつか聲が出なくなつてしまひました。

六兵衛は、『アゝ情ない。口をきゝたいにも聲は出ず、逢ひたいにも何處にゐるか見ゑない。一と目逢ひたい、話しをしたい。』と、身體を悶えて、狂ひ泣きに泣きます中、だん〳〵呼ぶ聲が、遠く幽になり、やがてパッタリ聞えなくなつてしまひました。

二三日たちましてから、金持ちの慈善家で名高い六兵衛のお邸から、立派なお葬式が出ました。

（をはり）

童謠

野口雨情選

（子供篇）

明神祭

山口縣　坪田　君江

宮島船々
おかげん船々
眞赤なちやうちん
やかたでぶら〳〵
明神祭だ
帆かけてお走り

竹の葉

青森縣　石橋晋太郎

ふく風が
おらがの家の
うら庭の
竹の葉さつさと
なでて行つた

金の星

岐阜縣　佐藤　武

スーと飛んで
何處へ行く
金の星の所へ
お使ひか
スーと飛んだ銀の星

日向ぼつこ

三重縣　中西榮之助

ゑんま堂の
お庭は
日當りでぬくい
日なたぼつこに
さあ、行こう

雨

大連　松井　融

マツクロ雲ガ出テキタ
オヤ〳〵タイヘン
ザア〳〵雨
コレハコマツタ
タイヘンダ

春

熊本縣　藤崎　利夫

太る〳〵竹の子
伸る〳〵木の芽
はへる〳〵小草
出る〳〵麥の穗

ペン〳〵草

長野縣　小口すま子

隣の家根に
ペン〳〵草生えた
風吹きやあ
ゆれる
小さい雀
ペン〳〵草にざれた

雨上り

茨城縣　中島　三郎

小雨がやんで

青い蛙が
かぼちやの
はつぱに
ゆられてる

モグラ

朝鮮　田邊　信靖

島ノトンネル
モグラガ通ル
夜晝島ノ
トンネル通ル

森のあかり

新潟縣　小林　秀雄

森の中の
あかり
馬の目のやうだ

朝の風

群馬縣　須永　たけ

なんだか〳〵
いゝ氣持
まどから
ふきこむ
朝の風

鳩ぽつぽ

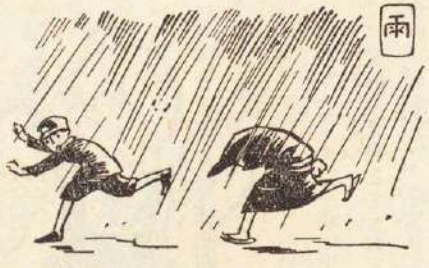
甲府　豐島　泰

道端で
もろこし拾つた鳩ぽつぽ
道端で仲よく
たべてゐた

かぼちや

北海道　山下　文雄

伸びた〳〵
かぼちやのつるは
物ほしざほへ
くるりとまきつき
とんねる出來た



水の玉

東京　南保三津男

雨がやんだ
そのあとで
椎の木のこずゑに
水の玉
水の玉
だん〳〵下へおりてくる

お月さん

北海道　佐藤　錠二

お月さんが
家の後から上つた
家の後は海
お月さんの下の方で
浪の音がしてる

簞笥のお金

伊藤あや子

×市も場末のごみ〳〵とした町の角に、此の四邊には珍らしい、お城のやうな大きな家が、ぽつねんと一軒立つて居ります。今では住む人も、手入れをする人もありませんので、紅葉の頃は、空までも眞紅になるやうな廣いお庭は、見る影もなく荒れ果てて居ります。お庭を圍んだ立派な高塀も、段々龜裂が入つて來ました。門の所の石垣も年々崩れて行くばかりです。

さて此の家にはずつと以前、いつもにこ〳〵とした背の低い、お金持のお婆さんが、たつた一人で住んで居ました。お婆さんには子供も無ければ孫もなく、又別に道樂とてもありませんでしたが、たゞお金が、お金丈が、好きで〳〵ならないのでした。勿論世間にお金の奴きでない者は滅多にありはしないでせうけれど、その中でもこのお婆さんのお金好きは、並一通りのものではありませんでした。

お婆さんの家には昔から、誰も氣の附かない妙な

所に、小さなお金藏が造つてありました。

お婆さんはそこへ四つの丈夫な簞笥を据ゑて、紙幣、金貨、銀貨、銅貨とそれ〴〵別の簞笥の中へ、有金を納めておくのでありました。どの簞笥にもぎつしりと、身動きもならぬ程に、それ〴〵のお金がつまつてゐて、もう今では、新たに這入る場所なんか、少しもない位でした。

お婆さんは一人で毎日このお藏へ這入り、入口に錠を下ろして、それからからだの周圍へ一面、お金を並べてほく〳〵と喜んで居ました。お婆さんは四五軒の長屋を持つて居ましたので、毎月そこから幾何かのお金が這入つて參ります。お婆さんはそのお金を手に入れると、直ぐに又、欣々とお藏へ這入り、今這入つて來たばかりのお金をそこへ並べて、まるで遠い旅からでも久しぶりに歸つて來た、娘や息子をいたはるかのやうに、撫せたりさすつたりするのでした。そして、『お前は隨分難儀をしたらう。こんなにひどく、汚なくなつて來たのだから。』とか、『お前はどうしてこんなに傷を附けられたのだ。可哀さうに、困るわねえ。廣い世間には亂暴者が隨分居るから。』とか、まるで小さい生きものにでも話しかけるやうに、にこ〳〵とお金と話をするのでありました。

お婆さんの家へは時々町の銀行や、郵便局から人が來て、お婆さんに、お金を預けなさいと勸めました。

『お婆さん。用心が惡いですよ。惡いことは言はないから私の方へお金はすつかり預けておきなさい。』

『何卒お婆さん。私の銀行へお預け下さい。私の方は固くつて、決して間違ひありませんから。』『いやお婆さん、郵便貯金になさいまし。手輕で一等安全ですから。』などゝ皆は交る〳〵脅したり、すかしたり、慾で釣らうとかゝつたり、世話のかゝらぬ相談をしかけたり致しました。が併しお婆さんは、たゞ

にこ〳〵と笑つてゐるばかりで、では預けやうかなどゝは決して言はないのでした。

近所の人はよく、

『お婆さんは、一體どこへお金を隠しておくのだらう。』『あんなにお金を貯め込んで、誰に殘してやる心算だらう。』『今にそつくり盗人に盗られてしまふことだらう。』などゝみんな御親切に、寄るとさはると心配の種にして居りました。そして又、この近所の人等はお婆さんに逢ふときつと、

『お婆さん、さぞお淋しうございませうね。』とか、『さぞ御退屈でございませう。どうです。猫でもお飼ひになつては。』とか、やさしい聲で言ふのでした。併しお婆さんはその度に矢張り、にこ〳〵と笑つてゐるばかりで、少しも相手にならうとしませんでした。退屈どころかお婆さんは、毎日お藏で仲よしのお金と一日遊んで居るので、日の暮れるのさへ知らないのです。自分では心から樂しい嬉しい毎日だと、思つてゐたに違ひありません。

それから又お婆さんは、猫だの犬だの小鳥だのを、別に嫌ひではありませんでしたが、それ等を家に飼ふといふことは大嫌ひでありました。何故と言つて、さうした生きものを家に置けば、どうしたつて幾らかはお金がかゝります。大好きなお金と『さよなら』して、餘り好きでもないさうした生きものを飼ふことは、お婆さんにとつてちつとも嬉しくないことでありました。

又お婆さんは、一人暮しではありますが、至つて氣丈で、戸締りなどもしつかりと嚴重にする癖なので、まだ一度も泥棒などに見舞はれたためしはありません。いつでしたか、近在の金持共を、荒し廻つた大泥棒が、ふとお婆さんのとこへ目星を着けて、或る晩のこと、闇にぎみれて忍び込んで見たさうですが、不思議なことには、何處からともなく、ガラ〳〵ガラ〳〵と物すさまじい音が起り、何だか異形

な大勢の者が、手に〳〵獲物を取り持つて、走り出して來るやうなので、泥棒は眞蒼になり、逃げ出したと言ふことでした。傳へ聞いた小泥棒共は、ぶるぶるとおぞけを慄つて、もう〳〵ふつゝりお婆さんの家へ這入る望は斷ち切つてしまひました。

さてお婆さんの、廣いお庭の紅葉も散つて、そろそろ冬の近づいた寒い或る日のことでした。お婆さんは一日、隅々の落葉を掃き寄せ、マッチをつけて焚いたりして、大變に疲れました。で、夜床へ這入ると、ぐつすり寢込んでしばらくは何の覺えもありませんでした。

チンチンチンと茶の間の大きな柱時計が、三時を打つた頃でした。するとお婆さんの枕元の、硝子障子を言葉もかけず開けた者があるやうです。用心のいゝお婆さんは直ぐぽつかりと眼を覺ましました。毎夜、萬一の時の用意の爲に、お婆さんは天狗樣の持つやうな、黒光りのする笏を、右手の脇に置

いて寝る癖ですから、直ぐにそれを握りしめて、そろ〳〵上眼で障子の際を見やりました。さうすると、どうでせう。居る〳〵、四人も知らぬ人間がゐます。しかも膝を揃へてもうちやんと坐つて居ります。お婆さんは、はつと思ふと、ぱつと飛び起きて、いきなり布團の上に坐りました。

『何者ぢや。』

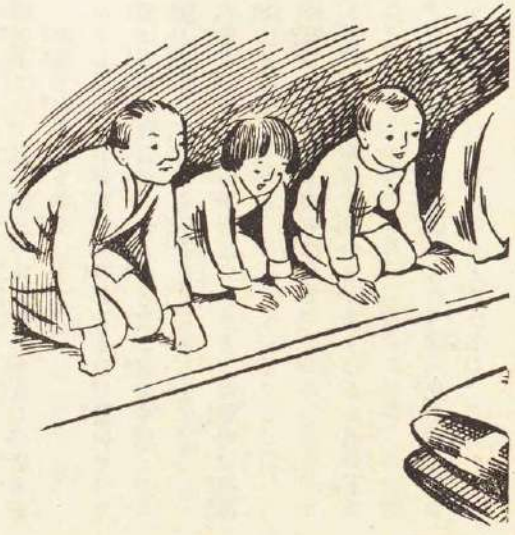
年は取つても武士の娘ですから、お婆さんは少しもあはてず、一同の者をにらみつけて、大きな聲で怒鳴りました。

『はい。』

驚いたことには四人は、小さな聲で返事をして、恐れ入つたかのやうにお婆さんに叮寧なお辭儀をするのであります。

お婆さんはちよつと拍子抜けがしましたので、咳拂ひをし乍ら少し居ずまひを直し、四人の者をじろじろと眺めました。

一番端に居る男は、醉つぱらひ見たやうな、眞赤な顔をして、粗末な衣服を纏つて居りました。其のお隣りは、寒さうな眞白の、可愛いらしい服を着た、透通る程色の白い女の子でありました。其の子のお隣りは、橙色の光澤のあるジャケツを着て、メタルを下げた輝くやうな顔色の、活潑さうな男の子でし



た。も一人は、皆とは少し離れて畏つて居ましたが、それは誠にむづかしげな顔をした顎髭の長いおぢいさんでありました。

『私共は、先程からあなた樣のお目覺めを、かうしてお待ち申して居ました。』

顎髭のおぢいさんは、間もなく恐る〳〵膝を乗り出して、お婆さんを見上げ乍ら、細い聲でかう申しました。お婆さんは呆れてまじ〳〵皆を見直しましたが、併し油斷なく碎ける程も笏を握りしめ、聲を荒らげて申しました。

『何だつて、私を待つて居たなぞとは、私に何か用でもあるのか。』

『左樣でございます。私共は常日頃あなた樣にお手厚くもてなされて居りますので、今夜突然甚だ失禮だとは存じましたが、揃つてお禮に出ました次第で御座います。』

『えつ、わたしにお禮に出たとお言ひか。わたしは一向覺えがないが。でお前さん等は一體何處のお人さんぢや。』

お婆さんはこゝで、少し聲を和らげて、皆を眺め廻しました。

『申し後れましてござります。私奴は紙幣の開祖で御座りまして札右衛門と申します。』頸毘のおぢいさんがうや〳〵しくかう云つて、お辭儀を致しますと、他の三人の者も一樣に膝を進めました。先づ醉つぱらひのやうなのが、

『御免下さい。私は銅貨の總取締りを致して居ります、銅藏と申す者で御座います。』

と、ふら〳〵手を突いて申しました。續いて、

『僕は金貨の代表で、金太郎と言ふ者です。』

『私は銀貨の女王で、銀子と申しします。』

と男の子も、女の子もはつきりとした聲で、挨拶を致しました。

お婆さんははたと膝を打つて、

『さうか〳〵。それで解つた。ようこそお出で下さつた。』

と忽ち大さうな御機嫌になつて、『先づ〳〵ゆつくりお話なさつて下さい。』と言ひ乍ら、くる〳〵と帶を締め、お茶を沸かしたり、鹽煎餅を出したりしました。

四人の者は遠慮なく、お茶を飲んだり、鹽煎餅を嚙んだりし乍ら、お婆さんに聞かれるまゝに、めいめいの生れた所や、見て歩いた世間のことを、面白をかしく聞かせました。

『これは〳〵、近頃にない樂しい夜を過させて貰ひました。又度々お出でなされて下さりませ。』

夜のほの〴〵と明けかゝる頃、お婆さんはかう言つて、四人の者を障子の外へ送り出しました。四人の者は叮寧に挨拶をして、廊下の暗い奥の方へ消えて行つてしまひました。

すつかり朝になつて、雨戸を明け放してから、お婆さんはいろ〳〵と昨夜のことを考へて見ました。まるで夢のやうでもあり、本當のやうでもありました。急いでお金藏へ這入つて、箪笥の中を調べましたが、紙幣も金貨も銀貨も銅貨も、昨日に變らずつしりとつまつて居りました。

其の後度々この四人連れは、お婆さんの所へ來ました。そして段々馴れて來るに從つてお婆さんの色んな用事を、手傳ふやうにもなりました。お婆さんは喜んで、おしまひには日が暮れて彼等の來るのを此の上もなく、待遠しく思うやうになりました。

さて冬も段々半ばになつて、その年は又格別に寒さが募つた爲ですか、日頃丈夫を自慢のお婆さんも、ひどく弱つて年の暮れには、もう二度と起きられさうもないやうな、重い病氣に罹りました。ゴホンゴホンと咳をしながら、廣いお庭に向つた座敷の中で、お婆さんはたつた一人、晝間は時々障子に映る枯枝の影を見つめ乍ら淋しく暮らすのでありました。近所の人が時々見舞にやつて來て、

『お婆さん何か御用をいたしませうか。』『お使ひの御用はありませんか。』などゝ訊ねて見ましても、お婆さんはかぶりをふつて、何にも用はありませんと申しました。あんなにひどく弱つてゐるやうに見えても、お婆さんはまだ動けるのだ。中々死ぬやうな事はなからう……とみんなは心の中で思つて居ましたが、どうして〳〵お婆さんは、もう少しも動けないのでした。たゞ夜になると例の四人が、いろ〳〵用をして呉れるので、不自由をしない丈なのでした。

お美味いものも頂かず、綺麗な物も身に着けず、活動寫眞もお芝居もついぞ覗いたこともないこのお婆さんを、四人の者は、心の限り大切にして呉れるのでした。

銀子は細い蒼白い手に針を持つてお婆さんの爲、ふつくらとした絹の布團をこしらへて呉れました。金太郎少年は、肉を叩いて毎晩、肉汁を造つて呉れました。札右衛門はお婆さんの足腰をやすみなく揉んで、介抱をして呉れました。銅藏はならず者のやうですが、又中々親切で、いつも動けないお婆さんを、お金藏迄、負ぶつて行つてくれました。

或る日の午後のことでした。

お家賃を持つて四五人の長屋の人がやつて來ました。みんなは何度も大きな聲で呼ばりましたが、少しも返事がありませんので、不思議に思つて、裏口からお庭へ這入つて參りました。そしていつもお婆さんの寢てゐるお座敷の前で、聲を揃へて、

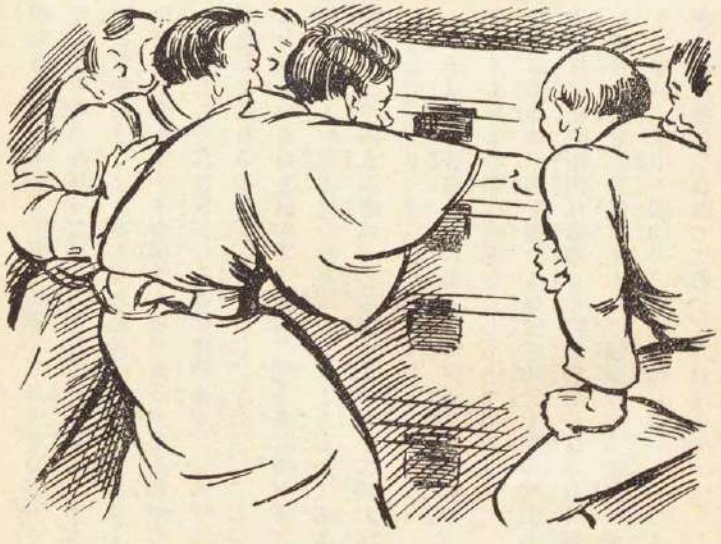
『お婆さん。お婆さん。』と呼ばりましたが、少しも返事がありません。口々に變だぞ〳〵と言ひ乍ら、みんなはどや〳〵椽側へ上つて、障子を開けて見ました。

見るとお婆さんは、見馴れぬ綺麗な布團の上に、ふんわりと樂さうに眠つてゐるのでありました。

『お婆さん。お婆さん。』

皆は又覗き込んで呼ばつて見ました。併し何の返事もありません。さはつて見ると、驚いたことは手足はすつかり氷のやうに冷えて居ました。

『あゝ、何時の間にか佛樣になつておゐでだ。』



『ほんとにお氣の毒なことだ。さぞ苦しかつたことだらう。』

『でも何といふおだやかな死顏であることだらう。』

みんなは息の絶えてゐるお婆さんを取り卷いて、眼をしばたゝき乍ら、こんなことを言ひ合ひました。そして口々にお念佛を稱へたのでありました。

お役所で種々取り調べた揚句、お婆さんにはたつた一人、遠い所に甥があることが分りましたから、早速電報を打つて、その人を呼び寄せました。

お婆さんのたつた一人の肉親であるその甥は、至つて慾の深い男でありました。思ひがけなくお婆さんのお金が貰えることを聞いて、飛び上る程喜びました。で夜を日についで、大急ぎでやつて來ました。

近所の人等はお婆さんの甥が着くと、早速詳しく生前のお婆さんの樣子を話しました。

『お婆さんは銀行へも、郵便局へも、お金を預けた樣子は少しもありません。』

『何處か家の中の、人の知らない所にかくしてあるでせう。』

甥は皆にお禮を言つて、たつた一人で廣い家の中を、隅々迄探しました。椽の下を掘つて見たり、お佛壇を引つくり返して見たり、手箱を叩き壞して見たりしました。併し何處からも、お金はつひに出て參りません。

閉口したお婆さんの甥は、拜むやうに近所の人々を賴んで、一緒に探して貰ひました。そしてある日、例のお金藏をやつと發見いたしました。錠前屋を呼んで錠を開けさせ、胸をわく〳〵させて、中へ這入りますと、中にはやはり例の箪笥が、四角にきちんと、四つ並んで居りました。

『この中だ。』

『確かにさうだ。ぎつしりつまつて居るだらうよ。』

みんなは固唾を呑んで、抽き出しを開ける甥の手許を火のやうな眼で見て居りました。

『おやつ。』

案外にも甥が大きな叫び聲を上げた抽出しの中には何にも這入つて居ません。空つぽです。紙屑一つ、散つ葉一つありません。

『これは又どうしたことだ。』

『次のはどうだ。』

みんなに急ぎ立てられて、汗になつたお婆さんの甥は一生懸命にみんなの抽き出しを開けましたが、お金らしいものは影も形も出て來ません。たゞ四つの一番下の抽き出しに、一つには白い女の子の洋服、又一つには橙色の汚れたジャケツ、次のには粗末な男の衣服が一組、一番おしまひのには、長い顎髭丈が、氣味惡く、じつと這入つて居りました。

『泥棒が這入つたのだらう。』

『いやもつと別な所へ置き場所を變へておいたのだらう。』

『ばけものゝ仕業だよ。』

『お金の神樣が、お取り上げになつたのかも知れない。』

思ひ〳〵のことをみんなは、口々に申しました。併し誰もほんとのことを知つてゐるわけではありません。みんな氣味惡さうに取り出された物を眺めて、顏をそ向けてしまひました。

慾深なお婆さんの甥も、何だか恐ろしい氣がし出して、翌日直ぐ、遠い所へ歸つて行くことにしました。つまらなさゝうに立つて行く甥の後を見送つて、近所の人は氣の毒がつたり、勵ましたり致しました。

× × × ×

それからもう幾年か經つて居ります。

お金の行方は未だに少しも分りません。皆さんにはお分りでせうか。

（をはり）

サンタクロースになつたお爺さん

横田貴美衞

一

東京のある場末に、正吉爺さんといふお爺さんが住んでゐました。正吉爺さんは子もない、孫もないたつたひとりぐらしの上、もうだいぶ年寄りでしたから、思ふやうに力仕事も出來ず、すゐぶんみすぼらしい生活をしてゐました。それで正直で、いつもにこにこしてゐるので、人々からにこにこ爺さんにこにこ爺さんと慕はれてゐました。

にこにこの正吉爺さんは、たいそう子供が好きで、子供さへ見ると、お腹の空つたのも、寒いのもすつかり忘れてしまつて自分もしんから子供のやうになつて、子供達と遊んでゐるのでした。そして少しでもお金が入ると、すぐ玩具やお菓子を買つて子供に配けてやつてしまふので、自分は相變らずいつも貧しい生活ばかりしてゐました。貧いといへば、正吉爺さんだけでなく、正吉爺さんの家のまわりはどの家もどの家もみな貧い人達ばかりでした。

もうクリスマスが近づいてきたといふのに、子供は何一つ買つてもらふことも出來ません。買つてもらふどころか、町の賑やかな通りへ出ると、方々の店のクリスマス飾りが目について毒だといふので、子供たちは、町の通りへ出ることさへ許されないで、終日泥濘くさい場末長家の、黄い陽だまりで寒さうにふるへながら、石ころなんかをおもちやにして遊んでゐるといふみじめさでした。

正吉爺さんはこんな子供達を見ると、可哀さうで可哀さうでカりません。自分の貧いことも忘れ、せめてクリスマスの日だけでも、子供達のひとりひとりになにか贈物をして、人並みに樂しく遊ばせてやりたいと思ひました。

でも、お金がなくてはどうすることもできません。とにかく、そんなものを買ふために お金からこしらへてかゝらなくては駄目だと思つたので、正吉爺さんは何か仕事をさせてもらはうと、ぶらぶら町の眼かな通りへやつてきました。そして、自分を使つてくれさうなところへいつて、いちいち丁寧に頼んでみましたけれどもどこの家でも、

『この不景氣な年の暮れに、人なんか傭つて居られるものか』

と断られました。あるところでは、

『何だか變な爺がうろついてるぜ。用心せなくては——』

といふやうな疑りぶかい眼でじろじろ白眼まれました。あるところなんかでは荒くれ男から恐ろしい權幕で、

『汝のやうなよぼよぼ爺に何が出來るものかい。愚圖ノ〜してると蹴飛してしまふぞ！』

と怒鳴られましたので、正吉爺さんは、

がつかりしてしまひました。暮れて間もない師走の空は、大きな硝子張りのやうに青く冷く澄み切つて、剃刀りの刃のやうな鋭い三日月の寒い光りが、正吉爺さんの頭から足のさきまで、ジーンと突刺すやうに滲透りました。

町の大通りは何といふ賑ひでせう。お正月の用意と、クリスマスの準備とで、それはとても大變な賑ひでした。どの商店もどの商店も目の醒めるやうに美しく飾りたてゝ、一人でも多くのお客樣を引きつけようとしてゐます。ことに美いのはクリスマスデコレーションをしたところで、子供達は無論、大人も、男も女も、ぞろ〜その方へ引きつけられてゆきます。正吉爺さんは朝から歩き疲れたのと、お腹がぺこぺこなのと、じんじん寒くなつてきたのとで、ぶるぶる震へるばかり、一寸も歩くのが厭になつてきまして、思はずぼんやりと佇んでしまひました。

そこは東京でも有名な大きな食料品店で、よその店よりは又一段と立派な製ひなこらしてゐました。金、銀、色々の玉や、紙でつゝんだおもちや、おくわし、などぎつしりのクリスマスデコレーションが、花のやうな裝飾燈の光りに映しい光をそれぞれなげかへして輝き、まるでお伽の國へでも來たやうです。食堂の方からは、お美味しいお料理の匂が、香ばしいコーヒーやココアのかほりにまざつて咽つぼいほど漂れてきます。正吉爺さんは、くうくう鳴るお腹を押へ、から唾をのみこみながら、見るともなく、目の前の大きな飾窓を見ました。

するとまあどうでせう。そこには正吉爺さんなんかは、これまで見たこともない、外國の珍らしいお菓子が、きれいにならべられてあります。そして、その中央には、それらより、もつとかはつたいろんなお菓子をちりばめてこしらへあげた、大きなお菓子のお城や、玉樣の冠のやうなものがあつて、五十圓、百圓といふ價札がつけてありました。

『ホウ、これは、これは。』

正吉爺さんは思はず目を丸くして、驚いてしまひました。

『あゝ、なんて素晴らしいお菓子だ。こいつを俺のこの手で、はしから、ぼしぼし壞して、子供達に配けて食はせてやつたらなあ——』

正吉爺さんはもう自分の腹の空つてることも忘れて、子供達のことを思つてゐるのです。そして自分も子供のやうに目を光らせて、硝子越しにその見事なお菓子にほれぼれ見入りました。すると、そのお菓子を自分の手から配けてもらつて喜んでゐる子供達が、ぢ

す。正吉爺さんは、くうくう鳴るお腹を押へ、から唾をのみこみながら、見るともなく、目の前の大きな飾窓を見ました。

するとまあどうでせう。そこには正吉爺さんなんかは、これまで見たこともない、外國の珍らしいお菓子が、きれいにならべられてあります。そして、その中央には、それらより、もつとかはつたいろんなお菓子をちりばめてこしらへあげた、大きなお菓子のお城や、玉樣の冠のやうなものがあつて、五十圓、百圓といふ價札がつけてありました。

『ホウ、これは、これは。』

正吉爺さんは思はず目を丸くして、驚いてしまひました。

『あゝ、なんて素晴らしいお菓子だ。こいつを俺のこの手で、はしから、ぼしぼし壞して、子供達に配けて食はせてやつたらなあ——』

正吉爺さんはもう自分の腹の空つてることも忘れて、子供達のことを思つてゐるのです。そして自分も子供のやうに目を光らせて、硝子越しにその見事なお菓子にほれぼれ見入りました。すると、そのお菓子を自分の手から配けてもらつて喜んでゐる子供達が、ぢいーと見えてくるやうな氣がして、思はず正吉爺さんの目は、にこにこ糸のやうに細くなりました。なんといふ美い正吉爺さんの心でせう。その心の美しさが自然と顔にまで出てきて、明い灯のもとに正吉爺さんの笑顔は、子供を愛する神のやうに、優く、巣く輝いて見えました。

二

『もし、もし、お爺さん。』

かう呼ばれて正吉爺さんがふと氣がつきますと、自分の傍にひとりの若い男が立つてゐます。それはこゝの店員の一人であることがその着てゐる、おそろひの白い服ですぐわかりました。

『私ですかれ。』

正吉爺さんは怪訝な顔つきで尋れました。

『えゝ、すみませんが、あんたに一寸お願みしたいことがありますので、なかへはいつて下さいませんか。』

『へえ、私に頼み。はてな。それは何ですかい。』

正吉爺さんは益々わからない顔つきで、

とにかくその男について店の中へはいりました。店の奥まつたところに、でつぷり肥つた番頭らしい人と、ハイカラな風をした若い男が何か笑ひながら話しあつてゐました が、正吉爺さんを見ると、若い方の男が、

『このお爺さん、なんですよ。私が今お店へはいつてくる時見たんですがれ。實際よく似てゐるぢやありませんか。一つはなしてみたらどうです』

と、いひました。

『わたしが、誰かに似てゐるのですかな。』

正吉爺さんはその男に呼れました。その男は一寸肩をすぼめて笑つたまゝでしたが、肥つた方の男が、

『あなたがたいへんサンタクロースに似てゐるといふのですよ。ホラ、このお爺さんにれ。』

さういつてそこに飾つてあつたお人形を指しました。なるほどそのにこやかな、おだやかな顔といひ、白い長い髭といひ、なかなかよく似てゐます。

『ほゝう、なるほど私に似て居りますな。』

正吉爺さんは自分でも感心して、にこにこ笑ひ出しました。

『それ〳〵。さういふふうに笑ふ顔つきがサンタクロースそつくりですよ。』

『まつたくだ。よく似てゐらつしやる。』

正吉爺さんのまわりにいつか五六人の人があつまつて、みなにこ〳〵してゐます。

『――ところで、それで一つあなたにお願ひがあるんですがれ。』

肥つた番頭がいひました。それはここのお店が、クリスマスの品物ばかり賣つてゐるので、正吉爺さんをサンタクロースの生人形として、あの赤いダブダブの服を着て、お客様達に廣告を刷つた旗を配つて、ほしいといふのでした。

『それはおもしろいですな。それぢやひとつその、三太九郎爺さんにしてもらひませうかれ。』

正吉爺さんはやつてみる氣になりました。

『承知して下さいますか。それは有難い。その代り、お給金は澤山あげますよ。』

『なあに、お給金なんかそんなに欲くありません。それよりも毎晩歸る時に、クリスマスのお菓子とお玩具を少しづゝ、欲しいですがれ。』

『えゝ、えゝ、その位のことは何でもない事です。では早速ながら、これからひとつサンタクロースになつて下さい。』

そこで、正吉爺さんは、自分のきたない着物を脱ぎ、ぶく〳〵、暖かさうな赤い服に背嚢へ、赤い頭巾をかむりました。正吉爺さんは自分でも何だかむしやうに嬉しくにこにこしだしました。

『素敵々々サンタクロースそつくりだ。』

まわりの人々は手をうつて感心しました。

正吉爺さんがお店に出ると、お客様達はみな目をまるくして見ました。道を通つてゐる人もおもはず立止ります。正吉爺さんが廣告を刷つた小旗を子供達に配げますと、子供達は大喜びです。外を通る子供達もお父さんお母さんの手をひつぱつてお店の中へはいつてきます。多勢のお客様がそれにひかれたやうに、ぞろぞろつゞいて這入つてきました。見てゐるまにお店のなかは、お客様でいつぱい。店員どもは、てんてこ舞の忙しさです。さつきの番頭がにこ〳〵していひました。

『サンタクロースさん。あなたのおかげでお

店はこのとほりです。お禮か申しますよ。』

『なあに、お禮な

どはどうでもいゝのです。私はこんなに多勢の子供に喜ばれることが、自分にも嬉しくてたまらないのです。私は、ほんとのサンタクロースのやうな氣がするのですよ。』

正吉爺さんは實際さう思ひました。

三

あくる日は朝早くから、もう正吉爺さんのサンタクロースがお店に現れました。昨日の評判を聞いてきたのか、お客は前の日よりも澤山集つてきました。可愛ゝ異人の子のお客様はいきなり正吉爺さんの胸にとびついて、

『ぼくの大好きな、サンタクロスのお爺ちやん！』

と頬つぺたの髭に接吻しました。正吉爺さんは思はずその子を高くさしあげました。見てゐた人は皆思はずかつさいしました。

こうした調子で、毎日々々、可愛ゝ子供達から『サンタクロースのおぢいちやん〳〵』と慕はれて、正吉爺さんはすつかりほんとのサンタクロースになりきつてしまひました。

ところがクリスマスが段々近づいてくるにつれて、正吉爺さんの心のどこかに一つの寂しい心配がうごめいてきました。クリスマスのちかづいてくることは、正吉爺さ

んも、子供とおなじやうに、嬉しいことなのです。しかし、クリスマスが過ぎてしまへばお店からお爺さんの役目はいらなくなるのです。そしたらもとの貧乏な、正吉爺さんにかへらなくてはなりません。貧乏はなんでもないことだが、多勢の子供と面白く騒ぐことのできなくなるのが正吉爺さんには、哀くてならないのです。子供達はみな、

『早く來い來いクリスマス。』

など、唄ひながら、クリスマスを綱かなんかで引きよせるやうに待ちがれてゐます。みなのさうした嬉い日が正吉爺さんにとつては、幸福と不幸のわかれ目のやうに考へられるのでした。クリスマスはとう〳〵やつて來ました。朝、家を出る時、正吉爺さんは、近所の貧しい家の子供達に、

『今夜きつとこゝへサンタクロースがやつて來て、みんなに、玩具や、お菓子をくれるから、目が暮れたら、こゝへ集つて、仲よく遊んでるんだよ。』

といひました。子供達は手をうつて喜び、日の暮れるのを待ちこがれました。

四

日のくれから、今年はじめての雪がチラチラ降り出しました。

いそがしい歳の暮の町も、今夜だけはクリスマスといふので、ひつそりして、灯びだけがしづかになんでまたいてゐます。正吉爺さんのつとめてゐるお店でも、宵仕舞ひにして、店員さん達のお祝ひがはじまりました。

室内はスチームで春夜のやうに暖く、盛花の蔭から蓄音機が、人々の心をそゝりたてるやうに歌ひます。明るい灯のしたで、人々は心から幸福を感じ、輝いた顔をして夜の更けるのも知りませんでした。只、正吉爺さんだけが、早く家へ歸りたくて、宵からいらいらしてゐました。

『今ごろ子供達は自分の家に集つて、どんなにサンタクロースのくるのを待ち佗びてゐるだらう。』

正吉爺さんは心棒しきれなくなつたので。

『私は一足早く歸して頂きたいと思ひます。今夜は近所の子供達を私の家に集めてありまして、私がサンタクロースになつてこのあひだから頂いてあるお玩具やお菓子を、すつかり子供達に配けてやりたいと思つて居りますでな。』

と申しました。人々は、正吉爺さんの子供思ひなのに、今さらながらほとほと感心させられました。主人は、

『それではその子供達に、今晩は持てるだけウンと持つて歸つて下さい。あなたのお蔭で、お店も大變繁昌させてもらひました。これは、ほんの少しですがその御禮です。』

といつて澤山のお給金と贈物をくれました。そして、

『これは失禮かも知れませんが、記念のために、あなたに上げたいと思つて、べつにこしらへさせました。』

といつて、緋縮子に吸かさうな白い毛でふちをとつたサンタクロースの洋服を出しました。正吉爺さんは、お禮の言葉も出ないほど喜んで、早速その服を着て帰ることにしました。お土産を澤山いれた袋を肩に、正吉爺さんは家を出ました。夜ふけの雪が、灯のかげをチラリ、チラリと花びらのやうに散つてゐました。

正吉爺さんは上機嫌で堤末のきたない自分の家に歸つてきました。雪は、小ぶりになつて、ぽつりと切れた蒼空から、チラリと星がのぞきはじめました。正吉爺さんの家の窓には、いつもより陽氣に灯がともつてゐました。

月をあげてはいつた正吉爺さんは思はず、

『これは、これは――』

と驚いて、肩にかついでゐるお土産袋をとり落したほどでした。狹い部屋のなかに、近所の子供が十四五人も、ひとかたまりになつて、うすい布團をひつかぶつたまゝ寢てゐたのでした。

すう、すうとやさしい寢息をしてゐる子供達の無邪氣な寢顔を、もとし灯は靜かに照らして、その顔はエンゼルのやうに清く尊く見えました。

『やれやれ可哀さうに。待ちくたびれて寢てしまつたんだらう。寢せておいてやれ。』

正吉爺さんは、そつと子供達をそのまゝにして、子供達の名前を書いた靴下に、いろ〳〵な玩具やお菓子をつめた贈物を、ひとりひとりの腰に結びつけてやりました。

『あしたの朝目を覺ましたらどんなに喜ぶだらうなあ。』

正吉爺さんは、すつかり安心すると、急にどつと酒の醉ひが出たと見えて、うつとり何とも云へぬいい氣持ちになつてそのまゝ子供たちの傍で寢てしまひました。自分赤い着物で子供達を抱くやうにして……。

さて、そのあくる日、雀のやうに目を覺した子供達は、自分の帶に、平常ほしいほしいと思つてゐたものや、いろ〳〵なめづらしいものを、ぎつしりつめた靴下が結びつけてあつたので大喜びに騒ぎました。そして、自分達といつしよに、サンタクロースが繪本で見たのと同じ樣に赤い服を着たまゝ寢てゐたことに驚きました。

大雪のやんだ靜かな朝を、陽がはれやかにさしそめて、街の教會堂の鐘がすゞろかに鳴りわたりました。

（なはり）

山き弾琴

三宅房子

一

花嫁の美しい姿を見てゐると、矩資の心は喜びで一ぱいになりました。それは全く、これまでに知らない喜びでした。

矩資はやうやく我に歸つて、老女に向つていひました。

『私は、これまでにも幾度かこゝを通つたことがあります。しかし、かういふ家のあることは聞いたことがありません。またこのお家へ入つてからも、なぜかういふ立派な方が、こんな人里はなれた場處へ住つてゐらつしやるのかと不思議に思ひました。今はもう、私と姫君とは、神に誓つて夫婦になつたのですから、どうぞ姫君の家の名を知らせて下さい。』

矩資がかういつた時、老女は急に暗い顔になりました。姫君も、俄かに眞青になつたやうに見えました。

しばらく沈默がつゞいてゐましたが、やゝあつて老女が、

『もう今となつてはお隱ししてゐることも出來ません。何も彼もお話し致さなければなりません。あなた樣は三位中將重衡卿の姫君と御結婚なすつたのです。』

矩資は思はず身を顫はせました。身躰中に冷い水を浴びせられたやうな心地がしました。平の重衡といへば、今から三百年も前に不幸な最期を遂げた人ではありませんか。

初めて、矩資の心に萬事が明らかになりました。自分を圍んでゐる凡ての物は——姫君でさへも、皆な過去の夢であることがわかりました。自分の前に坐つてゐるこの人々も、また、昔生きてゐた人々の亡靈であることがわかつたのでした。

しかし、もう矩資は戰きませんでした。たとへ自分の花嫁がこの世に生きてゐる人でなくとも重衡卿の姫君ともいはれる人に、一旦見込まれた以上は、自分も命を捨てゝもいゝと決心したからでした。

『さういふ方であつたのですか。私も重衡卿の無慘な御最期の話は聞いてをります。』と、矩資は落付いていひました。

『へい〳〵、全く御無慘な最期でございました。お馬が矢で射られた爲めに御落馬になりました。助けをお呼びになられた時には、一人としてお助けに行く者もなく、皆な逃げ失せてしまひました。その爲めに遂に虜の身となられて、鎌倉へ送られ、そこで哀れな御最期を遂げられました。その間、奥方と姫君は、世を忍んでお暮しになりましたが、私の外には誰もお仕へする者もございません。平家の一族は、隅なく探し出されて、皆な殺されてしまひました。重衡卿の御最期の知らせが届きました時、奥方は大層なお歎きで、とう〳〵その爲めにお亡れになつた

のでございます。後にたつた一人お殘りになつたこの姫君さまも私の外には誰もお育てする者もございませんでした。その時、姫君は僅かに五歳でゐらつしやいました。私は姫君の乳母として仕へてをつた者でございますから、たゞ姫君さまの爲めに生き長らへやうと思ひました。それからといふもの、私どもはあちらこちらと彷徨ひ歩きました。巡禮となつて歩いたこともございます。しかし、御寵下さいませ。私がお育て申上げました方は、この通り立派な姫君となられました。もしも、これが高倉院の御代でございましたら、どんなにか良い御運がめぐつて參つたことで御座いませう。——おゝ〳〵大層夜が更けました。どうぞお二人で御ゆるりとお話しなさいませ。』

老女はやがて、二人を殘して靜かに出て行きました。

二

『姫君、あなたが私に初めてあつたのは何時でした。』と、矩資が尋ねました。

『矩資さま。』と、姫君ははじめてやさしい聲で答へました。『私は母と一しよに石山寺へ參りました。私があなたにお目にかゝつたのはその時でした。その時から、私は全く變つた人間となつてしまひました。しかし、あなたはお思出しにはなりますまい。それはこの世のことではございません。ずつと〳〵前の世のことでございます。その時から、あなたは幾度か生れ代りをなさいました。しかし、私は御寵になります通り未だにそのまゝなのでございます。私は自分の煩惱の强いために、生れ代ることが出來なかつたのでございます。……私は幾年も幾年もの間、あなたをお待ちしてをりました。』

姫君はこゝまで話した時顏を伏せて泣きました。

二人の話は、それからまだ〳〵續いてをりました。

三

寺の鐘が靜かに明け方を知らせました。『生者必滅會者定離』の悲しい響きを傳へました。鳥の聲も聞えて來ました。

と、あはたゞしく老女が部屋へ駈けこんで來ました。

た。

『姫君さま、もう行かねばなりません。夜が明けては、一刻もかうしてはをられませぬ。さア〳〵お別れを申し上げなさいまし。』

矩資も、言葉もなく、別れの用意をしました。すると、姫君は、めづらしい細工の硯を出していひました。

『あなた樣は學者でゐらつしやいますから、この小さな贈物をお喜び下さいませう。この硯は高倉院から父に賜つた物で、これまで大事な遺物として持つてをりました。』

さういつて、それを矩資に渡しました。

矩資もその禮として、自分の刀の斧を拔いて、渡しました。それには、梅と鶯が金と銀とでちりばめてありました。

やがて、先きに矩資を案内して來た可愛いゝ少女が現れました。少女は矩資の先きに立つて、庭を横切つて、門のところへと案内しました。姫君も、老女も、門まで送りました。

矩資が別れを告げやうとすると、老女が、

『今度お目にかゝるのは、申の年の、同じ月の、同じ日の、同じ時刻にいたしませう。今年は寅の年でございますから、五年の間お待ち下さいませ。私どもは、これから高倉院や平家の御一族のゐらつしやる京都の近くへ參ります。あなた樣がゐらつしやいましたら、さぞ平家の方々もお喜びでございませう。……お約束申上げた日には お駕籠を差上げます。』

と、悲しげに別れを告げました。

四

それから月日は夢のやうに過ぎました。矩資はその後も度々いつか少女に出遇つた丘の麓を歩いて見ました。しかし、幾度歩いても、遂に少女には出遇

ひませんでした。また如何に探しても、姫君の家を見出すことも出來ませんでした。

矩資は村人に尋ねても見ました。しかし、村人たちは矩資を氣狂ひか狐にでもつかれたのだらうといつて笑ひました。嘗て、その村に、そんな身分の高い人が住んでゐた事もないし、又そんな立派な家屋敷もないのでした。しかし、以前に丁度矩資のいふ場處の近くに、古いお寺があつたやうで、今尙古い墓石のあることを知つてゐる者もありました。

矩資は自分の出遇つた不思議な事件については誰にも話しませんでした。しかし、矩資の顏形が次第に變つて行くことに、家の人々は氣づきました。一日々々と、矩資は蒼ざめて、痩せて行きました。しかし、醫者に診てもらつても、別に身躰に異狀がないといひました。

矩資は幽靈かなんぞのやうに見えて來ました。さうして、身躰を動す有樣も、まるで影か何ぞのやうでした。矩資はだん〳〵と物思ひに沈んで、人とも交際をしないやうになりました。何だか、この世のことには、一向興味がないやうに見えて來ました。

――さうして、あれ程までに熱心だつた文學の道にも、少しも注意をしないやうになつてしまひました。

母親は心配して、矩資に奥さんを迎へたら、また少しは世の中のことに興味を持つやうになるかも知れないと考へました。しかし、矩資は、この世では奥さんを迎へない積りだといつて、拒げました。

かうして、また月日は經つて行きました。

遂に申の歳が來ました。そして、もう秋となりました。しかし、矩資は、もうあれ程好きだつた散歩もすることが出來ませんでした。矩資は重い病氣にかゝつて、床に就いてゐました。

矩資の身躰からは次第に生氣が失せて行きました。しかし、誰もその原因を知ることが出來ませんでした。矩資はたゞうと〳〵と眠りつづけてゐまし

た。あまり長く眠るので、死んでしまつたのではないかと疑はれる程でした。

しかし、ある晩、矩賓はふと眠りから覺めました。見ると、自分の枕下に五年前に出遇つた宮仕への少女が立つてゐました。

少女は矩賓を見てにつこりと笑ひました。そして、『大原へ御案内するためにお迎ひに參りました。姫君樣は、たゞ今、そちらにゐらつしやいます。お駕籠の用意もちやんと出來てをります。』

さういつたかと思ふと、少女の姿は消えてしまひました。

矩賓はいよ〳〵あの世から迎ひに來たことを覺りました。しかし、內心では嬉しくて堪りませんでした。喜びのために元氣も出て、床の上に坐つて、母親を呼びました。

この時、はじめて、矩賓は母親にこれまでの話をすつかりしました。そして、遺品として受けとつた硯も母親に見せました。

『お母アさん、これは私の最後のお願ひです。どうぞ私が死にましたら、棺の中にこの硯を入れて下さい。』

さういつたかと思ふと、矩賓は息が絶えてゐました。

硯は遺言どほり矩賓と一しよに葬られました。尙、葬られる前に、その道の專門家に見せましたところが、それは高倉院の時代の有名な作者の作であるといはれました。年號までが『貞安元年』と硯の裏に記してありました。

× × × ×

この不思議な物語りはその後次第に人々の記憶から薄れて行きましたが、たゞ、矩賓が宮仕への少女に出遇つたといふ丘のあたりで、毎年晩秋の頃になると何處ともなく微かな琴の音が聞えて來ました。

村人たちは、この琴の音を聞く度に、矩賓の話を思出して、恐れをなして逃げました。

しまひには、誰も秋になるとそこを通る者もなく、いたづらに薄が白い穗を風になびかせてゐました。

やがて、その丘を『琴彈き山』と呼ぶやうになりました。

（をはり）

釜どろ

小島政二郎

流行と云ふものは變なものですね。昔、東京で兎を飼ふことが大層流行つたことがあります。ところが、方々へ糞をして臭くつてたまらない。その上、或年コレラが流行つて、それを傳染すのは兎だと云ふことになつたので、どこの家でも急に兎を飼ふことを止めてしまひました。しかし、捨て場に困つて、その頃今の上野ステーションのところが、廣い〳〵原でしたが、そこへ夜こつそり持つて來ては捨てゝ

行きました。ですから、一時、上野ステーションのところの原が、兎でウジャ〳〵一杯でした。

それと同じやうに、昔、泥棒仲間で、釜を盗むことが流行つたことがあります。外のものは一切盗まずに、釜ばかり盗んで廻つたのです。盗まれた方では、朝起きて見ると、釜がない。さあ御飯が焚けない。と云ふので大騒ぎをしました。中でも、お風呂屋さんに豆腐屋さん、煮豆屋さんなんと云ふ商賣の人達が一番大弱りでした。

すると、こゝに豆腐屋の作兵衛さんと云ふお爺さんがゐました。或晩のこと、

『なあ、婆さん。』

『何だよ、お爺さん。』

『今夜も俺は泥棒が心配で寝られないよ。かう續けざまに釜を盗まれてはやり切れない。昨夜やられたので、二度目だ。二度ある事は、三度あると云ふから、また來るかも知れない。さう度々釜を持つて行かれては、財産を耗つてしまふ。で、今夜俺はいゝ事を考へついたよ。』

『へえ、どうするのさ?』

『この釜の中へはひつて寝てゐようと思ふ。』

『さうして?』

『泥棒が來て釜の蓋へ手をかけたら、中から俺が櫑粉木で向脛を引つぱたいて、よろけるところを山葵卸しで顔を引つ掻いてやる。』

『まあお前さん。そんな馬鹿なことをして……』

『ナーニ大丈夫だよ。忌々しいから嚇してやるだけのことさ。』

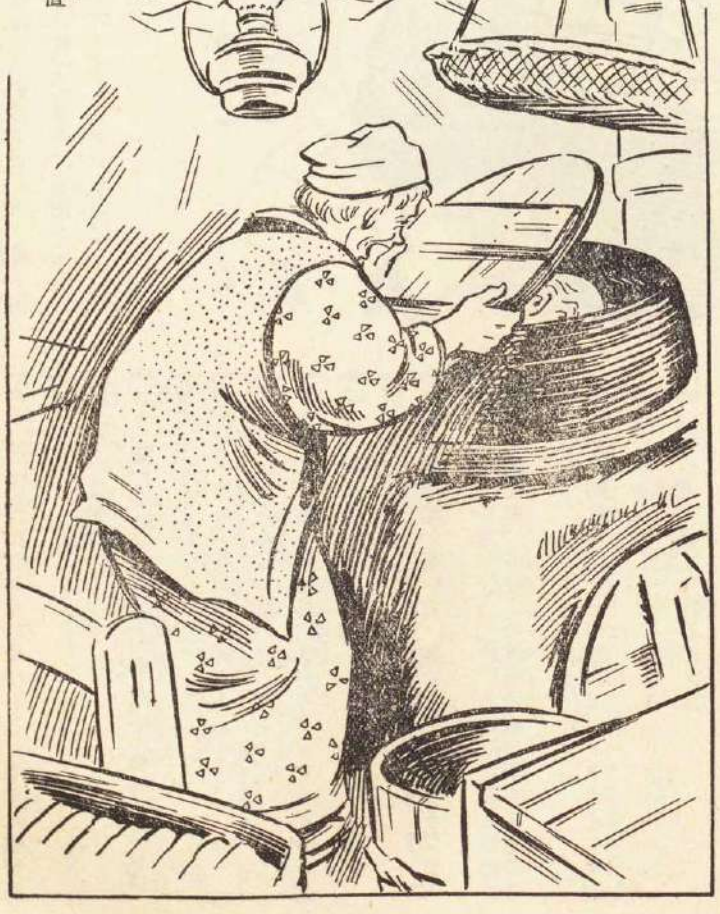
かう云ひながら、作兵衛さんはお釜の中へはひりましたが、また、

『婆さん。』

『何サ?』

『蓋をしてもらはなければならないが、いつもの蓋をされると、息が詰まつてしまふから、何か輕い蓋

の代りになるやうなものはないかい？」
「この雁擬の蓋ではどうだらう。」
「さうさナ、油臭いけれど、我慢しよう。」
「ぢやアいいかい。蓋をするよ。」
「よし／＼。」
が、暫くすると、また蓋の下から、
「なあ婆さん。」
「アイよ、うるさいね。」
「明日の朝、俺を起さないうちに焚きつけちやイケないせ。」
「大丈夫だよ。」
「ナニ大丈夫なものか。お前は疎忽かしいからな。昨日の朝だつて、釜を掛けないうちに焚きつけたもんだから、もう少しで天井へ燃え附くところだつたぢやないか。どう云ふものかお前は寝ぼけて困る。明日の朝も、俺を起してから、水を汲み込んでくれよ。いきなり頭の上から水を汲み込んぢやイケないせ。」
「大丈夫だよ。」
「それから、ガタリと云つたらすぐ目をさましておくれ。」
「アイよ。」
「戸締を嚴重にしなよ。」
「そんなことは分つてゐるから、もういゝ加減にして寝ておしまひよ。」
「よし／＼。」
やがて作兵衛さん、お釜の中でぐつすり寝込んでしまひました。
ところが眞夜中頃、どこをどう破つたものか、二人連れの釜泥棒が忍び込みました。さうして手早くお釜に太い荷縄を掛けわたすと、天秤棒を通して、
「いゝか、兄弟。」
「よし來た。」と擔ぎ出しました。
しかし、暫く行くと、後棒が、



「兄弟、この釜は馬鹿に重いな。」
「うん、泥棒になつてから俺は十年になるが、まだこんな重い釜を擔いだことはない。」
「こりやキツとかうだせ。明日の朝起きてすぐ焚き附けられるやうに、今夜のうちに、豆を入れて水を汲み込んで置いたんぢやないか。」

『成程、さうかも知れない。どつちにしろ、擔ぎ出してしまへば、こつちの物だ。さあ、見附からないうちに、行かう。いゝか、ヨイトコショと。』
『ウントコショ。』
『ドッコイショ。』
『兄弟、何だかぐる〳〵廻るな。』
『うん。ひどく擔ぎにくい釜だ。』
その時、ふいに、

『ウーン。』と作兵衛さんの伸びをしたやうな聲が聞えました。
驚いたのは先棒です。
『オヤ、誰だい唸るのは？お前か。』と後棒に聞けば、
『俺なものか。』
『妙だなどうも。釜が唸る譯もあるまい。』
『冗談云ひなさんな。氣のせゐだらう。』
『さうかな。兎に角兄弟、急がう。ドッコイショ。』
『ウントコショ。』
『ウーン。』
『あら、薄氣味が惡いな。確に人の唸り聲が聞えたちう。』
『うん、聞えた。多分この近所の家に病人でもゐるんだらう。』
『さうかも知れない。一つ急いで。ドッコイショ。』
『ウントコショ。』
『ウーン、婆さん。』

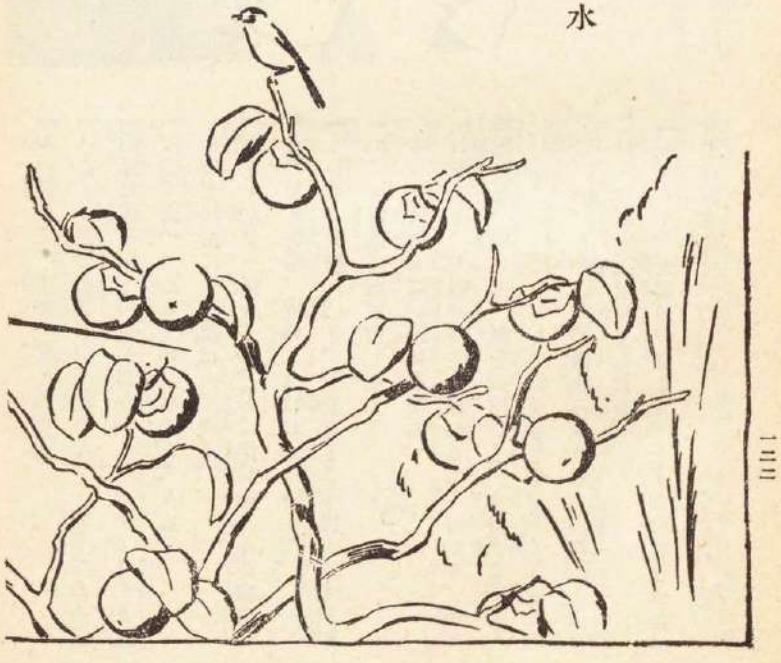
『誰だい、婆さんと云つたのは？』
『俺ぢやないよ。』『妙だな。』
『おい婆さん、水を一杯くんな。』
『いよ〳〵變だぞ釜の中で婆さん〳〵云つてゐる。』
『馬鹿な事を云へ。釜が口を利く奴があるものか。』
『だつて云つてゐるもの、仕方がない。』
そのとたんに、今度はハッキリ、
『婆さん水を一杯おくれ。』と、作兵衛さんが呶鳴つたものですから、泥棒二人はびつくりして、
『うわア、大變だ。』と、お釜をそこへ抛り出すが早いか、一目散に逃げ出しました。
さうとは知らない作兵衛さん。
『おや〳〵、大變グラ〳〵搖れるぢやないか。あゝ地震だな、婆さん。氣をお附けよ。大分大きいらしいから。それにしても、いつまでもグル〳〵廻るぢやないか。もういゝ加減止みさうなものだ。』と云ひながら、ふと上を見ましたが、
『おゝ〳〵、大層星が見える。——あつしまつた。今度は家を盗まれたな。』

（をはり）

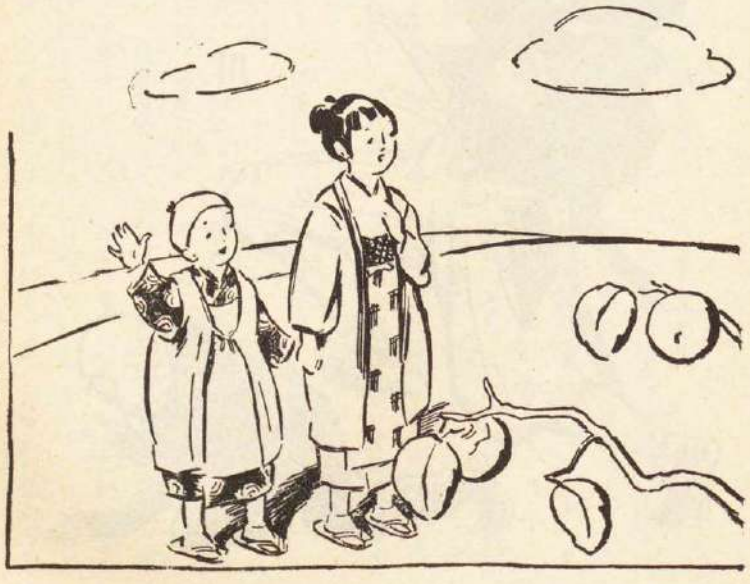
どの木にとまつた

若山牧水

木を植ゑた木を植ゑた
お庭にいろんな木を植ゑた
柿の木八本
栗の木六本
櫻が三本



どの木にとうまつた
一番さきにとうまつた
何の鳥がとうまつた
きいち、きいち、きち
百舌鳥の鳥がとうまつた
柿の木にとうまつた
一番さきにとうまつた



討たぬ敵

三島霜川

一

黒装束の大きな腕ッぷしに、ぎゅッと押さへつけられて、出目助さんは、まるで、青蛙が、蟆ーでも乗しかゝられたやうに、へたばッて了ひました。もう、力が盡きて了ッて、ビクともすることが出て來ません。

『駄目だ！』

出目助さんは、覺悟をして、じッとなッて了ひました。その、とたんに、靜な朝の空氣を劈いて、ヅドンと鐵砲の響……殆ど、それと同時に、黒装束の奴は、ウンと呻いて、胸のあたりを押へたかと見ると、のけ反ッて、バッタリ倒れました。此奴が、彈丸に中ッたのだとは、出目助さんは、氣がつきませんでした。そして、向ふの岸の藪の中から、白い烟が、パッと、吐出されるやうに上がッたのも氣が付きませんでした。

出目助さんは、まッたく夢中でした。そして、たゞ「捕まッてはならない。」といふ一念だけが、體ぢうに、はちきれるやうになッてゐました。で、すぐに刎起きて、すッくり、立つか立たないうちに蛙のやうになッて、堤の下へ飛ンで下りて行きました。――もちろん、ちよッとでも、愚圖ついてゐたら、後から續いて來る他の黒装束に、また、首筋を捉まへられて了ッたかも知れません。まッたくそれほどに、きわどいところでした。

『飛道具（鐵砲のこと）でござるぞ。お氣をつけなさい。』

一人の黒装束が、さう云ッて、叫びました。そして、彈丸の中ッた仲間を跳越えて、猛烈な勢で、出目助さんに迫ッて來る。その熱い息が、もう出目助さんの首筋へ通ッて來るのが感じられる位になりました。

出目助さんは、死物狂に燥りました。そして、首を前の方へ、うんと伸ばして、岸の方へ駈下りて磧へ逃げようとすると、ア、！駄目でした。この川には、流れがあッて、しかも、そこが丁ど、流れが一とうねりして、岸にぶつかり、淵のやうになッてゐるとこでした。

『可けない！』

と、まご〳〵して、ひよいと、後ろを振向くと、また、強い腕ッぷしで、首筋を引ッ捉へられました。……出目助さんは、それを振放さうと、我むしやらに跪きましたが、ぐいッ、ぐいと引ッぱられて、恰も、宙に吊された龜の子の

やうに、只、手足をバタ〳〵するだけでした。その時、また一發、ヅドンと鐵砲の音が響いて、その黒裝束の奴も、アッと叫んだと思ふと、出目助さんを突放すやうにして、虚空を掴むで、仰向けに倒れました。

出目助さんは、はづみを喰ッてよろ〳〵と、蹌めくと、もう踏止まることが出來ないで、岸から足を踏みはづして、ざんぶり、淵へ落込むで了ひました。

流れは、すてきに疾い。一度、淵の底へ見えなくなッた出目助さんは、やがて、五六間も下流の方へ、南瓜頭を、ひよッこり出して浮きつ沈みつ、づん〳〵、づんづん流されて行きました。

出目助さんは、凡そ五六町ほども、づん〳〵、づん〳〵流されて了ひました。さして、廣い川ではなかッたのですが、瀬が疾くて、いくら一生懸命になッても、岸へ泳ぎつくことが出來なかッたのでございます。さうして、だん〳〵手足が硬ばッて利かなくなる。氣も遠くなッて、自分が今、何にをしてゐるのか——流されてゐるのか、地面に立ッてゐるのか、それさへ解らないやうになッて了ひました。若も、もう二三町も其のまま流されたら、出目助さんは、まッたく何にも解らない「死骸」になッて了ふところでした。

しかし、出目助さんの「運」はまだ盡きませんでした。淵から五六町、下ると、そこで川が大曲りに曲ッて、流れも、やゝ緩になッてゐるところがありました。出目助さんは、もう殆ど正氣を失ッてゐましたが、それでも、まだ浮きつ沈みつして、流れて來ると、蛇籠の蔭から、ぬッと現はれた、山男のやうに大きな逞しい漢子——これが、素ッ裸で、眼が、ギョロリとして、見るから無氣味な奴でしたが、さッと流れへ飛込むと、抜手を切ッて、流れて來る出目助さんを目がけて、泳ぎましたが、やがて『待ッてゐた。』と云ふやうに、出目助さんを抱きかゝへて、苦もなく岸へ泳ぎつきました。そして、ちよッと、そこらを見廻すと、輕々と出目助さんを抱へたまゝ、猿のやうに、すばしッこく、さッ〳〵と籔のなかへ潜り込むで行きました。出目助さんは、まッたく正氣を失ッてゐました。

二

それから何程の時間が經ッたのか、また自分が何うなッたのか、何にをしたのか、出目助さんは、一切知りませんでした。それで、ふッと我に返ッて見ると、まづ、自分がふウわりと柔な絹布の蒲團を着せられて、寢てゐるのに氣がつきました。

『やア、おかしいな。』

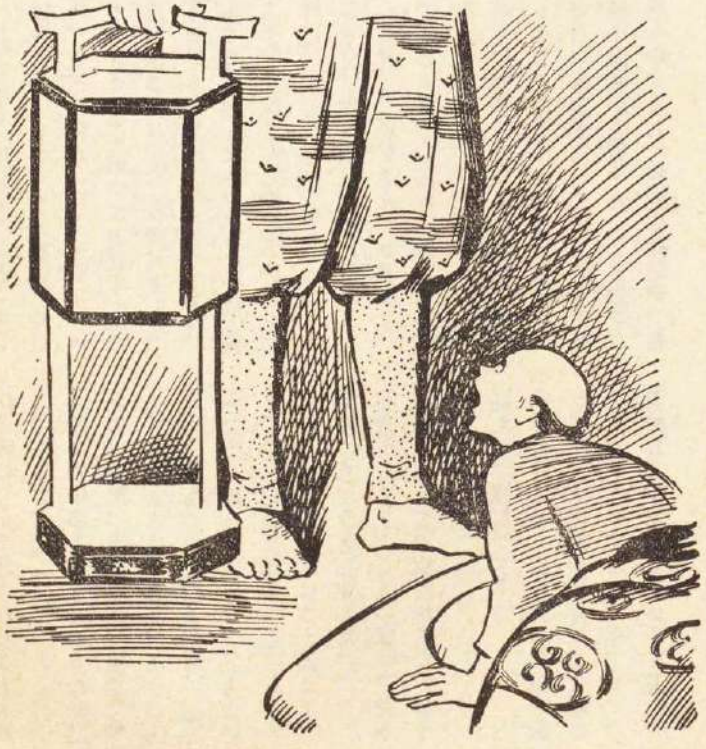
さう思ッて、ノビ〳〵と足を踏伸ばして見ますと、少し體が懶いやうですが、氣もちもノンビリとして、大そう具合が好い。で、また、ちよッと、ウト〳〵してゐると、つい、背戸の方と思はれるあたりで、高く、馬の嘶く聲がしました。

『ごんのやうだな。』

さう思ひながら、まだ、ムヅムヅしてゐますと、また一と聲、馬

の嘶くのが聞えました。
『ごんに違ひない。』
さう思ふと、今度は、シャッキリと目が覺めました。
『ごんは、あの森へ繋いでおいたンだが……變ンだな。それから、俺らは、淵へ落ちて流されたんだが……はてナ。一體俺らは、どうしたんだらう。そして、こゝは、何處なンだ？……』
いろ〳〵な考が、ふゥわ〳〵、ふゥわ〳〵と、輕い雲のやうに、頭のなかに浮ンで來ます。
夜なんでしょう。そこらは眞ッ暗でした。が、焚火の影のやうな薄明りが、仄にチラ〳〵して、よく見ると、物の形だけが、茫ッと解るやうでした。そして、すぐ耳の傍で、グッ〳〵、何にか煮えてゐる音が、丁ど、番場の家で「ごん」の飼料の豆を煮てゐるのと同じやうに聞えました。
『ごんの奴、どうしたらうな。可哀さうに……あの騒のなかだ。誰も、草、一とつかみ、喰はせちやアくれないだらう。』
「ごん」のことを考へると、きたいに、しんみりとして、出目助さんは、切りに、目を、ぱちくりさせてゐました。
『あッ、さう云や、お姫樣……ずぶ濡れだッけな。こりや、大しくじりをしちやッたぞ。どうしたな？　烏天狗の奴等に引ッ捕まッたかな。』
さう思ふと、出目助さんは、もう、じッとして居られなくなりました。で、蒲團を刎ねのけて、勢好く飛起きようとすると、その鼻先きへ、ふいに、パッと明りが射して、見上げるやうな大きな男が、朱塗りの行燈を持ッて、ぬッと現はれて來ました。
『おや！』
出目助さんは、呆れて、ぽかんとした顔で、その男の顔を見上げました。
『オ、、目が覺めたか。氣分は何うだ。』
その男は、ギョロリと眼を光らせて、ニャ〳〵しながら云ひました。
出目助さんは、チラと其の顔を見ると、何にがなし氣味の惡い奴

だと思ひました。が、きさくに、
『ア、有難う。何にしろ、すてきに、よく寢ちやッたよ。一體、ここは何處なンだネ、小父さん。』
『こゝか。此處は俺の家さ。まア、ゆッくり、寢るが可い。お前等にア　お粥も煮て置いたから、腹が空いたら、いつでも起きて喰ふが可い……それから、何ンだ、ごんに飼料を遣らうと思ッて、今、豆を精出して煮てゐるところよ。』
『ヱ、ごんが、こゝへ來てゐるのかえ。』
『來てゐるのよ。お前等を乘せて來たのだ。』
『俺ら等を？……』
出目助さんは、「お前等」の「たち」といふのが、腑に落ちぬやう



に云ひました。
『さうよ、お前等さ。お姫様と、お前と……』
『小父さん、小父さん。お姫様もこゝへ來てゐるのかえ。』
出目助さんは、雀躍するほど悅ンで、たづねかけました。
『ム、來てお在なさる。なア、出目助さん。俺は、お姫様から、何にも彼も、一切委しい話を聞いたんだが、これが若し、お姫様が來てお在なさらねえとなれア、昨夜からお前の命懸の働が無駄になッて了ふぢやないか。え、さうだらう。それ、お姫様は、そこにお在なさる。よッくお眼みだ。』
さう云ッて、その男は、行燈の火口を、その方へ向けました。

なるほど、出目助さんと、少し離れたところに、お姫様は、やはり、立派な絹布の夜具を着て、スヤ〳〵と、よく眠ッてお在でした。出目助さんは、大悅で、そして、すッかり、安心して了ひました。
『すると何んだネ、小父さん。俺らア、小父さんに助けられたンだネ。』
『まア、然うだ。』
『だけど、小父さん。お前よく、ごんのことやなんか、知ッてゐるネ。』
『ム、知ッてゐるよ。少し譯があッてな。何にしろ俺は、お前が、孝行の御褒美に、あの、ごんを膳所の殿様から貰ッたことも知ッて居りや、また、お前の阿爺が、目

川の藪のなかで殺されたことも知ッてゐるのだ。』
『爺さんの事も知ッてゐるのか。』
『ム。だが、その話ア、後で、ゆッくりしようよ。まア、もう、ちいと、落ちついて寢るが可い。』
『いや、俺らア其れより、ちよいと、ごんを見て來るよ。』
と、出目助さんはさう云ッて、氣輕に立たうとしました。
『待ちな〳〵。こゝの家は、並みの家と違ッて、窟だからな。勝手が違ふ……』
『えッ、窟だッて？』
『さうよ　昔、鈴鹿山の山賊と云ッてナ、大泥棒の棲んでゐた窟だ……びッくりするな。今ぢやア、泥棒なんか居やしない……見な、

そこに鐵砲が掛けてあら。短ッけえ方は、種ケ島と云ふンだ。何アに、俺ア、獵人だが、流儀があッてナ、いつも、あの種ケ島を腰にブラ下げて、そして鐵砲をかついで出かけるから、世間ぢやア、俺のことを、二ッ玉の八藏と云ッてゐるンだ。それで、今朝、黑裝束の奴を二人まで、續け玉に仕止めて遣ッたのよ。ハ、、、、さア、俺が案内して遣らう。』
この無氣味な男は、無雜作に然う云ッて窟の外へ出て行かうとしました。

三

「ごん」のところへ行ッて見ると、そこには、籌が、どん〳〵焚いてありました。それは何にしろ「鈴鹿山の山賊の棲家。」だといふ窟のあるほどの深山です。夜は、ひよッとすると狼なぞがやッて來て、馬なンか殺つけて了ふといふ心配がありましたから、八藏が、用心のために、さうして「ごん」を護ッて置いたのでした。「ごん」は、窟の入口の、大きな杉の根ッこに繫がれて、長い首を伸ばして、もッそり〳〵、地べたに散らばッた若草をたべてゐました。その草を嚙む音――それが聞えるか聞えない位に靜で、いかにも疲れて、そして、悄れきッて、ゐるやうでした。
『可哀さうに！……もう安心しろよ。小父さんのお蔭で、汝も俺らも助かッた。もう少しすると、豆を喰はせて遣るぞ。』
出目助さんはさう云ッて、「ごん」の平首のところを、輕くたゝいて、撫でゝ遣りました。
「ごん」は、長い顏を、づいと上げて、ちよッと、出目助さんの方を振向くやうにしたかと思ふと、また、じッと、うなだれて了ひました。
『どうだえ、可愛いもんだな。お前が來たので、ごんめ、すッかり安心したといふ風だ。これで、跛でねえと、大した逸物だよ。それ、そこに葛籠があら。な、お前等をそいつに入れて、荷物のやうに見せかけてよ、四里の山坂を、ぐいぐい引ッ張ッて來たンだが、大し

て、へこたれもしなかッたせ。』

二ッ玉の八藏は、さう云ッて、「ごん」の鼻頭を撫て遣りながら

『それで、やッと有りついた飼料が、この駄草と來ちやア、ごんも遣りきれねえナ。』

と、云ひつゞけて、輕く笑ひました。その樣子が、いかにも「馬に怜しみ、馴れて」ゐるやうでした。

『小父さんも馬が好きかえ。』

『ム、大好だ。だが、こんな窟に棲んで、仙人のやうになッて了ッちやア、馬も飼ッて置かれないよ。どれ、もう豆が煮えたらう。疾く飼料の支度をして遣らう。』

八藏は、さう云ッて、窟のなかへ引返して行きました。

山中の靜けさ——そこは、まるで、この世界から、かけ離れた世界のやうに、しんとしてゐました。太洋の浪のうねりのやうに、うねうねとした山々、その影が、夜の霞につゝまれて、何處までも〳〵、涯しもなくつゞいてゐるやうでした。空には、春の月が、ノンドリと照ッてゐました。

『夢を見てゐるやうだ。』

出目助さんは、さう思ひました。

そして黑裝束の亂暴や水口の火事や——その恐ろしい事を考へると、ひよッとすると、自分が、別な世界に生まれ變ッて來たのではないかといふやうなことも考へてゐました。

かうして、出目助さんは、暖いお粥をたべさせて貰ッて、それから、八藏の手助けをして、「ごん」に豆やなぞの飼料を遣る支度をしました。そして、「これが鈴鹿山の窟」——ふと、さう考へると、ぞッとするほど恐ろしくなッて來ることもありました。また、その恐ろしい窟に、八藏が、何うして一人で棲んでゐるかと思ふと、それが、不思議でならないこともありました。第一、獵師風情の八藏が、何うして殿樣の處にでもあるやうな、立派な寢道具や食器を持ッてゐるのか、それが不思議で堪りませんでした。しかし、八藏は、「ごん」の爲に、豆まで煮てくれるほどの親切者でした。

『この小父さんが、そんなに惡い

人だとは思へない。』

出目助さんは、八藏の凄い眼を見ては、さう思ひました。

さうかうするうちに、いよ〳〵最後の「事件」がやッて來ました。丁ど、出目助さんが、桶を一ッ借りて、「ごん」に飼料をやッてゐる時でした。八藏は、片手に種ケ島をさげて、片手に火繩を持ッて、足音も立てないやうにして、窟から出て來ました。

『おい、出目助さん、俺を何んだと思ふ。』

出目助さんはいつの間にかそこに、のッそり立つてゐる八藏を見て、ちよッとびッくりしました。

『俺は、大泥棒だ。目川の藪のなかで、お前の阿爺を殺したのは、俺だ。俺は、お前の讐だぞ。』

その聲は、沈んで、強い響がありました。出目助さんは、驚いて、ちよッと口も利けませんでした。

『さ、これで、俺を擊つんだ。よく、覘ッて、こゝへ、かうして、火繩の火をくッつけて、ヅドンとやれァ譯はない。なァ、可いか。さ、しッかり、やッてくれ。』

さう、云ッて、八藏は、出目助さんに種ケ島を持たせました。出目助さんは、種ケ島を持ッたまゝ、默ッて、暫らく、考へてゐましたが、やがて、つッと立起ると、種ケ島を拋出して、足で火繩の火を踏消して了ひました。

『小父さん。爺さんの讐は、お上みで討ッて下さるよ。お祖母さんが、いつも然う云ッてゐたッけ。俺らは小父さんに助けられたンだ……だから、恩があるよ。さうだらう、小父さん……』

『さうか。』と、云ッたまゝ、八藏は、じッとなッて、深く〳〵考込んで了ひました。

出目助さんは、その晩、遲くまで、八藏と、いろ〳〵な話をして、あくる朝、目を覺まして見ると、八藏の姿は、もう窟のなかに見えませんでした。出目助さんが八藏から聞いた話によると、黑裝束の奴どもは、中國筋の、ある大名の家來が、武士の意氣地から、お姫樣を奪取らうとして爲た仕事だといふことでした。

（をはり）

綴方

齋藤佐次郎選

住みなれた家（賞）

滋賀縣膳所町字鎌大正町

山本みゆき

お使にいつて、歸り道の事でした。私は、あまり急がなかつたから、ゆる〳〵と歩いて歸りました。私はある家の前で、ふつと足を止めました。何故私は其の家の前で足を止めたのか、今考へても、しつかりおぼえてゐませんが、其の足を止めた家は、私が前に居た家だつたのです。

十一月の三日の事でした。始めて知らない家へ、ひつこして來た私は、何んだかさびしかつたが、又うれしうございました。

それはつかの間で、急に又悲しくなつて、姉さんと二人で泣きました。その時の事は今だに、しつかりと頭にのこつてゐます。今私は其の家の前にきてゐるのです。私は、なつかしさが一つぱいになつて、思はずそつとのぞきました。あゝ、けれど家の中はすつかりかはつてゐました。かはいゝ山茶花も、秋になると、良いにほいを送つてくれたもくせいも、春になるとやさしく、ひらいた白赤のつつじもありませんでした。

私は思はず、涙がにじみ出て、ほゝをつたつて流れました。げんくわんの所を見ると、全く知らない表札が、いかめしく、かけてありました。私はよその人の家だと思ふと、悲しさが胸に一つぱいになりました。『ちりんちりん〳〵』自轉車のならす、りんに、はつとしてあたりを見ました。その時はもう夕日は西にしづみかけて、夕やけの空にはからすがかあ〳〵さびしくないて通りすぎました。目の前はぼうつとして、何もかもわかりませんでした。後をふりかへつて見ると、私が居た家は、夕日が赤くさしてゐました。何分かたつて私は家に歸つて居ましたが、どうして歸つたか知りませんでした。姉さんが不思議そうに、どうしたのと、聞かれましたが、私は涙が出て言へませんでした。泣くまいと思つても、涙が後から〳〵出て來て仕方がありません。私は二階へ上つて思ふぞんぶん泣きま

『花の寫生』　岐阜縣校　岩田繁夫

くな』と心配らしく言ふ。けれども、『なあにが。』と言つて網を取出した。弟等は喜んで『兄さん魚をとつてもどつて。』と言つてはおどつてゐる。今まで、だまつて聞いてゐた父が『行くな、行くな。』と言つて兄をとめた。

兄はいつまでも『なあにが。』と言つてきかない。僕は兄の川に行かないやうにと祈るやうに障子を明けて外を見ると、まつくらで雨が降るはげしい音だけである。『兄さん行かん事〳〵。外はまつくらで。』と言ふと、兄は外を見て　なあにが魚をとつて、もどつてやるい。』と笑つてゐる。どうしてもきかないので、母は破れた着物を出した。兄はそれを着て『魚をとつて、もどつてやるい。』と笑つて出た。僕は心配でたまらない。ねて居たが、ねられないから本を見て居ると、雨の降る音がして、本を讀んで居ても、兄がけがをしなければよいがと思ふ不安がつゞく。

電燈がきえた。僕は仕方がないのでねた。ねても早くもどればよいがと思ふが、魚を一つぱいとつてもどればよいがとも思ふ。其の中にねむたくなつてねた。

目がさめると『兄さんは。』と知らずに言つた。

『兄さんは魚をとつてもどつてゐる。』と臺所から母の聲。いきなりおきてビクを見ると、うなぎが七匹居た。うれしくなつて弟や妹を

した。裏のやぶですずめがやかましく泣いてゐます。夕日は淋しく西におちて行きました。

うれしい朝飯（賞）

山口縣熊毛郡鹿田校高一
末廣朝人

ばんになると雨はいつそう降り出した。兄は『魚をとりに行くぞ。』と言ふと、母は『風を引くから行おこした。

弟は『兄さん等が學校に行つた間に皆食べちやる』と言ふと妹が『お母さん、少しのこしておいて。』と泣聲で言ふ。兄は『そをら見い。行つた方がよからうがやあ。』と笑つた。

僕等は、うれしい朝飯にむかつた。

『マキ　北鶯
ちや　海泊
んや』　道村
佐藤
錠二

いやな雨（賞）

崔原郡入新井第三校尋六
山田加壽子

豫習がおはつて歸へらうとしてゐましたら、山本さんが『咲花さん、一つしよに遊びにいらつしやらない。』とおつしやつたので、咲花さんと相談したうへ、行くことにきめました。

『もし用があつていけませんでしたらば、電話でおことはりします。』と山本さんにいつて、飛ぶやうに家にかへりました。かへつて見ると、家はたたみがへでごた〳〵したゐましたので、遊びにいけないのかしらと思ひましたが、お母様に『今日、御飯をいただいてから、山本さんのお家に遊びにいつてもよございますか。』とおきゝすると『よろしい』とおつしやつたので、いそいで御飯をいたゞきました。間もなく電話がチリンチリンとかゝつて來ましたので出て見ますと、咲花さんの聲でしたので、『どなたでいらつしやいますか。』とお聞きすると、『咲花でございますが、加壽子さんいらつしやいますか。』とおつしやつたので、私はおかしくて思はずふき出してしまひましたら、向ふでもわらひごゑがしました。私が『何かご用』とおきゝすると『今日山本さんのお家にいらつしやる？』ときかれましたので『ええ。』とお

『花』　琴六　山崎豊

つしやいました二人はしばらく空をながめて居りました。

其の中に大つぶの雨がバラバラ降り出しましたので、家の中に入りましたが『行きませうか、よしませうか。』で、なか〳〵きまりそうもありませんので、お母様に『いつてもだいぢやうぶでせうか。』とお聞きすると『せつかく咲花さんも來ていらつしやるんだから、いつたらいゝぢやありませんか。』とおつしやいましたが、途中でひどくふるとこまりますから止めました。せつかくたのしみにしてゐたのに、この雨でいけなくなつてしまつて、ほんとうにざんねんです。

ひよつ子が死んだ事

東京市外杉並町女子大附屬高女一年
中島泰子

家のひよ子はもう大分大きくなつて、雄はもうときをつくるやうになりました。今ゐる大きい雄は、もう、大分おぢいさんになつたので、今度のひよつ子の雄を、あととりにしようと言つてゐました。一昨日の朝からあとゝりになる雄は、元氣がなくて餌も食べず、鶏舎のすみに一人でしやがんでゐたので、皆はどうしたんだらうと心配してゐました。お晝頃からとさかの色が紫色になつて、じーつと下を向いて人がつかまへやうとしても、逃げる勇氣がありません。とりごやのとまり木に止まらせてもすぐ落ちてしまふので、卵を生む箱の中に入れておいて、私は早速カラシ水をこしらへてのませました。仲間のヒヨッ子は心配さうに、箱のある所へのぞきに行きます。邊りはうす暗くなつて、いつも鶏を鶏舎に入れて寢かす時分になつたので死にさうなひよつ子をそつと鶏舎に入れて、私は言ひました。『あしたの朝迄でもいゝから生きてゐてね。』と言ひましたが、もしかすると今夜死んでしまひはしないかしら。そうするとひよつ子の顔を見るのも今だけだと思つて、顔をよく〳〵見ました。ひよつ子も私の顔を見てゐるやうでした。私はいや〳〵鶏舎を出て、其の晩は床に入つてから『ひよつ子が死にませんやうに。』とお祈りをしました。よく朝早く目をさまして、第一にひよつ子を見に行きましたが、悲しい事には、鶏舎のすみにくびをダランと下げて死んでゐました。私はガッカリして悲しくなりました。そしてお墓を、庭のすみにこしらへました。

『顔』　東京市芝區榮町　深野小太郎

幼な子

千葉縣長生郡茂原校高一
浦島喜久雄

さつきから小屋の壁によりかゝつて、さめざめと泣いて居る腕白らしい小さな男の子があります。母にでも叱られたのでせう。暑い夏の日が、小屋の壁と幼な子の背とを、じりじりてらして居ます。そこへどこからとんできたのか、小さな蝶々がヒラヒラと泣いてゐる子のまはりをまはつて居たが、やがて、小屋のかべにとまりました。今まで泣いてゐた子は、はたと泣きやんで、涙でよごれた小さ

『サイネリア』
東京市町崎
伊勢
沖津清流

い黒い手で、そつと蝶々をとらへようとしたが、もう少しで、蝶々はひらひらと羽を動かしてとび上りました。男の子はうらめしそうにとんでゆく蝶々を見つめてゐたが、姿が見えなくなると、又思ひだした樣に泣きだしました。

人形

秋田縣仙北郡荒川村上荒川高一
岩谷市郎

『兄さん。文ちやんを直してやつて……』とさし出された人形を見ると、私は思はず吹き出しました。片手と片足のひざから下が、もぎとれて、其の上鼠にでもかまれたらしく、鼻はむごたらしくかけてゐるのです。『ねエ、直してやつて……』泣出しそうな妹のこゑに——私ははつと氣がつきました。今笑つたのがたまらなく悔ひられました。『あゝ直して上げるよ。』私はすぐ白い紙で、鼻のかつこうを作り、飯粒でつけてやりました。着物もきちんと着なほさして、初めて晴々とした妹の顔を見ると、私もゆくわいに思ひました。翌日『文ちやんは?』と何氣なくたづねると、一寸くらい顔をして『だくといたい〳〵』と泣くのよ。』と言ひ乍ら、戸だなを開けて見せました。小さなモスのふとんにくるまつて、ぎようぎよく不具の文ちやんがねてゐました。其の枕元に、まんぢゆうが半分おかれてあります。私は、いじらしさで胸一つぱいになつてしまひました。

山がり

宇治山田市立第三學校尋六
中西榮之助

ホスはうれしそうに、尾をちぎれる程ふりながら、僕等の先へ行つては又戻つて來たりしました。

道は小さいだんだら坂で、あたりの林には、もう紅くもみじして居る木がたくさんありました。

『あ、ちよつとお待ち。』一しよに歩いてた叔父さんが、何かゐものを見付けたらしく立止りました。ひくゝ僕が口笛を吹くと、ホスはすぐ草むらから出て來ておとなしく坐りました。叔父さんは肩から鐵砲を取り下すと、前の木の枝へのせて、ねらひを定めて居ます。僕はだまつて、つゝ先の方を見ると、すこしはなれた杉の木のてつぺんに、大い、美しい、一ぴきの鳥が、まるい目をくるくるさせながら止つて居ました。

『ズドン。』私は、はつと思ひました。白い煙りがそこいら中、一ぱいになりました。『あたつたぞ。ホス行け。』ホスは風のやうに、草むらの中へ、消えて行きました。

『僕の顔』
福岡縣城内校
今泉恭二郎

教員室

水戸市外淀里村大字渡里
中山將善

校長先生は居るかな、と私は一種不安を感じながら、ドアーに手をかけた。開けやうかどうしようと私は、暫らくためらつた。室内の樣子が次から次と思ひ出される。校長先生の顔、先生は何と言ふだらう。先生達が戸を開けると一齊に視線を向けるだらう。其の時にはどうしよう。不安はますます高まつて、室内に入るのが恐ろしくなつて來た。先生はどうして私などに此んな用を頼むのだらう。先生自身が行けばいゝのに、と頼んだ先生が、うらめしくなつてくる。こんな風にしばらく教員室に入るのをためらつて居た。と突然室内で笑聲が起つた。自分の事で先生達が笑つたんだらうと考へられ、一層中に入るのが嫌になつてしまつた。運動場で何の心配もなく、愉快に面白さうに遊んで居る皆んなを見てうらやましくなつた。向うから誰かが廊下を歩いて來る足音が聞えた。

通信

自由畫選評

山本鼎

△岩田繁夫君の花の水彩畫（推賞首席）――うま味のある描寫です。筆がなか〳〵利いて居る。色の感覺もいゝ。欠點は處々流れたやうになつて居る事です。水を多くして描くのもよいが、出來上りの時そういふ流れたやうな處を流しつぱなしにしておかずに、ひきしめる筆致を加へておかないといけません。

△佐藤錠二君の『マキちやん』（推賞次席）――姿勢がうまくとれて居ます。右脚が少しおかしい。顔の描きぶりも面白味があつていゝ。

△山崎豊君の花、花其物が一つかり描けて居る。それはいゝがまわりの物が煩るまづい。臺の布にしろ、花瓶にしろ賞にいやな色だ。バックの青い色の片ぼかしは全々いけない。それから輪のなかへ黑でこんなに大な字を描き込むのは惜しい。名まへなどは裏へおかきなさい。紙の面へ描くものは點一とつでも役にたつたり、ぢやまになつたりしますから注意しないといけません。

△深野小太郎君の『顔』顔の處はよくかけて居る。殊に眼から鼻の處がいゝ、ですが髪の毛がいけません。面を注意して描かないから其處だけ平べつたくなつて居ます。それからバックの線がでたらめで粗墓で顔を害して居ます。

△沖津清流君の『サイネリヤの花』デッサンはしつかりして居て良いが、色が少しきたないですれそれから物を濃い淡の方面から見ないのでいやに暗く見えます。

△今泉悲二郎君の『僕の顔』形はよくとれて居るが色が惡い。クレイヨンは全體自然の色を出しにくいものですが、モデルの色や測手をよく眼にとめて描けばこんな變な色彩にはならぬ筈です。（十月十五日）

幼年詩選評

若山牧水

▼子供の歌に短いのが大概佳い。長いのになると説明くさくなつて、だれがちである。それが今度はその長いのに佳作が大分あつて嬉しかつた。

▼一つの學校から澤山よこされた人たちに一寸お詫びします。出來るだけ一般的に採りたいと思ふので、同じ程度に佳く出來てゐてもその學校組のを後にすることが間々あるのです。で、誌上に出てゐるのと同程度若しくはそれより少々優れたものがともすると選外にならぬとも限らぬのです。あしからず思うて下さい。

童話選評

齋藤佐次郎

○今月はいゝ作のなかつた月です。どれもこれも感心する程のものがありません。

○それで、今月のところは、前月推薦作として掲載する筈になつてゐた『鼓師と仔狐』を出す事にしました。尚この外に沖野先生の推薦になる『矢くらべ』を掲げました。沖野先生の推薦だけに如何にも沖野先生張りのもので、靜かな氣分の中に、人生へのある教訓を持つ作です。

綴方の選評

齋藤佐次郎

△久し振りに面白く選をしました。いゝ作がなか〳〵ありました。相變らず少女の方にいゝ作が多いやうです。今月などもさぞ〳〵すると、若な入賞作を少女の方に奪はれるところでした。

▽山本みゆきさんの『住みなれた家』は殊に優れてゐました。力のこもつた立派な作だといふことが出來ます。

▽末弘朝人さんの『うれしい朝飯』は山口縣熊毛郡鹽田校高一の數ある作の中から此の一篇を選びました。この頃の鹽田校の作はいづれもいゝ作ぞろひです。少くも二三篇は入選にしたいと思ふ程いゝ作があつたのですが、紙面の都合もあつて、殘念ながら一篇だけしかとれませんでした。

▽山田加壽子さんの『いやな雨』は實に面白い文章だと思ひました。なか〳〵と何處が切れ目かわからないやうに長い文章が書いてゐますが、それが丁度お話上手な人のお話のやうに、實にスラ〳〵と巧く行つてゐるのです。全く面白い文章です。

▽中島泰子さんの『ひよつ子が死んだ事』この作も力が入つてゐて、讀んだ後に印象が深く殘ります。

▽浦島喜久雄さんの『幼な子』は一篇の詩といつてもいゝでせう。かういふ作は惡く書くと、ずゐぶんいや味なものですが、それが無くてよくいつてゐました。

▽岩谷市郎さんの『人形』可憐な少女の心持をうまくとらへました。

▽中西栄之助さんの『山がり』秋の山の氣分が出てゐます。これも惡落ちがしないでよかつたと思はれました。

▽中山將壽さんの『教員室の前に立ちて』少し心持ちにかざりがあるやうに見えます。もう少し、そつちよくに書いて下さい。

▽木藤浦子さんの『スイッチヨ』は無難な作です。

▽松澤恭三さんの『秋の朝』は實に氣がきいて、ハキ〳〵と胸のすくやうな筆法は面白いですが、物の見方に不自然があります。特につくつて物を見ないで、も少しゆつたりとのんきに見る必要があります。

童謡の選後に

野口雨情

よき童謡は出來る秘訣があらば知りたいと云ふ意味の通信が、點安のお方から來ました。尤も、これと同じやうな意味のおたづれが、これまでにも澤山ありましたが、その都度、童謡はその人の會得にまつより道のないことを申上げておきました。しかし、考へてみますと、初學のお方には、それでは餘りツッケないと思はれますから、秘訣と云ふ意味でなく、一番大切な注意について申上げておきませう。

先づよき童謡を欲するお方は慾の深い考へを捨てることがかんじんです。この慾の深い考へと云ふ意味は、金の慾とか、名譽の慾とか物質や人爵上の慾でなく、その作品の中に、これも言ひたい、あれも言ひたいと、考へ〳〵並べ立てゝ、円容を如何にも豊富らしく、思はせやうとする、その慾の意味であります。その結果が、その作品は、デパートメントのやうな、横幅は廣くも薄つぺらな、奥行きのない、詩趣の欠けた、ゴツ〳〵したものになるか、さもなくば、厚化粧に、雲たかぶつてゐるやうな、キザなものになつてしまひます。ゴツ〳〵したものや、キザな作品では、いくら盛り澤山の内容でも、童謡（童心藝術）とは云へないのであります。童謡の本質からしても、よき童謡は、温みがあつて、さらりとしたもので、しかも、その作品に接したとき、超知識的に、昔ひ知れる心のほゝ笑みを感するものであるのです。それには、慾を捨てゝ出來るだけ單純に、素朴に、詩趣をそこなはぬやうにすることを忘れてはならないのです。ところで、この單純と云ふことは、誰れにも出來さうであつて、實際は六ケしいものであります。下手にしまつと一つの言葉になつてしまつたり、又は餐句じみたものになつてしまつたり、隨分妙なものになりやすいですから、この點にも注意が大切であります。

編輯室より

（記者）

○途に十二月號となりました。金の星の第七卷も無事に終る事が出來ました。一ケ年つゞいた加藤武雄先生の名篇『小鳥は空に』も三井信衛先生の『四つの幽靈』も、その他大鳴采を受けたすべての讀物も全部めでたく完結しましていよ〳〵第八卷の新年號を迎へる事になりました。

○新年號は豫告の通りの傳立で、他誌に見られない立派なめざましいものです。御覧の通り讀物は各大家の傑作ぞろひですし、附錄は最も新しい趣向をこらしたステキに面白いものです。十二月の十日には各地の書店に現れますが、編輯部一同が最大の努力をしたものであります、必ずや皆さんから喜んで迎へてゐたゞけるでせう。

（講演だより）

信州上林溫泉から

沖野岩三郎

山梨縣鳥澤小學の講演を終つて、信州輕井澤の千ケ瀧へ來たのは七月の十九日でした。『日本の兒童と藝術教育』の原稿は、意外に手間取りました。しかし、言ひたい事は殆ど書ひつくしましたつもりです。出版の曉には、どうか此の書物が、幾分でも日本の教育者諸君や父兄諸君の御參考にしていたゞけるやうにと心から願つてゐます。

千ケ瀧のグリンホテルで、童話會を開いたのは八月廿二日の午後二時でした。海拔三千五百尺の高原で、百人あまりの幼少年諸君と樂しい時を過し得たのは幸福でした。

九月五日には、輕井澤小學校で、附近各小學校の先生達と會合して、私は『兒童藝術教育と日本の武勇傳』について三時間の講演をいたしました。其の前夜、輕井澤萬平ホテルで、尾崎行雄さん、小野塚喜平次さん、岡實さん、山本有三さん、安部磯雄さんなど十五六名集つた席上、私は現在の日本童話運動について一時間餘りお話したのでありましたから、隨分疲れて歸りました。尾崎行雄さんに、私の童話論に對して深く共鳴されました。

それから九月十一日には、小諸小學校へ招かれて行きました。小諸小學の校長さんは、元長野師範學校の校長を勤められたお方で、當時文壇で有名な正木不如丘さんのお父樣です。

私は午前中千人程の子供さん達に、二回お話を致しました。みんな喜んで聞いて下さいました。午後職員の方達にお話いたしましたが、話す私も聞く先生達も、みんな疲れてゐました。話が終ると直ぐアクビの聲が聞えました。私の話は失敗でした。

其後私は北海道へ行く筈でしたが、自分の用事が忙しいので、私のお友達である鹽谷羊次さんが、私のかはりに行つて下さいまして、今、北海道のあちこちで、私の書いた童話、『熊の袋』と、今度出版した『金の釣瓶』に載つてゐる『十人の大將』とをお話してゐます。

鹽谷さんは、私よりも、ずつとお話が上手ですから、北海道の子供さん達は、さぞ大喜びであらうと思はれます。『十人の大將』になつたヤンボン」が北海道の子供さん達と仲よくなつてくれる事を祈つてゐます。

私は今、上林溫泉に來て原稿を書いてゐます。讀者諸君の御健康を祈りつゝ。

——九月廿六日——

自由畫掲載外佳作

福井　武平（愛知）　椿原　英二（福岡）
岡村　眞楯（東京）　豊島　泰（山梨）
中坂石次郎（東京）　目島　章平（埼玉）
古賀　文子（福岡）　飯守　武雄（和歌山）
山村　加枝（熊本）　岩谷　貞三（秋田）
吉岡　清治（石川）　丸茂　五郎（山梨）
内山　秀郎（東京）　井上ワカ子（長崎）
竹田八千代（東京）　江草　正孝（東京）
藤井　進吉（不明）　原田　信秋（大阪）

幼年詩掲載外佳作

竹田八千代（東京）　林　逢介（山口）
下川スマエ（福岡）　山崎　功（東京）
河野　浩（朝鮮）　中山　明（山梨）
吉田　貞夫（福岡）　塚本　久雄（福岡）
高吉　きん（千葉）　茶木トミ子（神奈川）
武田　武一（東京）　河西　一雄（山梨）
友川　文雄（山口）　岸本みどり（千葉）
土橋　小春（山梨）　河野正三郎（朝鮮）
岩谷ヒデ子（秋田）　森本　康雄（熊本）
福島　勇（山口）　高橋吉之助（東京）
木村　正夫（東京）　大藏　利雄（東京）
岩村　清三（熊本）　塚本　豊（福岡）
古賀　典雄（福岡）　下川ミサヲ（福岡）
川島　秀雄（東京）　大内　力（東京）

綴方掲載外佳作

山本知惠子（山口）　海達　公子（熊本）
森本　康雄（熊本）　北島　正三（東京）
村岡　繁（山口）　小川　壽郎（神奈川）
島野　牛平（神奈川）　進藤　元夫（廣島）
木村　勇（山口）　末弘　房子（山口）
清水　繰（山口）　船越　厚（栃木）
岸　久子（東京）　岡本　晉三（大阪）
大久保弘司（神奈川）　廣澤　孝一（東京）
井口　潤一（長野）　磯貝金之助（東京）
茶木トミ子（神奈川）　山内　和子（東京）
山本　秀一（和歌山）　宮崎　英（東京）
岩本みどり（千葉）　藍郷　正治（千葉）
田中　顯德（千葉）　岩川　逸平（東京）

童話掲載外佳作

【大人篇】

三浦　大船（新潟）　竹前　健山（梨）
内川　清臣（長野）　杉本　愈作（東京）
早田　稔大（和歌山）　山崎　勝治（東京）
橋爪　白川（長野）　伊藤　呑平（愛知）
大島　尙子（兵庫）　野澤　鶴平（新潟）
坂中　澄晴（和歌山）　正木　正一（東京）
青山　重之（神奈川）　門田　洋一（東京）
茶木　七郎（神奈川）　中坂石次郎（東京）
長谷川好延（埼玉）　井上ワカ子（長崎）
船越　厚（栃木）　岩木　克巳（東京）

【子供篇】

西川　一枝（岐阜）　高木　實（東京）
金峯　愛子（山形）　矢澤　清（埼玉）

竹田八千代（東京）　近藤　俊雄（栃木）
河野正三郎（朝鮮）　水越　恒夫（神奈川）

童謡掲載外佳作

【大人篇】

小山　繁三（山形）　野村　雅夫（東京）
五味くに三（山梨）　岡本　晉三（大阪）
藤野ふくを（大阪）　宇川マサ子（德島）
佐々木皎一（盛岡）　山口　菊造（三重）
福永幸次郎（京都）　早川　靜男（大阪）
田中　初夫（朝鮮）　椿原　龜一（福岡）
森　一（東京）　大島　尙子（兵庫）
佐藤　靜枝（神奈川）　岡山　純美（神奈川）
高橋　年路（岐阜）　深山　俊夫（長野）
成川ふた葉（靜岡）　鈴木　秀男（東京）
川口　洋（東京）　湊　一郎（東京）
森本　清一（山口）　小鳥　奉雄（東京）
中西　靜夫（三重）　小林　重義（東京）
森　ほたる（愛知）　深野小太郎（東京）
中村　武男（東京）　鬼塚　陽（宮崎）
河野　砥吉（朝鮮）　成瀨たか子（福島）
大島まさを（東京）　飯田　善三（京都）
宮尾　進（臺灣）　宮本　範吉（熊本）
川上　健路（東京）　船越　厚（栃木）
西野　光兒（岩手）　小谷　時信（鳥取）
山内　敬和（高知）　大隅　重雄（東京）
田中　信一（兵庫）　佐藤いさ夢（神奈川）
成瀨たか子（福島）　福井　勝秋（東京）
伊藤　芳夫（東京）　山本　秀一（和歌山）
三島　定市（島根）　手塚　敬三（神奈川）
河村　正雄（富山）　河邊すみ子（神奈川）
鈴木　一三（岩手）　橋本長四郎（東京）
秋中　三年（秋田）　中村ひろたか（埼玉）
原　勝利（東京）　田中　義郎（京都）

【子供篇】

古谷　そめ（茨城）　荒川　サイ（群馬）
長田フミエ（熊本）　柴　クニ（茨城）
青木たけの（群馬）　小川　肇（熊本）
飯村　禮子（茨城）　石井晉次郎（千葉）
山本喜代藏（鳥取）　荒谷　倉二（愛知）
中村　敏雄（愛媛）　湯上マサ子（熊本）
内川　成喜（長野）　清水　政人（山口）
山本知惠子（山口）　山本　夏彦（不明）
問鍋　忠次（山口）　齊藤　福子（東京）
林　彰（東京）　羽仁　三郎（東京）
山崎　功（不明）　才一（京都）
黑野　廣子（和歌山）　後藤　賢三（東京）
牛丸　一男（東京）　熊膳　久吉（東京）
藺田みはる（長崎）　森本　正大（兵庫）
小口壽滿子（長野）　近藤　國男（東京）

新誌友名簿

大串　章（茨城）　笹川　恭一（大阪）
進禮公立小學校　土捷　繁雄（東京）
兒童文庫（朝鮮）　土橋　壽（山梨）
平澤　靜男（東京）　中坂石次郎（東京）
穗口　義次（臺灣）　（以下次號）
河谷　松枝（山口）

大活躍の本誌

『金の星』新年號は例によつてめざましい大活躍を致します。殊に今度の新年號は最も自信あるものでありまして、童話に童謠に長篇に、『金の星』獨特の編輯振りを發揮いたします。殊に新年大附錄の『寶の山探險双六』は非常に面白い工夫をこらした壯麗なものでありますから、必ず皆さんから喜んで迎へていたゞける事と信じます。

童話、童謠、繪畫は、毎號『金の星』おなじみの作家が新年號には特に苦心の作を發表なさる外に、新進の作家の元氣ある面白い作も澤山に出ますが、特に左の二大家の名作を掲げます。

創作童話……菊池寛
歴史童話……田山花袋

長篇は左の三篇であります。何れも傑作揃ひでありますから、必ず大評判となりませう。

愛犬物語……小島政二郎

あめりかの北方カナダの雪の中に起つた犬と人との悲壯な物語りです。小島先生が最も大きな自信をもつて世に問ふ一大名作であります。

五百七號室……三井信衛

新年號の豫告

あゝ無情……久米舷一

『名曲、嘆きの薔薇』『四つの幽靈』で皆さんから大喝采を受けた三井先生が最近に得た或る事實談をもとにして書き上げた傑作です。奇々怪々な出來事が後から〳〵と現れ一回ごとに讀者の胸をおどらせる雄篇です。

原作は佛蘭西の文豪ユーゴーの作として世界的に知られてゐるものです。主人公ジャンバルヂャンが貧のために一切のパンを盗んだ事から長い牢獄生活をする事にはじまつて、千變萬化の一大物語となり、或は手に汗を握り、或は涙無くして讀めぬ場面が次から次へと開展する眞に世界的名作の悲壮な紹介です。

（特別大附錄）

寶の山探險雙六

寺内萬治郎畫
金の星編輯部案

この雙六は非常に面白い趣向でこらしてあります。めい〳〵が寶の山へ寶を探しに行くのですが、出發の時一人々々が變つた動物を連れて出發するのです。その動物の働きによつて早く寶の山に着いたり、或は失敗したりするのですから、途中がそれは〳〵面白いのです。やり始めたら、とても面白くて堪らないものです。新年の遊びとして大喝采を受ける事を信じます。

金の星社 十二月號 出版だより

今月は左の三冊の本が新刊として發行になります。

◆ジヤンヌ・ダーク（近刊）
オルレアンの少女

大木雄三先生著
定價九十錢 送料六錢

『世界少年少女偉人傳大系』の第一篇で、十一月半頃に出版の豫定です。百佛戰爭の當時、不思議な少女があらはれて佛蘭西を滅亡から救ひました。その少女こそ皆さんの御承知のジヤンヌ・ダークでありまして、その一生は實に世にもめづらしい悲壯なものであります。田舍娘のジヤンヌが奮起して母國を救ふために、眞先に立つて佛蘭西國旗をひるがへす姿を想像してごらんなさい。そして幾度かの激しい戰の後に遂に捕はれの身となつて、火あぶりにされる迄の悲しくも哀れな場面を想像してごらんなさい。少年も少女も、この物語を讀まずにゐられませうか。『金の星』でおなじみの大木雄三先生が非常な苦心のもとに出來上つたものでありますから、讀みごたへのある立派な名著です。ジヤンヌ・ダークの話を書いたものは外にも一二冊ありますが、到底この本と比較にはなりません。

裝幀も插畫も金の星社の最も自慢にしてゐる美事なものです。表紙は船系クロースの極く美しいもので、それにいろ〳〵の裝飾をほどこしてあります。箱や插畫は寺内萬治郎畫伯と柳田謙吉畫伯とがお得意の筆をふるつてゐます。定價は名著大系と同樣の九拾錢です。名著大系をお愛讀下さつた方は勿論、お讀みにならなかつた方にも、是非讀んでいたゞきたい本であります。

◆日本の兒童と藝術教育（近刊）

沖野岩三郎先生著
定價壹圓八拾錢 送料六錢

本書も十一月半に發行なります。出版に手間どつてなりましたが漸く近日發行となりました。かつて豫告した通り沖野先生の童話論でありますから、兒童文學及教育にたづさはる人は勿論それに多少でも興味を持つ者は誰でも一度讀んで置かなければならない本で、この本を讀んだ後と讀まない前とは、皆さんの思想がきつと變るに相違ないと思ふほど問題になる一大著述です。恐らく、我が國にこれだけ立派な意見を發表した童話論はありますまい。近頃での一大著述でありますから、是非度く讀んでいたゞきたいと存じます。

◆名所めぐり（近刊）

金の星童謠曲譜集(10)

『名所めぐり』は皆さんから最も待ぞまれてゐた曲譜集です。曲と作謠者は申す迄もなく皆さん御承知の通りですが、裝幀は寺内萬治郎畫伯が木版九度刷の美しいものを描いて下さいました。

これで金星童謠曲譜集も遂に第十輯となりました。日本の童謠曲譜集として、數からいつても、內容からいつても、これだけ立派に完成されたものはありません。これも本社の誇の一つであります。

『世界少年少女偉人傳大系』は左の本が順次發行になります。

(2) 英國の名將 ネルソン 三宅房子先生著

(3) ローマの英雄 シーザー 霜田史光先生著

(4) カルタゴの勇將 ハンニバル 西川勉先生著

（以下續刊）

（送料に就て）

金の星社發行の書籍は、成る可く御近所の本屋さんで買つていただきたいのでありますが、本屋さんに品切の場合、或は本屋さんが近くにないやうな處の方々のために、特に御便宜をはかつて、送料は各冊とも金六錢といふ非常に安い送料で差上げることになつてゐます。どうぞどし〳〵御申込み下さい。

讀後感を募集します。

出版部

金の星社發行の書籍に就て、皆さんがお感じになつたことを、そのまゝ遠慮なく記してお送り下さい。よい批評には賞品を差上げます。

◆『西遊記』を讀みて（賞）

聽友 武部政一

私はたびたび西遊記を讀みましたが、或は一部分を拔萃したものとか、極めて粗雜に抄譯されたものとか、または餘りに詳しくて長く、隨分讀書に熱心な方でなければ全く讀み得ない樣な有樣です。今度金の星社の名著大系で發行になつた、西遊記は讀んで見ると面白くて、簡單で文章もよくしてありますので、スツカリ氣にいつてしまひました。皆樣西遊記は唐の玄奘三藏が太宗皇帝の勅命を帶びて、長安の都から、はるばるお經を取りに、天竺大雷音寺まで十萬八千里と言ふ長い道中を、猛獸や妖怪や、其の他の出來事と闘ひ乍ら、前後十四年を費して、再び長安へ歸つて來るまでの、非常に面白い物語です。お供には悟空、八戒、悟淨の、三人の怪物がついて行きます。悟空はもと花果山の靈石より生れた石猿で、七十二般の變化の術を使ひ、一時に十萬八千里を飛ぶ觔斗雲を呼び起し、又金さう棒と言ふ、延ばせば天までもとゞき、ちゞめれば、僅に二三分の針となつて耳の中にしまひ込む事の出來る寶物を持つてゐます。八戒や悟淨もそれぞれ變化の術を使ひ、又寶物を持つてゐます。桑篇が金の星に出てゐた孫悟空と牛魔王のやうに、冒險な物語です。かくの如き、物語ですから、全く面白いのも無理はありません。皆樣にも御一讀をお薦め致します。

（講演だより）

童話の旅から

鹽谷羊友

九月一日から二十日まで、秋田市の小學校を始めとして、田舍の小學校二十校で、合計五十一回の講演をしました。人數にすると、一萬四千三百名以上の人に話して居ります。

十九日には、市內の旭南小學校と保戸野小學校で『オヤヂ大安寶』のお話をして皆んなに泣かれました。私は泣きませんでしたが、もう少しで泣く所でした。その翌日は、花輪町學校と毛馬內町學校でお話しをしました。

二十一日の朝三時、大館を出發して青森へ行きました。少し休んで、八時の函館行き汽船に乘り込みました。あまり疲れたので、ゴロリと横になると、もうグウ〳〵高鼾でねてしまひました。

ポーッと鳴つた汽笛にびつくりして眼を覺し、窓の外を見ると、青い海の向ふは一面の帆柱、その向ふは家だらけ、その向ふは山だらけです。函館の市街はだん〳〵になつてゐて、山の中腹まで家が建つてゐます。

翌日から住吉小學校長池田先生の紹介で、十月の三日まで市內の學校十三と、市外三校に二回づゝ、三十二回、二萬人以上の子供さんにお話をしました。演題は沖野先生の作『十人の大將』及び『鑑まれた熊の袋』で、皆んなは、大喜びで喝采してくれました。

函館のみなさん。來年は是非沖野先生と二人で參ります。其時また御會ひ致します。是非愛讀者會を開いて、もつとよくみなさんと御友達になりたいと思つてゐます。ではさようなら。

懸賞創作募集

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

【注意】題目は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものな、諸君のすきなやうに靈なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方になるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號締切は十一月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は二月號、宛名は東京市本郷區勸坂町三五九番地金の星社。

童謡……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

【注意】童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づゝ、特選の場合は童話には拾圓、童謡には五圓づゝ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金四拾錢　送料壹錢五厘
三ヶ月分三冊（送料共）壹圓貳拾錢
半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
一ヶ年分十二冊（送料共）四圓八拾錢
但し新年號は特別號で五十錢ですから、御注文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい

振替口座東京五九五九六番

【送金の注意】
▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御所いよす
▽切手代用は（壹錢切手）一割增しです
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十四年十一月九日印刷納本（毎月一回）
大正十四年十二月一日發行（一日發行）

東京市外田端三百五十一番地
編輯兼發行人　齋藤佐次郎

東京市麻布區鎌町三丁目二十五番地
印刷人　小端安之助

東京市麻布區鎌町三丁目二十五番地
印刷所　安邑堂

東京市本郷區勸坂町三五九
發行所　金の星社
振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

第二回傳說童話募集

『金の星』が各地に傳へられてゐる傳說童話を始めて募集したのは、昨年の一月でありましたが、その結果は非常な好成績を擧げて、日本の童話界に偉大な反響を與へました。

童話の世界的珍寶といはれてゐるグリムの名作も、アンデルセンの名作も、殆ど凡てがその國に傳へられた傳說を基礎としてゐる事を思ふと、我が國も是非今の內に、各地方に傳へられてゐる傳說童話を研究して、それ等の中から後世に傳へるべき價値ある尊い話だけを選んで集める必要を感じます。

第一回の企に成功した我が社は、こゝに第二回の募集を行つて、日本の童話界のために貢獻したいと思ひます。左の規定に從ひ、奮つて應募下さい。

選者　沖野岩三郎先生、野口雨情先生、齋藤佐次郎先生。
賞金　一等（一篇）金參拾圓。二等（二篇）金拾五圓。三等（三篇）金七圓。
原稿枚數　二十字詰二十行原稿用紙十枚以內。
締切　一月二十日。

ほるぷ出版複刻版'83

K2A-31

おもしろいためになる

大正拾五年

ライオン當用日記

が出來ました。

その別冊附錄は、

みな樣がおよみになつても爲めになり、
お父樣やお母樣がお讀みになつても爲めになり、面白くつて、新しい知識が澤山入れてあります。

ぜひぜひお買ひ下さい。

定價 ［總クロース上製 金壹圓
天金背革特製 金壹圓卅錢］
送料金拾貳錢

ライオン齒磨本舗廣告部
東京市本所區外手町
振替口座東京四八三五五番

代金引換謝絶

『金の星』第七卷第十二號（大正十一年六月十三日）　大正十年十一月九日　印刷納本　『記錄』第四十號　金の星社